

# 八坂別所遺跡・頭地遺跡・栗下遺跡・メノト遺跡

県営農地総合開発整備事業東山口地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2006

掛川市教育委員会



# 八坂別所遺跡・頭地遺跡・栗下遺跡・メノト遺跡

県営農地総合開発整備事業東山口地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2006

掛川市教育委員会



## 例 言

1. 本書は、県営農地総合開発整備事業東山口地区に先立ち、平成7年度から平成11年度まで発掘調査を実施した、静岡県掛川市東山口地区に所在する八坂別所遺跡、頭地遺跡、栗下遺跡、メノト遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、静岡県中遠農林事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもと、掛川市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は、掛川市教育委員会の大熊茂広が担当した。
4. 発掘作業ならびに整理作業で下記の方々に参加を得た。  
青島信二 木村治郎 横山正氏 山崎辰雄 石上當治 田辺富士夫 松浦弘司  
西田泰子 伊藤とよ 井筒いつよ 鈴木とし江 岡田あき江 岡田あき 久保井美代子  
山崎美智子 岡本暁美 岡田あい 水野なつ 河村ちる 戸塚英美子 中山芳枝 鳥居京  
渡辺二三代 杉山みち子 杉山まさ子 田辺洋子 竹村和紀 榎葉豊子 高橋直美 山下広美  
上山貴代子 笠谷みゆき 早乙女のぞみ
5. 現地調査ならびに報告書作成にあたっては、以下の方々、機関に、ご教示、ご協力をいただいた。ここに記して、深く感謝申しあげたい。(五十音順、敬称略)  
岡村渉 加藤賢二 西尾太加二 廣川達麻 松井一明 向坂綱二 東山口地区土地改良区
6. 報告書作成は掛川市教育委員会教育文化課文化財係で行った。弥生土器、須恵器と陶器の実測及び執筆は文化財係前田庄一が行い、遺物の写真撮影は同村松弘規が行った。本書の編集は大熊が行った。
7. 石器及び特殊遺物の実測は髙アルカに業務委託した。石器の記述は、アルカの高橋哲氏の報告を元に行っている。また、自然科学分析を髙パレオ・ラボに業務委託した。
8. 調査によって得た資料は、すべて掛川市教育委員会が保管している。

## 凡 例

1. 挿図における方位は、座標北を示す。
2. 本書で使用した遺構名称は以下の通りとした。  
SB：竪穴住居跡 SD：溝状遺構 SF：土塚  
SH：掘立柱建物跡 SP：柱穴及び小穴 SX：性格不明の遺構
3. 遺物の番号は、挿図と写真図版と同一である。
4. 調査区の名称は、静岡県中遠農林事務所にて使用された、道路及び排水路の名称を便宜的に使用している。

# 目 次

## 例 言 凡 例

I 発掘調査と遺跡の概要	
1. 調査に至る経過と調査の目的	1
2. 調査の方法	1
3. 遺跡をめぐる環境	1
II 八坂別所遺跡の調査	
1. SR1調査区	4
1) 遺構	4
2. 耕地切り下げ部分調査区	4
1) 遺構	4
3. SR2調査区	4
1) 第1面の遺構	4
2) 第2面の遺構	5
3) 第3面の遺構	5
4. D1調査区	5
1) 第1面の遺構	5
2) 第2面の遺構	5
5. 出土遺物	5
1) 土器	5
2) 特殊遺物	7
6. まとめ	7
III 頭地道跡の調査	
1. SR3調査区	39
1) 遺構	39
2. SR4・5調査区	40
1) 第1面の遺構	40
2) 第2面の遺構	41
3. D3調査区	41
1) 第1面の遺構	41
2) 第2面の遺構	41
4. 出土遺物	41
1) 土器	41
2) 特殊遺物	43
5. まとめ	43
IV 栗下遺跡・メノト遺跡の調査	
1. R1調査区	87
1) 遺構	87
2. R2調査区	88
1) 遺構	88
3. D5調査区	89
4. 出土遺物	90
1) 縄文土器	90
2) 石器	91
3) 編物製品	94
4) 栗下遺跡出土陶器	95
5) メノト遺跡出土陶器	95
5. まとめ	95

# 挿 図 目 次

## 周辺遺跡分布図

### 【八坂別所遺跡】

- |     |                                 |      |                      |
|-----|---------------------------------|------|----------------------|
| 第1図 | 遺跡周辺地形図・調査区配置図                  | 第10図 | S R 2 調査区 第3面礫集中域実測図 |
| 第2図 | S R 1・耕地切り下げ部分調査区全体図            | 第11図 | D 1 調査区全体図           |
| 第3図 | S R 1 調査区 c・d区遺構実測図             | 第12図 | D 1 調査区 i・j区遺構実測図    |
| 第4図 | S R 1 調査区 S D 06周辺実測図           | 第13図 | 八坂別所遺跡・頭地遺跡試掘坑配置図    |
| 第5図 | 耕地切り下げ部分調査区 S X 02<br>(茶毘跡) 実測図 | 第14図 | 八坂別所遺跡出土遺物実測図(1)     |
| 第6図 | S R 2 調査区全体図                    | 第15図 | 八坂別所遺跡出土遺物実測図(2)     |
| 第7図 | S R 2 調査区 第1面溝状遺構実測図            | 第16図 | 八坂別所遺跡出土遺物実測図(3)     |
| 第8図 | S R 2 調査区 第2面溝状遺構実測図            | 第17図 | 底部糸切り痕等拓影図           |
| 第9図 | S R 2 調査区 第3面溝状遺構実測図            | 第18図 | 八坂別所遺跡出土特殊遺物実測図      |

### 【頭地遺跡】

- |      |                                      |      |                           |
|------|--------------------------------------|------|---------------------------|
| 第1図  | 周辺地形図・調査区位置図                         | 第14図 | S R 4・5 調査区 第1面 S D 05実測図 |
| 第2図  | S R 3 調査区 全体図                        | 第15図 | S R 4・5 調査区 第2面 遺構実測図(1)  |
| 第3図  | S R 3 調査区 B・C-3・4グリッド遺構実測図           | 第16図 | S R 4・5 調査区 第2面 遺構実測図(2)  |
| 第4図  | S R 3 調査区 B・C-4~6グリッド遺構実測図           | 第17図 | D 3 調査区 全体図               |
| 第5図  | S R 3 調査区 S D 08・09周辺遺構実測図           | 第18図 | D 3 調査区 第1面 遺構実測図         |
| 第6図  | S R 3 調査区 S X 01・02実測図               | 第19図 | D 3 調査区 第2面 S D 08周辺実測図   |
| 第7図  | S R 3 調査区 S X 03実測図                  | 第20図 | 頭地遺跡出土遺物実測図(1)            |
| 第8図  | S R 3 調査区 S X 04・05実測図               | 第21図 | 頭地遺跡出土遺物実測図(2)            |
| 第9図  | S R 4・5 調査区 全体図                      | 第22図 | 頭地遺跡出土遺物実測図(3)            |
| 第10図 | S R 4・5 調査区 第1面 S D 01~04実測図         | 第23図 | 頭地遺跡出土遺物実測図(4)            |
| 第11図 | S R 4・5 調査区 第1面 S X 01、<br>掘立柱建物跡実測図 | 第24図 | 頭地遺跡出土遺物実測図(5)            |
| 第12図 | S R 4・5 調査区 第1面 遺構実測図(1)             | 第25図 | 底部へら記号・糸切り痕拓影図            |
| 第13図 | S R 4・5 調査区 第1面 遺構実測図(2)             | 第26図 | 頭地遺跡出土特殊遺物実測図             |

### 【栗下遺跡・メノト遺跡】

- |     |                           |      |                         |
|-----|---------------------------|------|-------------------------|
| 第1図 | 周辺地形図・調査区配置図              | 第8図  | R 1 調査区 f区遺構実測図         |
| 第2図 | R 1 調査区全体図                | 第9図  | R 2 調査区 a区・R 3 調査区全体図   |
| 第3図 | R 1 調査区 a区遺構実測図           | 第10図 | R 2 調査区 b~e区全体図・グリッド配置図 |
| 第4図 | R 1 調査区 溝状遺構実測図(1)        | 第11図 | R 2 調査区 a区貯蔵穴実測図        |
| 第5図 | R 1 調査区 溝状遺構実測図(2)        | 第12図 | R 2 調査区 b区遺構実測図         |
| 第6図 | R 1 調査区 掘立柱建物跡(S H 01)実測図 | 第13図 | D 5追加調査区 S X 01実測図      |
| 第7図 | R 1 調査区 S X 01実測図         | 第14図 | R 2 調査区 b区掘立柱建物跡実測図     |

第15図	R 2 調査区 d 区遺構実測図(1)	第30図	出土遺物実測図：縄文土器12
第16図	R 2 調査区 d 区遺構実測図(2)	第31図	出土遺物実測図：縄文土器13
第17図	R 2 調査区 g 区遺構実測図	第32図	出土遺物実測図：石器 1
第18図	D 5 調査区 遺構実測図	第33図	出土遺物実測図：石器 2
第19図	出土遺物実測図：縄文土器 1	第34図	出土遺物実測図：石器 3
第20図	出土遺物実測図：縄文土器 2	第35図	出土遺物実測図：石器 4
第21図	川土遺物実測図：縄文土器 3	第36図	出土遺物実測図：石器 5
第22図	出土遺物実測図：縄文土器 4	第37図	出土遺物実測図：石器 6
第23図	出土遺物実測図：縄文土器 5	第38図	出土遺物実測図：石器 7
第24図	出土遺物実測図：縄文土器 6	第39図	出土遺物実測図：石器 8
第25図	出土遺物実測図：縄文土器 7	第40図	出土遺物実測図：石器 9
第26図	出土遺物実測図：縄文土器 8	第41図	出土遺物実測図：石器10
第27図	出土遺物実測図：縄文土器 9	第42図	川土遺物実測図：石器11
第28図	出土遺物実測図：縄文土器10	第43図	出土遺物実測図：陶器
第29図	出土遺物実測図：縄文土器11	第44図	底部系切り痕拓影図

## 写真図版目次

### 【八坂別所遺跡】

図版 1	調査地全景（東から） SR 1 調査区全景：上段（南から） D 1 調査区 i・j 区：第 1 面 （東上方から）	図版 5	耕地切り下げ部分調査区 全景（南から） SX02（茶毘跡）完掘状態（東から） SD11完掘状態（西から）
図版 2	SR 1 調査区 調査区全景：下段（北から） SD06完掘状態（西から） SD06完掘状態（北から）	図版 6	SR 2 調査区 全景：第 1 面（南から） 全景：第 2 面（北から） 第 2 面 SD04・05完掘状態（西から）
図版 3	SR 1 調査区 調査地全景：上段（東から） 柱穴集中域（北から）	図版 7	SR 2 調査区 全景：第 3 面（南から） 第 3 面 SD07完掘状態（西から） 第 3 面礫集巾域検出状態（西から）
図版 4	SR 1 調査区 掘立柱建物跡（西から） 掘立柱建物跡（北西から） 小穴群：A・B-9～11グリッド （西から）	図版 8	D 1 調査区 全景（西から） i・j 区遺構完掘状態：第 1 面（西から） i・j 区遺構完掘状態：第 2 面（東から）
		図版 9	出土遺物(1)
		図版 10	出土遺物(2)

【頭地遺跡】

- |     |  |      |  |
|-----|--|------|--|
| 図版1 | S R 4・5調査区<br>調査区全景：第1面（北上方から）<br>調査区全景：第2面（東上方から）                                       | 図版9  | S R 4・5調査区<br>S D05完掘状態（西から）<br>S X01完掘状態（西から）<br>掘立柱建物跡（南東から）   |
| 図版2 | S R 3調査区<br>調査区全景：南北方向（西から）<br>調査区全景：東西方向（北から）   | 図版10 | S R 4・5調査区<br>第2面調査区全景（南から）<br>掘立柱建物跡・小穴集中域（西から）   |
| 図版3 | S R 3調査区<br>B・C-6グリッド以北遺構集中域<br>（東から）<br>S D01周辺（北から）<br>S P03礎出土状態                      | 図版11 | S R 4・5調査区<br>掘立柱建物跡（北から）<br>S P123礎・柱根出土状態（東から）<br>S P120柱根出土状態（北から）<br>S P87柱根出土状態（東から）<br>S P89柱根出土状態（南東から） |
| 図版4 | S R 3調査区<br>B・C-4～6グリッド完掘状態<br>（北から）<br>B・C-4～6グリッド完掘状態<br>（東から）                         | 図版12 | S R 4・5調査区<br>溝状遺構完掘状態（西から）<br>溝状遺構完掘状態（南から）   |
| 図版5 | S R 3調査区<br>S D08周辺完掘状態（北から）<br>S D09完掘状態（北から）<br>S X01・02完掘状態（北から）                      | 図版13 | D 3調査区<br>調査区全景：第1面（東から）<br>小穴集中域：A 4グリッド（北から）<br>S D01完掘状態（北から）<br>S D03・04完掘状態（南東から）                         |
| 図版6 | S R 3調査区<br>S X03礎出土状態（西から）<br>S X03完掘状態（西から）<br>S X04・05礎検出状態（南から）<br>S X04・05完掘状態（南から） | 図版14 | D 3調査区<br>調査区全景：第2面（東から）<br>S D08周辺（北から）<br>S D08遺物出土状態（南から）   |
| 図版7 | S R 4・5調査区<br>S D01・02完掘状態（西から）<br>S D03・04完掘状態（西から）                                     | 図版15 | 出土遺物①  |
| 図版8 | S R 4・5調査区<br>第1面調査区全景（南から）<br>小穴集中域：E-6・7グリッド完掘状態<br>（西から）                              | 図版16 | 出土遺物②  |
|     |  | 図版17 | 出土遺物③  |

【栗下遺跡・メノト遺跡】

- |     |                             |     |  |
|-----|-----------------------------|-----|--|
| 図版1 | 遺跡遠景（南方向から）<br>調査地全景（東方向から） | 図版2 | R 1調査区（栗下遺跡）<br>a区完掘状態（西から）<br>S D12礎等出土状態（南から）<br>S D12土製耳飾り出土状態（南から） |
|-----|-----------------------------|-----|--|

- 図版3 R1 調査区 (栗下遺跡)  
 SD12立ち上がり付近 (南西から)  
 a区完掘状態 (東から)  
 SD13・14・15完掘状態 (南から)
- 図版4 R1 調査区 (栗下遺跡)  
 調査区全景: c区から東 (西から)  
 SD10完掘状態 (北から)  
 SD11完掘状態 (北から)
- 図版5 R1 調査区 (栗下遺跡)  
 SH01完掘状態 (東から)  
 SD06・07完掘状態 (北から)  
 調査区全景: d区から西 (東から)
- 図版6 R1 調査区 (栗下遺跡)  
 調査区全景: e区から西 (東から)  
 SX01磔等出土状態 (西から)  
 SX01完掘状態 (西から)
- 図版7 R1 調査区 (栗下遺跡)  
 調査区全景: f区 (西から)  
 f区遺構集中城 (東から)  
 調査区全景: f区 (東から)
- 図版8 R2 調査区 (メノト遺跡)  
 a区貯蔵穴群 (西上方から)  
 a区流路南側立ち上がり付近 (西から)  
 g区小穴完掘状態 (南から)
- 図版9 R2 調査区 (メノト遺跡)  
 貯蔵穴検出状態: SP08  
 貯蔵穴検出状態: SP03~05  
 編物出土状態: SP13底部  
 編物出土状態: 編物12  
 編物出土状態: 編物31  
 編物出土状態: 編物34
- 図版10 R2 調査区 (栗下遺跡)  
 b区遺構完掘状態 (南から)  
 b区遺構完掘状態 (北西から)  
 b区遺構完掘状態 (東から)
- 図版11 R2 調査区 (栗下遺跡)  
 d区遺構完掘状態 (西から)  
 SP130・131土器出土状態 (南から)  
 d区遺構集中城 (南から)
- 図版12 R3 調査区 (メノト遺跡)  
 調査地全景 (西から)  
 溝状遺構完掘状態 (北から)  
 調査区全景 (東から)
- 図版13 D5 調査区 (メノト遺跡)  
 g区遺構完掘状態 (西から)  
 g区遺構完掘状態 (東から)  
 石棒出土状態 (北から)
- 図版14 D5 調査区 (H11年度追加調査)  
 調査区全景 (南から)  
 SX01遺物出土状態 (北から)
- 図版15 D5 調査区 (H11年度追加調査)  
 SX01完掘状態 (北から)  
 SF01完掘状態 (南から)
- 図版16 貯蔵穴11 (SP11) 内部編物の状態
- 図版17 貯蔵穴11 (SP11) 内部底部隅の状態  
 貯蔵穴11 (SP11) 内部底部の状態  
 貯蔵穴11 (SP11) 内部側面  
 編物重複部分
- 図版18 貯蔵穴8 (SP08) 内部側面編物  
 編物12-1  
 編物13-2・3
- 図版19 出土遺物: 編物
- 図版20 出土遺物: 縄文土器1
- 図版21 出土遺物: 縄文土器2
- 図版22 出土遺物: 縄文土器3
- 図版23 出土遺物: 縄文土器4
- 図版24 出土遺物: 縄文土器5・土製耳飾り
- 図版25 出土遺物: 石器1 (栗下遺跡)
- 図版26 出土遺物: 石器2 (栗下遺跡)
- 図版27 出土遺物: 石器3 (メノト遺跡)
- 図版28 出土遺物: 石器4 (メノト遺跡)
- 図版29 出土遺物: 石器5 (メノト遺跡)
- 図版30 出土遺物: 石器6 (メノト遺跡)  
 出土遺物: 陶器 (栗下遺跡)

# I 発掘調査と遺跡の概要

## 1. 調査に至る経過と調査の目的

掛川市の東部、東山口地区（八坂、伊達方、千羽、小原子、本所）で、全国的にも有数の規模といわれる農地整備事業が静岡県により計画された。

農地整備に伴う遺跡発掘調査は、まず、平成3～7年度にかけて遺跡所在の確認調査を実施した。そして、遺跡の所在が確認された箇所の農地整備工事は、遺跡の保存を考え、切り土工を極力避け、盛り土による施工とする設計がされた。本発掘調査は、農地整備に伴う道路新設工事部分及び拡幅工事部分や排水路新設部分等、遺跡の破壊が免れない地区において、遺跡の記録保存を目的として実施した。

## 2. 調査の方法

現地での調査は、調査区に5m方眼のグリッドを任意に設定し、それを元に遺物の取り上げや検出遺構の作図を行った。

調査は、まず、重機を使って表土の除去を行い、続いて人工により、遺構の有無等を探った。記録は遺構の状況により1/10縮尺と1/20縮尺を併用した。写真撮影はプロニーサイズ（6×7）原画白黒、35mmサイズ原画白黒・カラーリバーサルを用いた。

現地調査完了時には、ラジコンヘリコプターによる調査区全体の空中写真撮影および空中写真測量を行った。空中写真測量では、1/20縮尺（一部1/40縮尺）の遺構全体平面図を作成した。

## 3. 遺跡をめぐる環境

### 1) 地理的環境

旧掛川市域は、北部に山地を抱え、原野谷川、垂木川、逆川、上小笠川により解析された丘陵地、段丘とそれらによって形成された沖積地に大別される。遺跡は、それら河川の流域に沿って分布している。八坂地区は掛川市街地から東に約5km、掛川市域の東端、菊川市との境に位置する。地形的には逆川と海老名川により解析された標高約80～200mの丘陵地となっている。今回調査対象となった遺跡は、いずれも逆川により形成された段丘上に立地する。

### 2) 歴史的環境（周辺遺跡分布図参照）

東山口地区は、東海道が通る地区であるためか、比較的多くの遺跡が存在している。これらの遺跡は、逆川沿いの丘陵及び段丘に立地する。しかし、その内容は不明な点が多かった。なお、東山口地区では、現在までに旧石器時代の遺跡は確認されていない。以下、縄文時代から時代順に八坂地区周辺の遺跡について概観する。

**縄文時代** 平成2年に国道1号線日坂バイパス建設工事に先立ち、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所（以下、研究所）により調査された、**7向畑遺跡**は丘陵上に立地し、遺構に伴うものではなかったが高山寺式に比定される押型文土器小片が数点出土している。前期の土器は**3メノト遺跡**から出土しているが数は少ない。中期には先述の向畑遺跡から竪穴住居跡1が検出されている。その丘陵から見下ろす西側の敷高地（逆川により形成された低位の段丘）には**9牛岡遺跡**が立地する。調査は日坂バイパス建設工事に先立つ発掘調査として、研究所により行われた。縄文時代の遺構は検出されなかったが、曾利式・加曾利E式を主体とする中期後半の土器が埋没した谷から多数出土している。出

土した土器は良い状態で保存されており、数も多かったことから、段丘上にかつて集落があったが洪水等により削平されたものと報告書では考察されている。後期初頭の土器は含まない。後期と晩期に属する遺跡は、今回報告するメノト遺跡と4粟下遺跡が後期中葉以降、後期後半から後期末を主体として晩期まで集落が営まれたと考えられる。周知の縄文時代遺跡は、ほとんどが逆川の左岸に位置する。

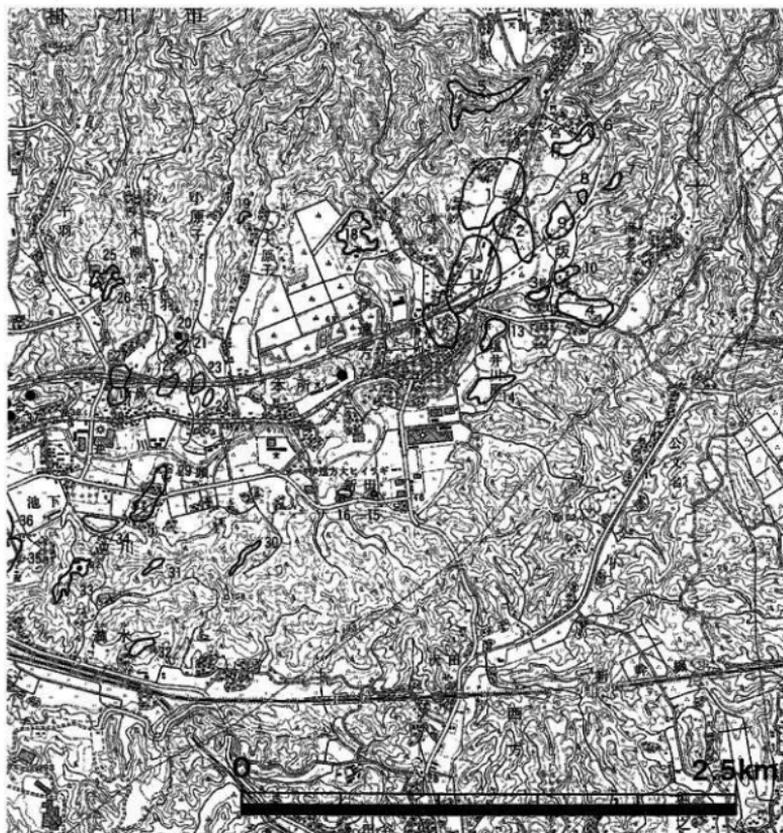
**弥生時代** 先述の7向畑遺跡から弥生時代後期の集落が検出されている。また、1八坂別所遺跡に土器の小破片が見られる。その他、周知の遺跡では10木ノ下遺跡、13権現原遺跡等が弥生時代の遺跡とされるが、詳細は不明である。

**古墳時代** 現在までに確認されている集落は、今回報告する八坂別所遺跡のみである。古墳は、八坂地区から西方に25大谷古墳群がある。平成5年に本発掘調査されたが、土墳墓と丘陵裾部に溝が検出されたのみで、積極的に古墳の存在はわからなかった。丘陵上から4世紀後半の垂飾品が出土している。また、横穴は、19鎌谷横穴群、21大谷横穴群がある。大谷横穴群は32基の横穴が確認されており、その造営時期は7世紀初頭から末までとされる。

**奈良・平安時代** 昭和27年東山口小学校の校地造成に伴い発見されたのが17諏訪瓦窯である。この瓦窯の供給先は不明である。しかし、平成15年度に農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業に伴い調査した八坂別所遺跡から、奈良時代の遺物包含層から瓦の小片が出土している。胎土や焼成の状態が類似しており、諏訪瓦窯跡から約1km離れたこの遺跡付近が供給先である可能性がある。ちなみに、この調査では道路跡を検出し、和同開珎や黒書土器も出土している。さらに、今回報告する2蹟地遺跡も奈良時代及び平安時代の遺跡である。研究所による日坂バイパス建設に伴う発掘調査において、通常集落跡には見られない器種が多く含まれていることは、注目されるものである。

#### 〈参考文献〉

- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1995『牛岡遺跡Ⅱ』  
掛川市 2000『掛川市史 資料編 古代・中世』



周辺遺跡分布図

No.	遺跡名	時期	種類	No.	遺跡名	時期	種類
1	八取別所遺跡	弥生(中)、古墳(後)、奈良、平安、中近世	集落	19	観谷横穴群	古墳時代	横穴
2	園地遺跡	奈良、平安	集落	20	中風敷古墳	古墳時代	円墳
3	メノ上遺跡	縄文、中世	散布地	21	中風敷横穴群	古墳時代	横穴
4	栗下遺跡	縄文、中近世	集落	22	後沢遺跡	弥生(中)～古墳(前)	散布地
5	本宮山城	中近世	城跡	23	西ノ面遺跡	弥生(後)～古墳(前)	散布地
6	地蔵堂遺跡	中近世	集落	24	吉松遺跡	弥生(後)	散布地
7	向畑遺跡	縄文(早・中) 弥生(後)	集落	25	大谷古墳群	弥生(後)、古墳(前)	墓跡
8	社宮寺遺跡	縄文(早)	集落	26	大谷横穴群	古墳時代後期	横穴
9	牛岡遺跡	縄文(中) 奈良、平安、中近世	集落	27	郷下遺跡	弥生(後)	散布地
10	木ノ下遺跡	弥生(中)	散布地	28	往廻北遺跡	弥生(後)～古墳(前)	散布地
11	川田遺跡	不明	散布地	29	大畷遺跡	弥生(後)～古墳(前)	散布地
12	塩井川原砦	中近世	城跡	30	原山遺跡	弥生(後)～古墳(前)	散布地
13	権児原遺跡	弥生(後)～古墳(前)	散布地	31	大久保遺跡	弥生(後)～古墳(前)	散布地
14	狐鼻遺跡	弥生(後)	散布地	32	原ノ前遺跡	弥生(後)	散布地
15	新田遺跡	弥生(後)	散布地	33	池向遺跡	弥生(後)	散布地
16	中層敷遺跡	弥生(後)	散布地	34	扇原遺跡	弥生(後)～古墳(前)	散布地
17	諏訪窟跡	奈良	瓦葺跡	35	堂下遺跡	不明	散布地
18	伊達方城	中近世	城跡	36	神子地遺跡	弥生(後)～古墳(前)	散布地

## Ⅱ 八坂別所遺跡の調査

八坂別所遺跡の現地調査は、農地整備地内の道路新設工事部分（SR1）、道路拡幅工事部分（SR2）、排水路新設工事部分（D1）及びSR1に隣接する切り土工事を行う部分（耕区切り下げ部分）を調査対象として平成7年12月～平成18年3月に実施した。

### 1. SR1調査区

八坂別所遺跡の周知される範囲の中央から南寄り、東西方向に長さ約115m、幅約7mのSR1道路とそれに付随する新設道路工事部分、面積850㎡を調査した。地形的に比高差約2mの段丘面の変わる部分を貫通しており、便宜的に上段、下段と分ける。

#### 1) 遺 構

小穴（掘立柱建物柱穴）（第3図、図版1、3、4）上段とした内のA-5～9グリッド及びB-7グリッドにかけて小穴21を検出した。小穴の径は0.5～0.8mを測るものが多い。断面図に示したように深いものがほとんどで、それらは土層の観察からも柱穴と考えられる。直線的もしくは方形に並ぶ小穴の群れが大きく3つあり、それぞれ掘立柱建物跡になることが考えられるが、どのような配置で建物になるのか、全容がわかるものはなかった。これらの時期は、遺構検出時に古墳時代後期の須恵器が出土したことから、当該期になるものと考えられる。

溝状遺構（第4図、図版2）下段とした内のA・B-14・15グリッド上層で検出した。調査区を横切る南北方向の溝状遺構SD06である。幅は1.8～2.0mを測る。深さは約0.2mである。底面は平らで断面形は台形である。北側の立ち上がりに沿って幅0.3～0.4mの幅で、底面より約5cm深い溝状になっている。底面は南北端のレベルを比べると約3cmほどで、ごく緩やかに北側へ傾斜している。自然流路的な乱れはなく、人為的に掘削された溝と考えられる。覆土中から須恵器、土師器、山茶碗の小片が出土しており、中世の遺構と考えられる。

### 2. 耕区切り下げ部分調査区

SR1調査区の中程北側の上位段丘の東端部にあたる。長さ21m、幅2m、面積42㎡を調査対象とした。この調査区からは、茶毘跡1と溝状遺構1を検出している。

#### 1) 遺 構

SX02（茶毘跡）（第5図、図版5）C-9グリッドで検出した。長さ2.65m、幅1mを測る。乱れた舟形といった平面形である。底面も凹凸があり一定ではない。底面から約0.2mの厚さで炭化物が堆積している。寛永通宝6枚が出土したことから江戸時代の茶毘跡と判断される。

### 3. SR2調査区（第6図）

現道の拡幅部分、180㎡を調査対象とした。平面三角形を呈する調査区である。この調査区では3面の遺構面を検出した。遺構の密度は薄い。ここでは、各面ごとに記述する。

#### 1) 第1面の遺構（第7図、図版6）

第1面は標高約51.0mを測る。この面からは溝状遺構3を検出している。

溝状遺構 南北方向にはするSD01とそれに沿うようにはするSD02、東西方向にはするSD03の3本を検出した。SD01・02とSD03は直角に交わるが切り合い関係はわからなかった。水田耕作に関係する区画や導水の溝ではないかと考えられる。

## 2) 第2面の遺構 (第8図、図版6)

第2面は標高約50.7mを測る。この面では溝状遺構2を検出している。

**溝状遺構** 調査区の北端で緩くS字を描くSD04を検出した。そしてSD04の北側に約1mの間隔を置いて平行に存在する斜めの落ち込みがあり、それを溝の立ち上がりと考えSD05とした。SD04は深さ約0.1mと浅く、皿状の断面形を呈する。底面は緩く西側に傾斜している。性格は不明である。

## 3) 第3面の遺構 (第9・10図、図版7)

第3面は標高約50.4mを測る。遺構は溝状遺構4と、径0.25m、深さ0.2mの小穴1(S P31)を検出した。また、調査区南端において礫が集中している部分が見られた。

**溝状遺構** SD07は緩やかな弧を描いて東西方向にはしる。幅は約0.8mを測り、深さは0.1mで、断面形は浅いV字状を呈する。覆土は暗茶褐色粘土と灰色粘土が混じる。自然流路的なものと考えられる。SD08・09・10は幅0.15～0.25m、深さは0.1m未満の遺構である。検出した長さは1.5mから3.5mで、それぞれ0.7mから0.5mの間隔で平行にはしる。耕作の結果生じた溝状の痕跡と考えられる。5～10cmの礫が0.3mの幅に集中している部分を2箇所検出した。その間は約5mあり、東西方向に平行して存在する。

## 4. D1調査区 (第11図)

周知の遺跡範囲の南寄りに位置する。排水路新設工事箇所、延長約100m、幅1.6m、面積約160㎡を調査対象とした。この調査区では、下位の段丘面(便宜的にi区、j区とした)において、2面の調査面で遺構を検出した。

### 1) 第1面の遺構 (第12図、図版8)

標高約48.8～49.0mで検出した面である。小穴13と溝状遺構1を検出した。小穴は径0.2～0.7mのもので、深さがあり柱穴と考えられるものが多い。中には柱根が残るものも見られた。建物の一部と考えられるが、調査範囲の狭さから配置は不明である。

### 2) 第2面の遺構 (第12図、図版8)

標高約48.6～48.9mで検出した面である。小穴9と溝状遺構1を検出した。小穴は径0.2～0.4mで、第1面と同様に柱穴と考えられるものが多い。S P51とS P53とS P56を、柱間が1.7～1.8mを測る直線的に並ぶ一連のものと考えた。規模からすると簡単な建物であったと考えられる。

## 5. 出土遺物

### 1) 土器 (第14図～第17図)

八坂別所遺跡からは、弥生時代以降の遺物が出土している。

第14図-1は東遠江系の小皿で、口径7.5cm、器高2.6cmを測る。口縁部は、体部から直線的に伸びる。2・3は古墳時代の坏蓋である。2は最大径13.4cmを測り、かえりが口縁部より下に出ている。3は、かえりがわずかに口縁部より下に出る。4～6は、ロクロ整形のかわらけで、器表の剥落が顕著であるが、4・5の底部外面には糸切り痕が残る。4は全体に器壁が厚く、5は底部中央を薄く作り、口縁部内側に沈線がめぐる。6は口縁部を肥厚させ、7は口縁部を水平に引き出す。8～26は、須恵器である。8は坏蓋で、9～12は坏身である。坏蓋の最大径9.1cm、坏身の最大径は、9.8～10.8cmを測る。9の底部外面に板目(第17図-2)が残る。13・14は、かえりがある坏蓋で、13の最大径は12.0cmを測る。15の坏蓋は、最大径17.0cm、器高3.8cmを測る。16・17は、有台の坏身である。16は口縁部を欠損するが、現存の器高6.85cmを測り、器高が高い。高台は、低く、外反する。17は最

大径14.6cm、器高3.9cm、口縁端部内側に沈線が巡る。18は無台坏身で、最大径12.0cmを測る。19は底部が平らで、底部外面と体部下端だけにヘラ削りを施す。最大径は13.9cmと推定される。肩が張ることから平瓶の可能性はある。20は甕の口縁部で、内面に焼成時の癒着物がある。21は平瓶の体部、22は平瓶の口頸部である。23は口径21.3cmを測る口縁部が受け口状を呈する甕の口頸部で、外面に稜が付く。24の甕は、口径21.8cmを測り、口縁端部の断面形が壇木形を呈する。25は高盤の脚と考えられる。26は鉢で、体部の外面下半にヘラ削りを施す。器壁が厚く、調整のナデ幅が広い。

第15図-1~4は土師器である。1の坏は、最大径14.1cm、器高3.3cmを測る。2は短脚の高坏の脚部である。3は壺である。4は最大径27.4cmを測り、頸部外面に横ナデの擦痕が残る。5は最大径16.0cmを測る灰釉陶器の碗で、内外面に施釉する。釉がほとんど剥落していて、刷毛塗りか漬け掛けの区別はつかない。体部下端にヘラ削りを施す。6は東遠江系の山茶碗で、最大径15.5cm、器高5.15cmを測る。高台端部にモミ痕、底部外面に糸切り痕を残す。7~10は東遠江系の小碗である。7は口径9.7cm、器高2.35cm、8は口径9.3cm、器高2.7cm、9は口径8.6cm、器高2.55cmを測る。11~27は小皿で、14の渥美・湖西系を除き東遠江系である。11の底部は突出し、13・20の底部はわずかに出る。すべての小皿の底部外面に糸切り痕が残り、26は糸切り痕の上に平行の板状の圧痕が残る。口径は、12・17が9cm代、13~16、18・19が8cm代、11、20~27が7cm代である。18の口縁部外面の3個所に、外側から押圧が加えられた痕跡がある。22の口縁部内面には、ヘラ状の工具で外へ押しした痕跡がある。18・22の押圧痕については、偶然による可能性がある。28~30は須恵器で、28は坏蓋、29は有台坏身、30は大皿である。29は口径13.2cm、器高3.9cm、30は口径22.0cm、器高3.95cmを測る。31は渥美・湖西系の山茶碗の口縁部破片、32は東遠江系の小皿で口径8.4cm、器高2.2cmを測る。

第16図掲載遺物は、平成6年度に実施した確認調査で試掘坑から出土した遺物である。試掘坑の配置は、第13図の八坂別所遺跡・頭地遺跡試掘坑配置図を参照されたい。

第16図-1・2は弥生時代前期後半の水神平式土器で、条痕文が施される。3~12は須恵器である。3の坏蓋のかえり、口縁端部から下に出ることはなく、4の坏身の立ち上がりはほとんど高さがない。6の坏身は最大径11.0cm、器高3.3cmを測る。7の坏蓋は口径14.9cm、器高4.1cm、火ぶくれが顕著である。8は口径14.7cm、器高現存で1.7cmを測る扁平な坏蓋である。9・10は坏で、9は口径13.6cm、器高4.6cm、底部外面にヘラ削りを施す。底部を厚く作り、内面に細かいノタ目が顕著である。11の甕は口径10.5cm、口縁端部の断面形が三角形を呈する。12の甕は口径26.9cmを測り、肩部外面にタタキ、内面に青海波文が残る。13~15は土師器である。13は口径12.3cmを測り、器壁を厚く作る。口縁部の内面に横ナデの擦痕が残る。口径が小さいため坏と考えたが、高坏の坏部の可能性もある。14は口径19.95cmを測る甕の口縁部で、15は取っ手である。16は灰釉碗の底部で、高台径9.2cmを測る。外面のヘラ削りは高台の内側に限られる。17は東遠江系の小碗で、口径8.8cm、器高2.75cm。18~22の小皿のうち18が渥美・湖西系で他は東遠江系である。22の底部はわずかに張り出す。口径は7.6~7.8cm、器高は1.4~2.0cmを測る。23は山茶碗の時期の甕の肩部の破片である。器壁を厚く作り、断面三角形の凸帯がめぐる。24の天目は口径12.0cm、器高6.0cm、高台を削り出し、体部の内外面に鉄釉をかける。大窯第2段階に位置づけられる。25は志戸呂産の小天目で、口径9.6cmを測る。大窯第3段階~第4段階に位置づけられる。

遺物には、弥生土器、灰釉陶器、大窯期が少量みられるが、7世紀中頃から奈良時代全般、12世紀から13世紀代の2時期に大別される。

## 2) 特殊遺物 (第18図、図版10)

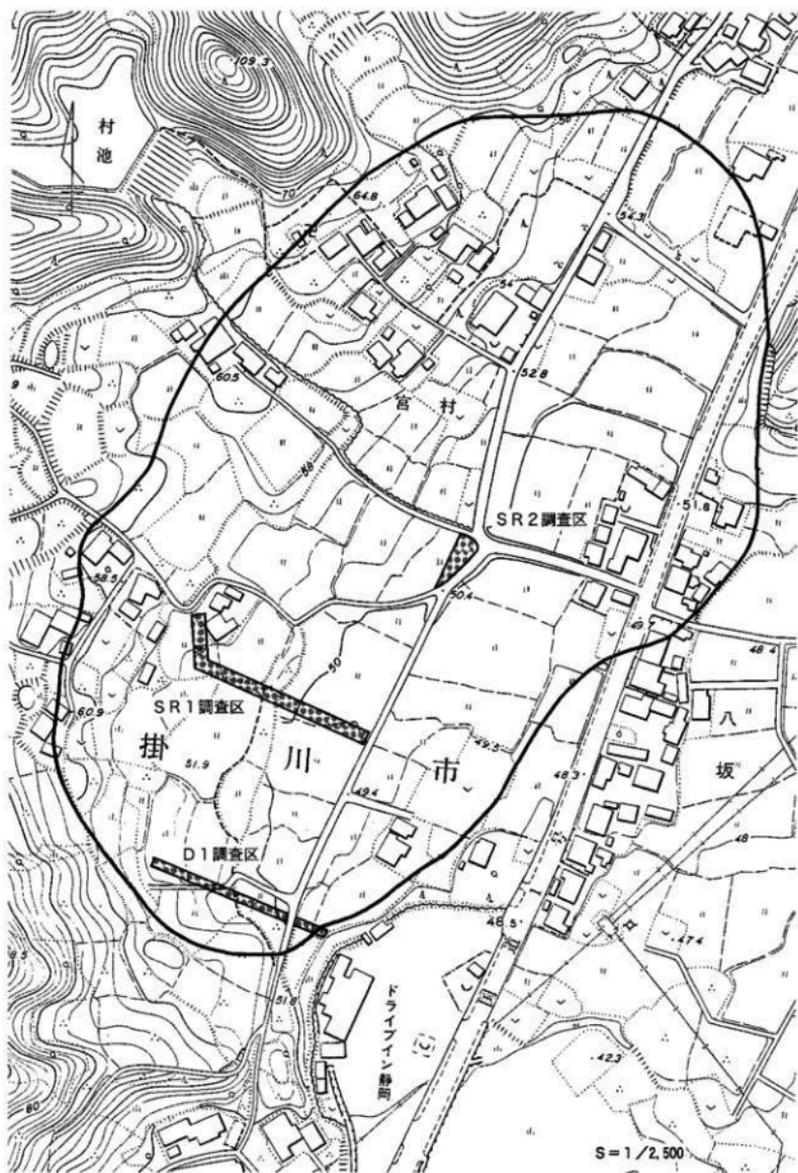
1・2は土師質の土馬の脚である。1はSR2調査区の第3面A3グリッドから出土した。現状で長さ3.2cmを測る。右前脚の可能性がある。2もSR2調査区第3面A2～3グリッドから出土している。現状の長さは4.3cmを測る。左前脚の可能性がある。

3は瓦塔の一部破片である。D1調査区i区から出土している。摩耗と破損が著しい。色調は明灰色を呈する。現状の高さは13.8cmを測る。上下は端面になっている。実測図中に点線で表した部分には一段上の屋根が剥落した痕があり、二階分ある角の破片と考えられる。4は砥石の欠損品である。SR1調査区から出土している。現状の大きさは縦6.05cm、横4.15cm、厚さは1.71cmを測る。重さは48.1gを量る。石材は凝灰岩で、表裏を砥面としており、左側面に鋸痕がある。

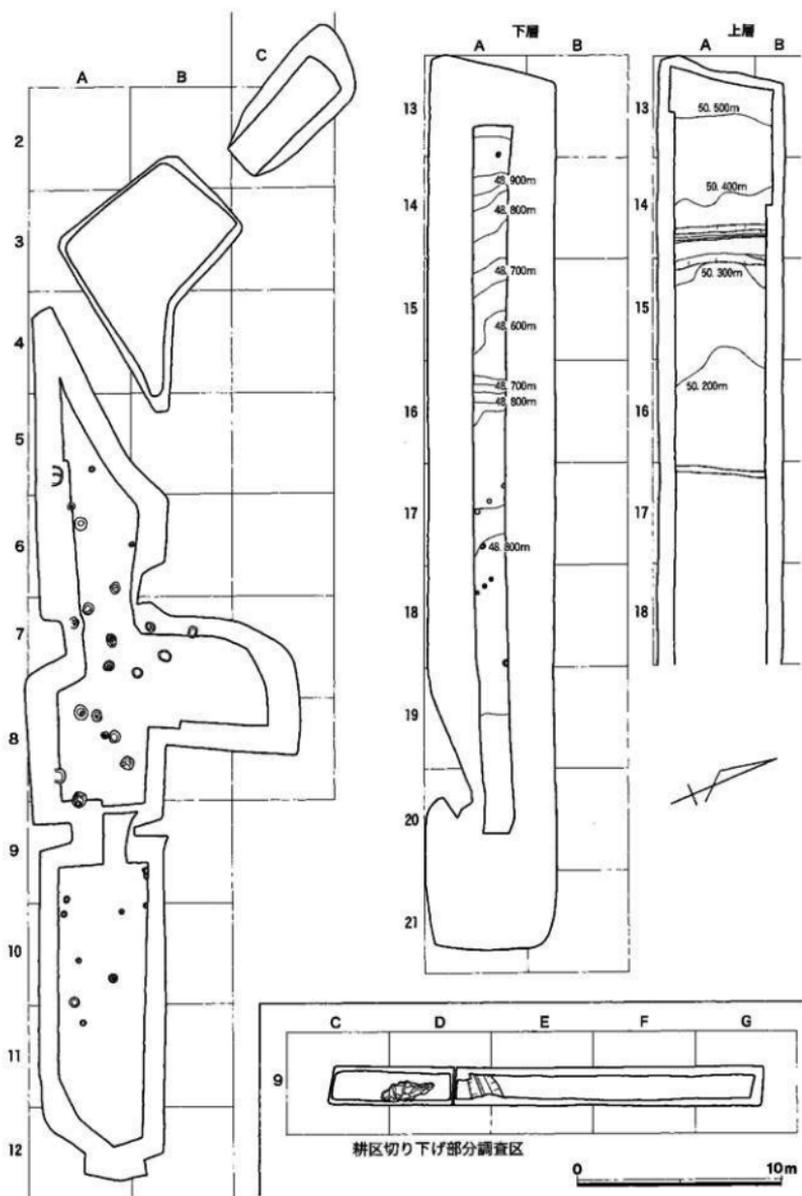
## 6. まとめ

ここで、今回の調査において特記される事項を記述し、まとめたい。

SR1調査区において、標高約53mの段丘面から検出した掘立柱建物跡は、全容がわかるものでは無かったが、柱穴の並ぶ方向は、ほぼ同一の方向とみられ、企画性をもって建てられたことが考えられる。また、SR2調査区から出土した土馬の脚は、祭祀に関わる遺物と考えられるもので、D1調査区から出土した瓦塔は、寺院または官衙との関わりが考えられる遺物である。これらのことから、八坂別所遺跡は、古代において、一般の集落とは違う性格を持っていたことが考えられる。



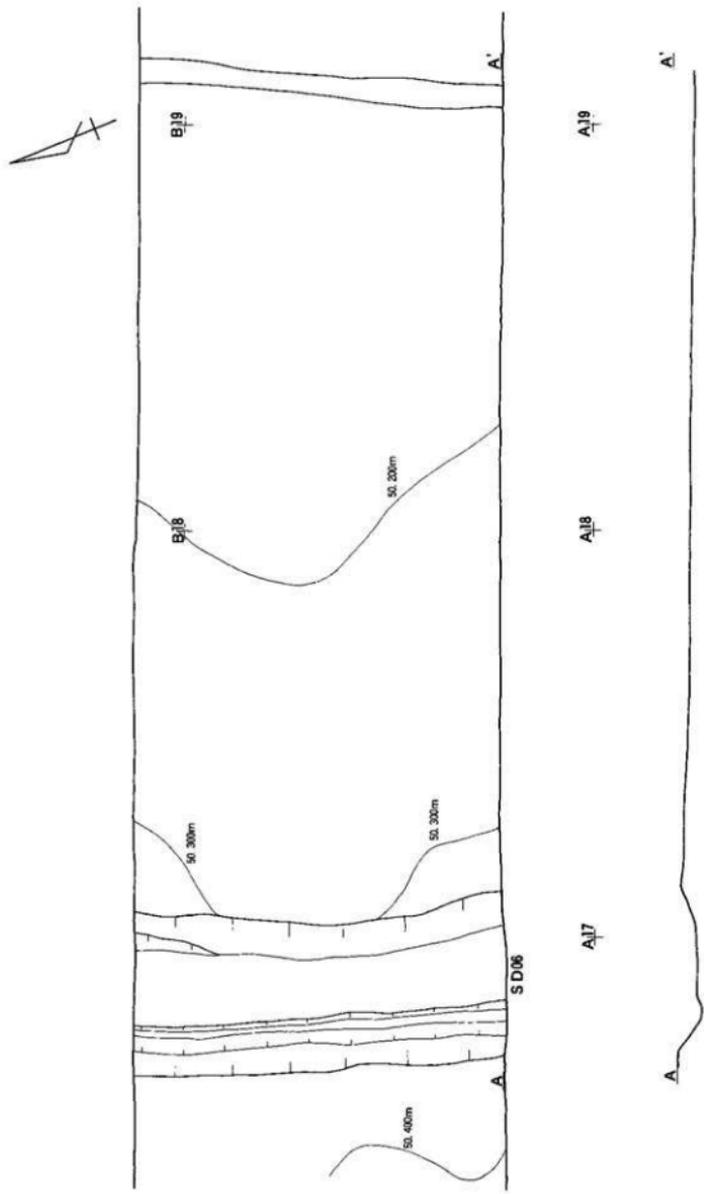
第1図 遺跡周辺地形図・調査区配置図



第2図 SR1・耕区切り下げ部分調査区全体図

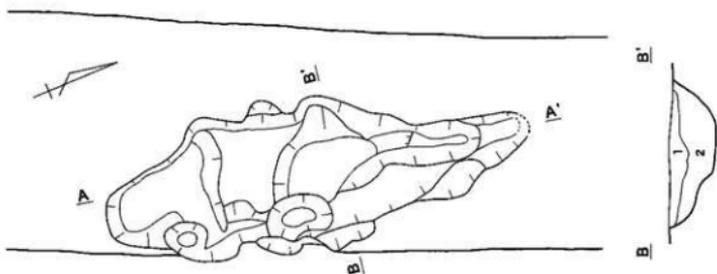




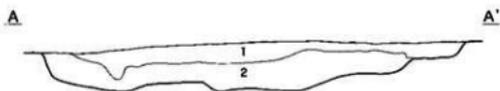


L=50.400m

第4图 SR1调查区 SD06周边实测图

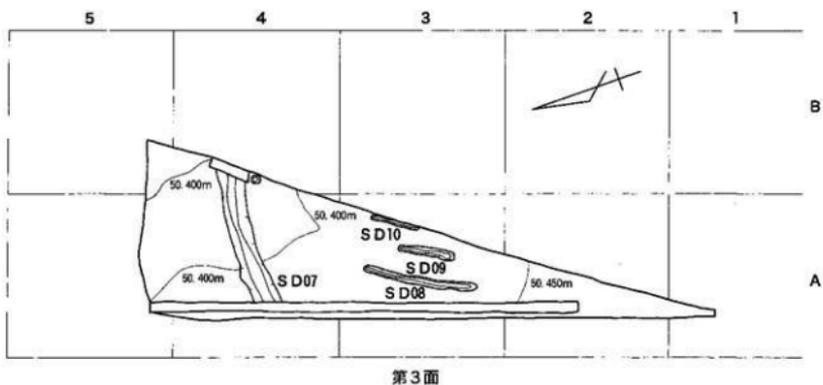
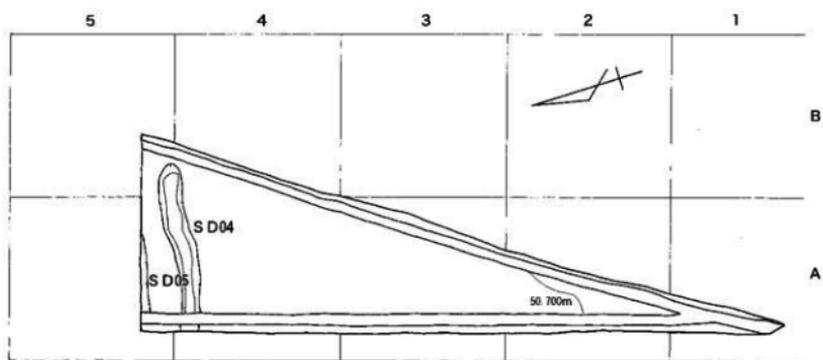
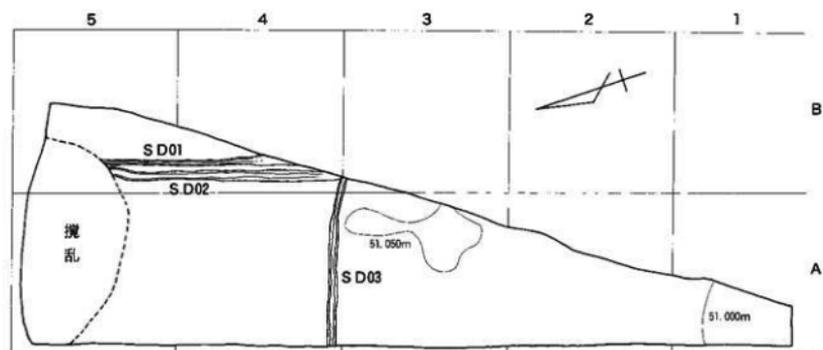


1. 黄褐色土
2. 炭化物堆積層



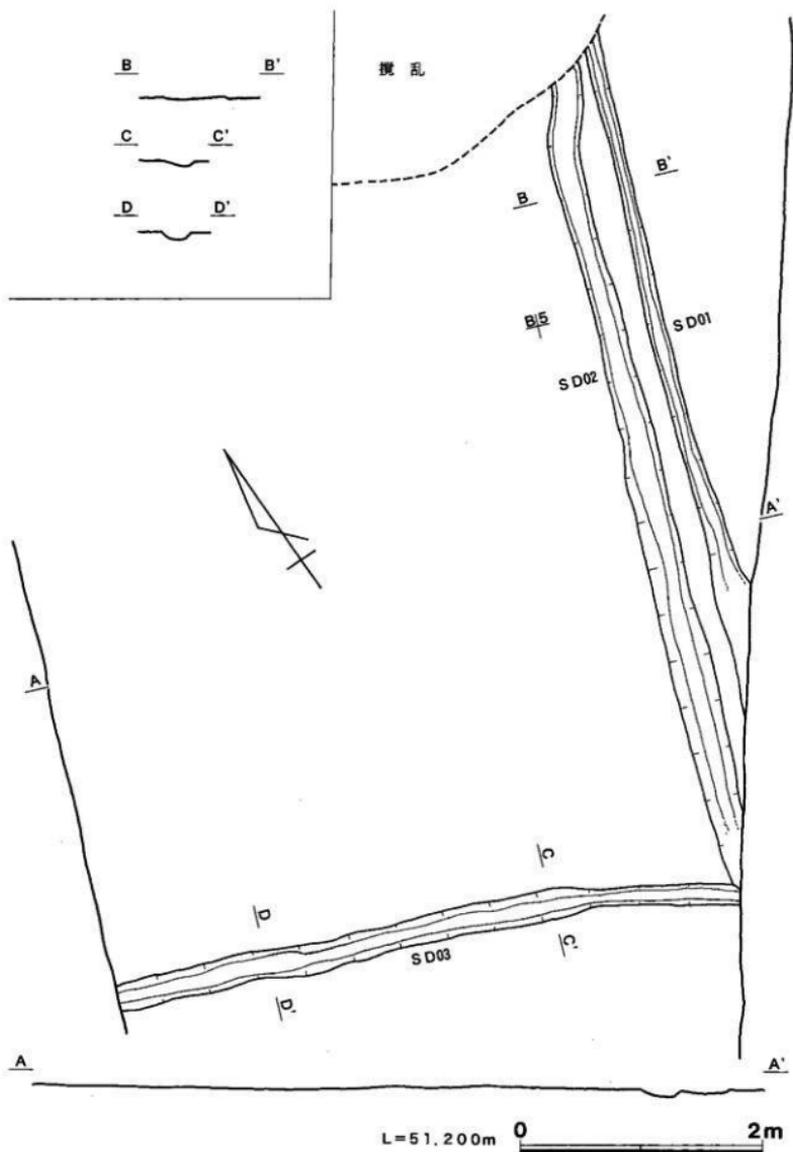
L = 52.500m 0 1m

第5図 耕区切り下げ部分調査区S X02 (茶毘跡) 実測図

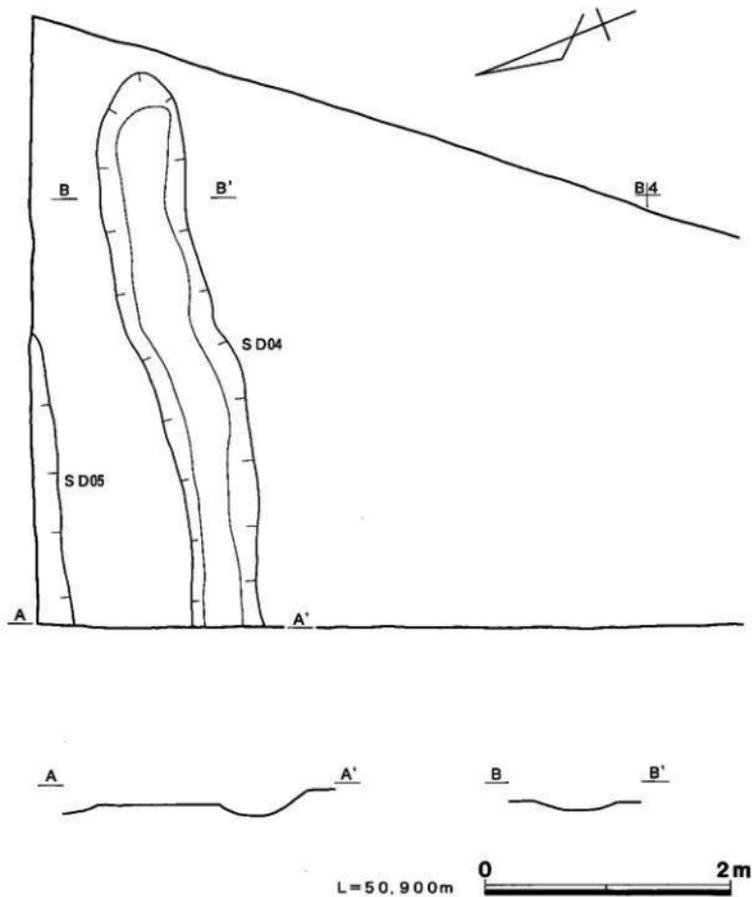


0 2m

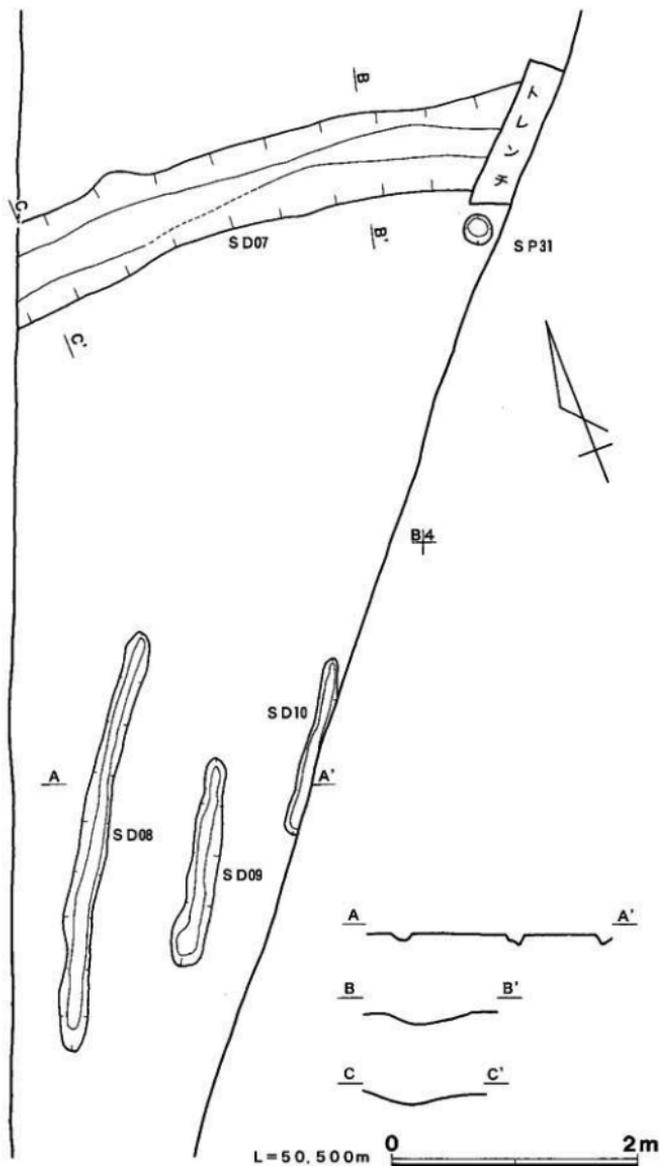
第6図 SR2調査区全体図



第7図 SR2調査区 第1面溝状遺構実測図



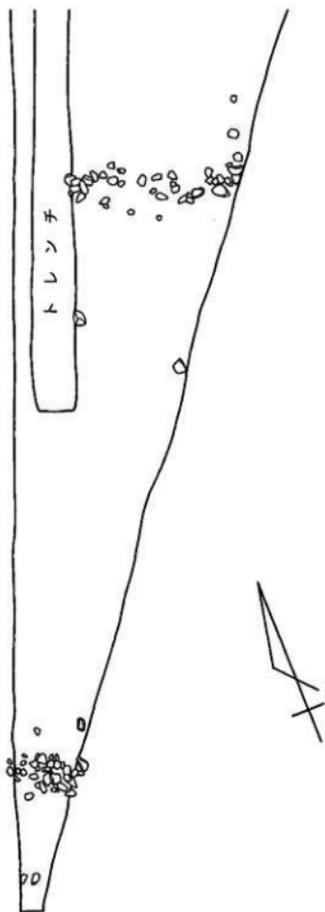
第8图 SR2调查区 第2面沟状遺構突測図



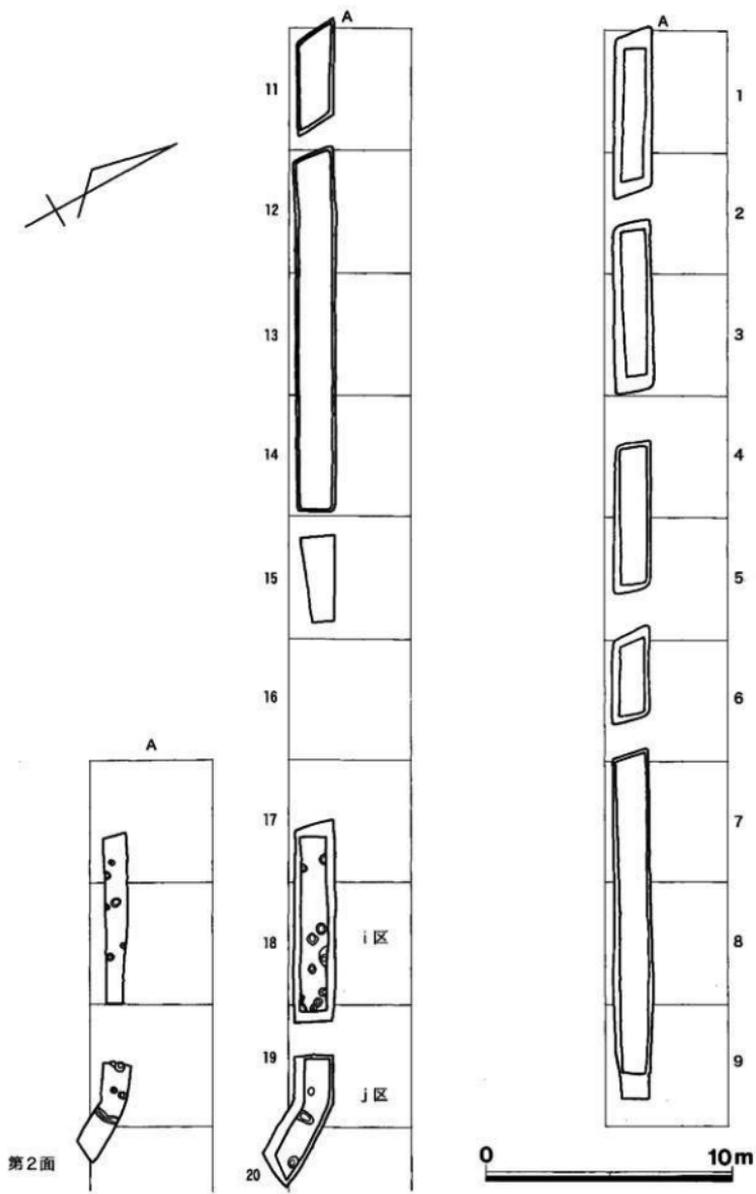
第9図 SR2調査区 第3面溝状遺構実測図

A/2

A/3

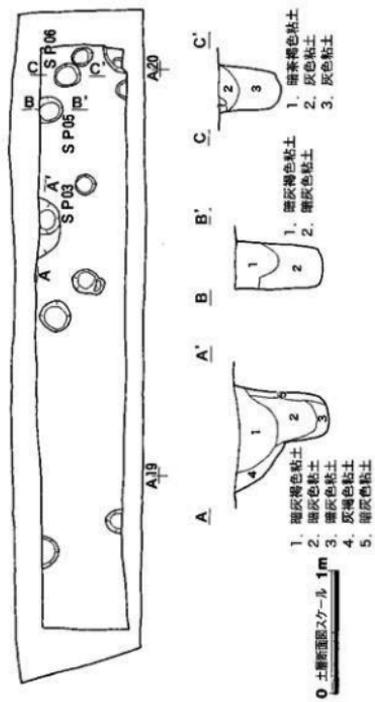


第10図 S R 2 調査区 第3面礫集区域実測図

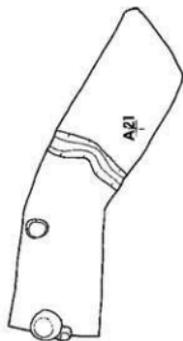
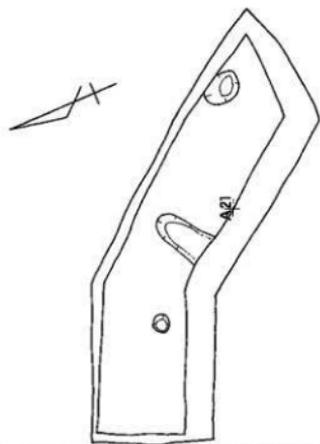
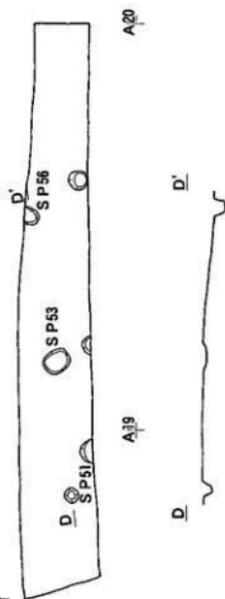


第11图 D1 調査区全体图

第1面

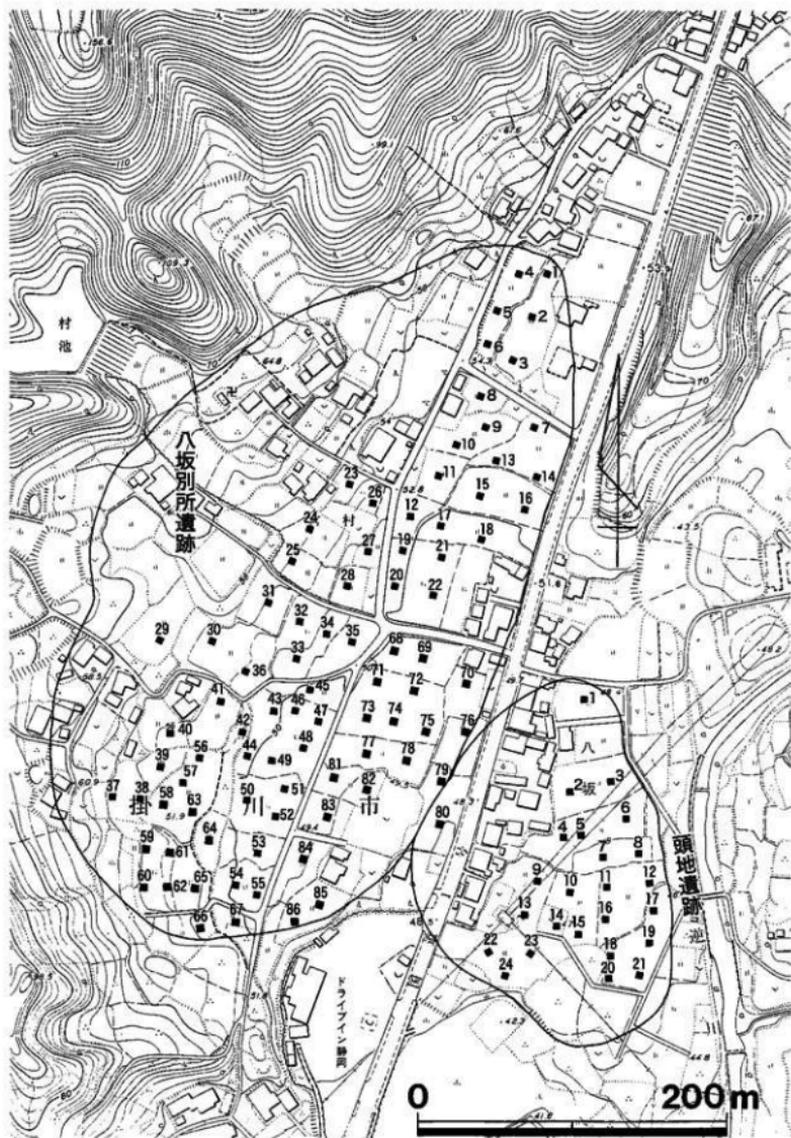


第2面

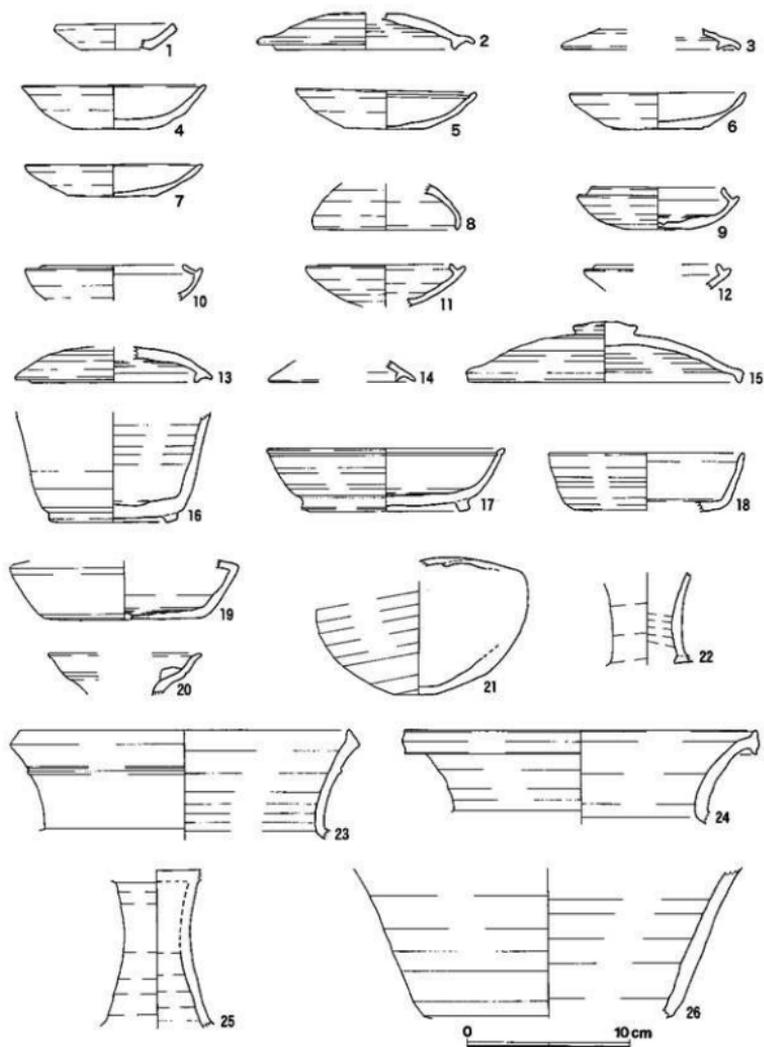


L=49.100m 0 2m

第12図 D1調査区 i・j区遺構実測図

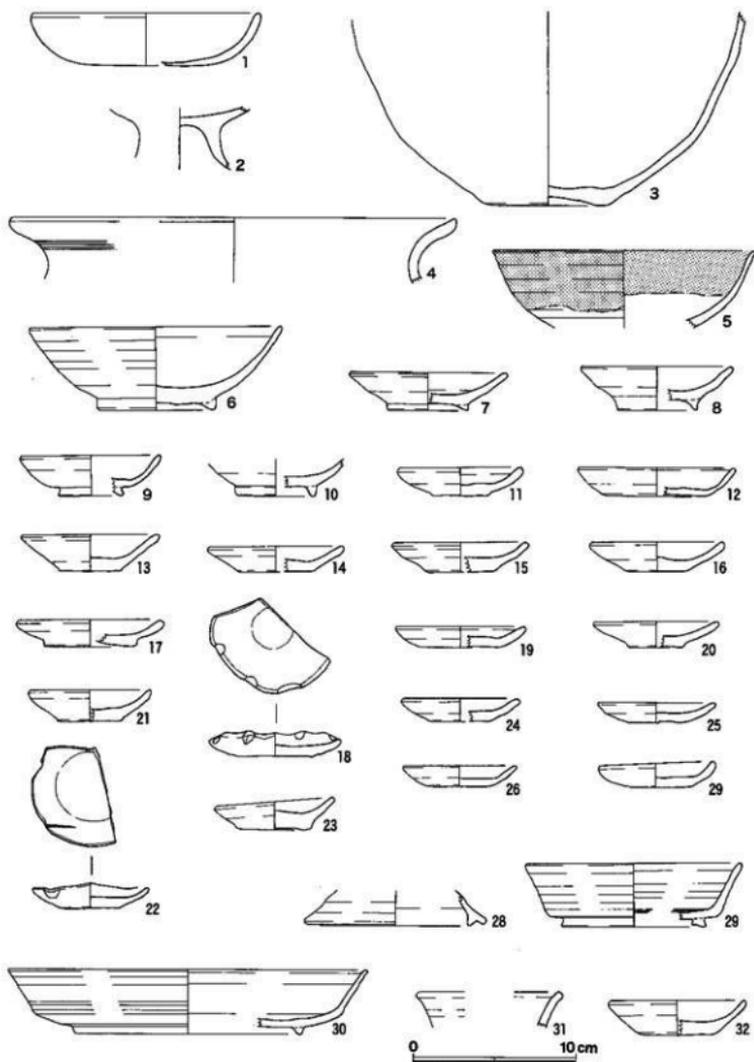


第13図 八坂別所遺跡・頭地遺跡試掘坑配置図



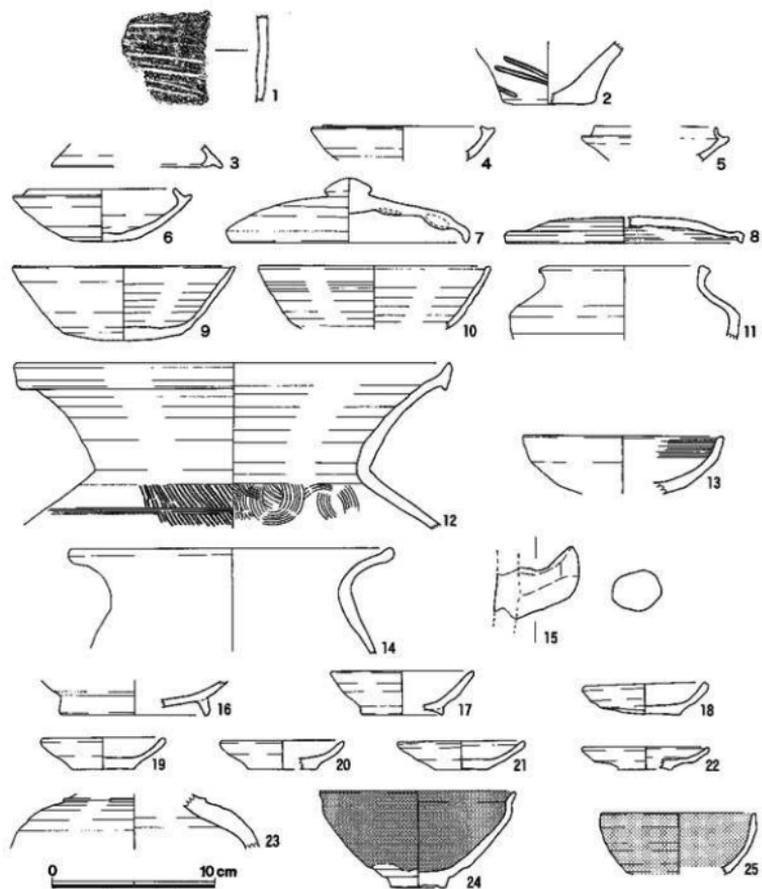
1・2=B-4区 SD04 3=B-4区 SD07 4~7=i区 SX02 B・15・16=h区 9=A-5区 10・24=c区  
 11=j区 12・14=i区 13・18・23・26=e区 17・19・20=d区 21・22=b区

第14図 八坂別所遺跡出土遺物実測図(1)



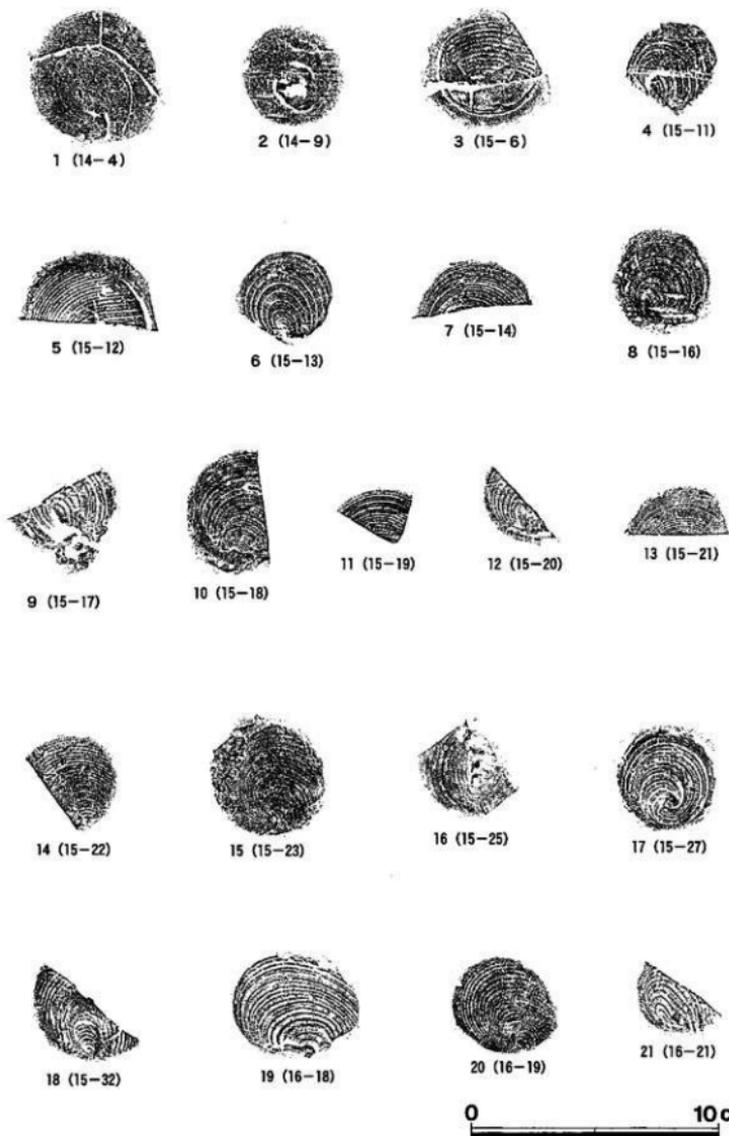
1・6・16=d区 2=A-1~4区 3・12~14=c区 4=e区 5=A-2・3区 7・9・15・20~23=i区  
 8=a区 10・11・24・26・27=A-3区 17=B-4・5区 18・25=A-3~5区 19=A-2区 28~32=辨土

第15図 八坂別所遺跡出土遺物実測図(2)

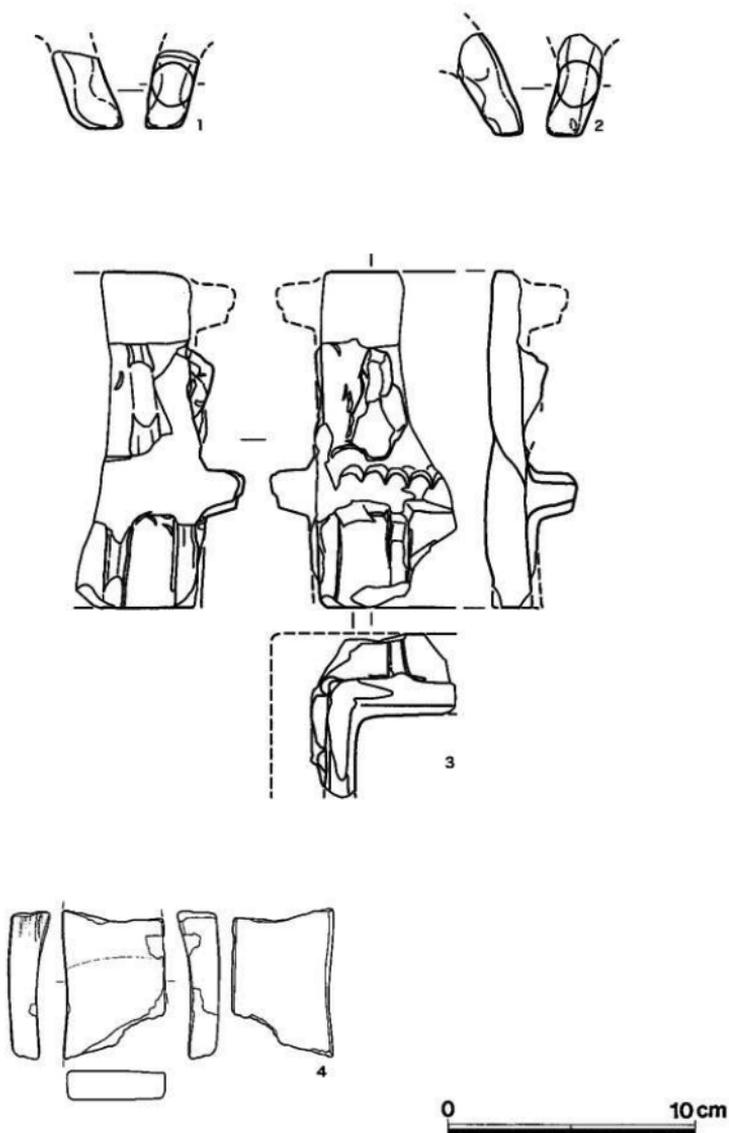


1・2=第44坑 3=第52坑 4・15・18・20=第34坑 5・21=第36坑 6・12・22=第20坑 7・10=第86坑  
8=第4坑 9=第55坑 11=第58坑 13・14・23=第64坑 16=第85坑 17・19=第60坑 24・25=第25坑

第16図 八坂別所遺跡出土遺物実測図(3)



第17図 底部糸切り痕等拓影図



第18図 八坂別所遺跡出土特殊遺物実測図



# 図版 1



調査地全景（東から）



SR1 調査区全景：上段（南から）



D1 調査区 i・j 区：第1面  
（東上方から）

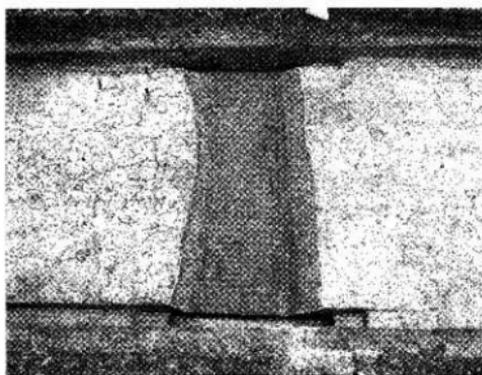
## 図版2 SR1調査区



調査区全景：下段  
(北から)



SD06 完掘状態 (西から)

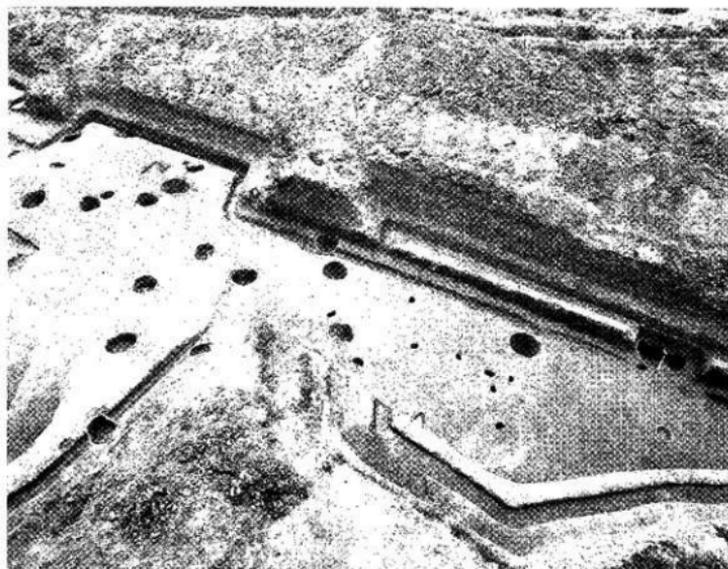


SD06 完掘状態 (北から)

図版3 SR1調査区

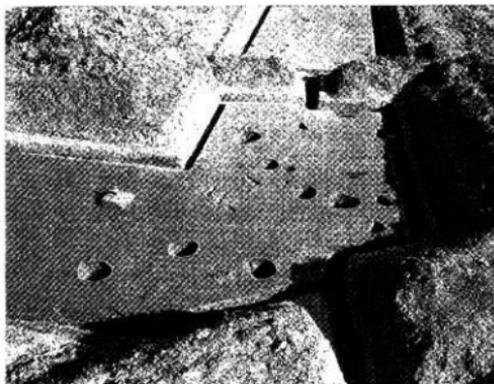


調査区全景：上段（東から）

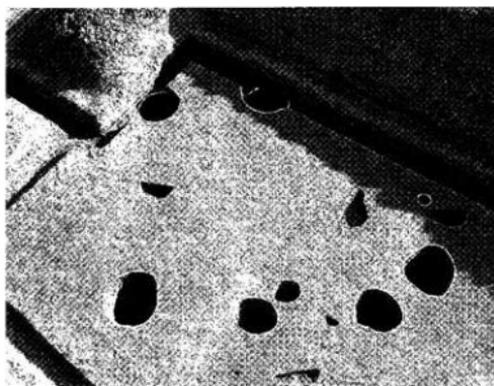


柱穴集中域（北から）

図版4 SR1調査区



掘立柱建物跡（西から）

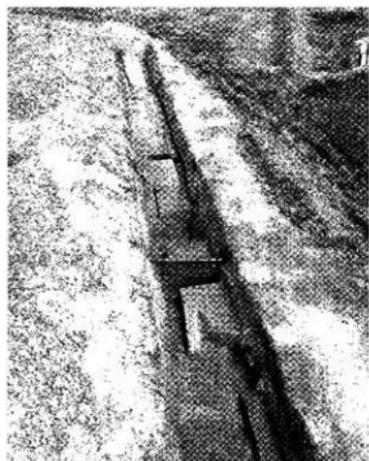


掘立柱建物跡（北西から）



小穴群：A・B-9～11グリッド  
（西から）

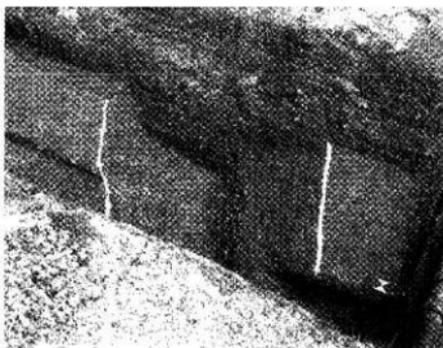
図版5 耕区切り下げ部分調査区



全景（南から）



S X02（茶毘跡）完掘状態（東から）

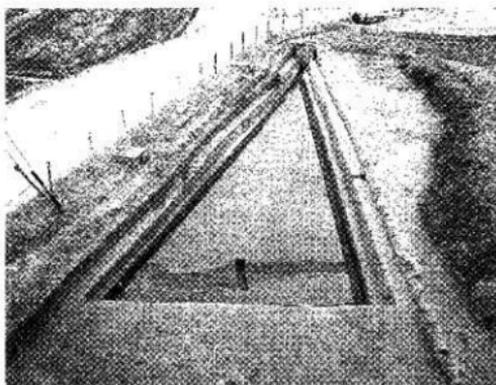


S D11 完掘状態（西から）

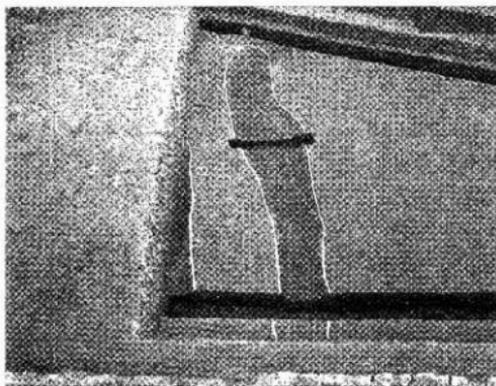
図版6 SR2調査区



全景：第1面（南から）



全景：第2面（北から）

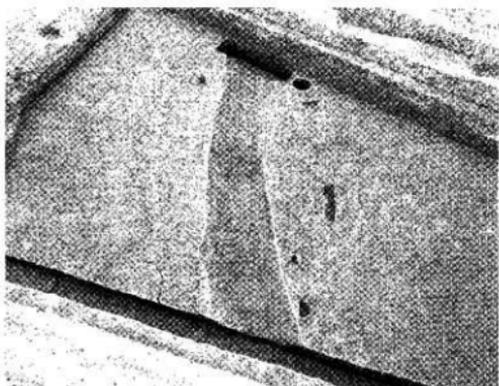


第2面 SD04・05完掘状態  
（西から）

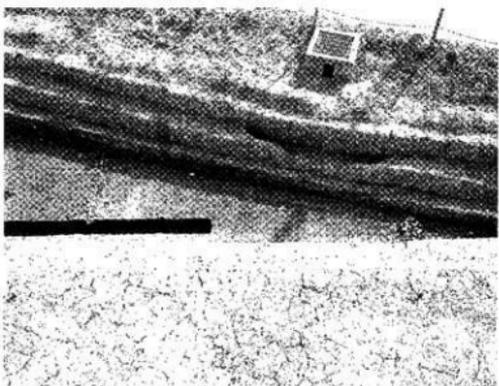
図版7 SR2調査区



全景：第3面（南から）



第3面 SD07完掘状態(西から)



第3面 礫集中域検出状態(西から)

図版8 D1調査区



全景（西から）



i・j区 遺構完掘状態：第2面  
（東から）



i・j区 遺構完掘状態：第1面  
（西から）

图版9 出土遺物(1)



14-16



14-17



14-21



15-30

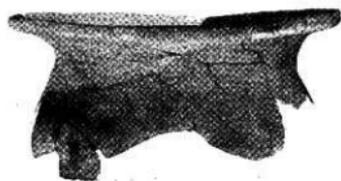


16-7



16-12

図版10 出土遺物(2)



16-14



16-24



土馬の脚



瓦塔



砥石

### III 頭地遺跡の調査

頭地遺跡の現地調査は、道路新設工事部分（SR3）、道路拡幅工事部分（SR4）と道路新設工事部分（SR5）、排水路新設工事部分（D3）の3箇所を対象として、平成9年1月～3月にSR3部分、平成9年4月～7月にSR4・5部分とD3部分の調査を実施した。

#### 1. SR3調査区

SR3調査区は周知の遺跡範囲のほぼ中程に位置する。東西方向の道路新設部分、幅4～7m、延長110mと、南北方向の道路拡幅部分幅約1.5m、延長50mのL字形の調査区で、面積540㎡が調査対象である。この調査区では、小穴76、溝状遺構15、性格不明な遺構5を検出した。

##### 1) 遺 構

遺構はある程度のもつまりを持って検出している。ここでは、そのまともりに検出した遺構について記述する。

**B・C-3・4グリッド検出遺構**（第3図、図版3）SD01は南北方向にはしる溝状遺構である。幅は1.2～2.0mで2・3条の溝から成る。深さは調査面から最も深いところで約0.2mである。断面形は皿状もしくは緩いV字形を呈する。土層の観察では、ある程度の時間幅の中で埋没しており、その形態からも自然流路と考えられる。SP02とSP03は長径約0.3m、深さはSP02が0.2m、SP03が0.3mを測る、規模の小さな柱穴と考えられる。SP03の底には石が2つ出土しており、柱を支えるものではないかと考えられる。周囲に同様な遺構が検出されなかったため、建物であるのか不明である。SP09は長径約0.45m、深さ0.35mの小穴である。上層を観察するとレンズ状の堆積だが、細かく分層されるため、時間をかけて埋まったことが考えられる。

**B・C-4～6グリッド検出遺構**（第4図、図版3・4）このあたりでは柱穴と考えられる小穴が比較的多く検出された。ただし、調査範囲の狭さから、その配置はわからない。そのなかで、SP35・SP36・SP37は長径0.6～0.7mと同程度の大きさのピット3つが距離約1.6mの間隔で直線的に並ぶ。ただし、検出した深さは0.1～0.25mと浅く、土層の観察からも柱穴という確証は得られない。

**SD08・09周辺**（第5図、図版5）SD08は調査面での上場の幅が約0.5mを測る直線的な溝状遺構である。深さ約0.15mを測るが、調査区南側壁での土層観察では少なくとも約0.25mの深さがあったようだ。断面形は台形を呈する。底は南から北へ傾斜している。SD09はSD08と同様の方向にはしる溝だが、平面形にやや乱れがあり、検出した深さもごく浅い。周辺に存在する、径0.3～0.4mのピットは柱穴と考えられるが、どのような建物で、どのような配置になるのか不明である。

**SX01・02**（第6図、図版5）SX01とSX02は0.8mの間をあけて存在する平面形が不整形な方形もしくは楕円形の遺構である。SX01の大きさは長さ1.4m、幅1.05m、深さ約0.1mを測る。SX01は長さ1.25m、幅0.95m、深さ0.15mを測る。SX01は南側と北側両端に底よりさらに10cmほど深い穴が存在する。土層を見ると、時間をかけて埋没した様子が観察される。SX02は南側に底より8cm深い穴が存在する。土層を見ると中と周囲が違った状況を示している。

**SX03**（第7図、図版6）北側が調査区外へ及んでいるが、検出した長さ2.7m、幅1.5m、深さ約0.2mを測る。断面形は台形を呈する。東西の立ち上がりは比較的はっきりしているが、南側の立ち上がりは緩い。この遺構の性格は不明だが、溝状のものになる可能性がある。遺構の西側寄りから5～15cm程の礫が覆土とともに入り込んでいた。

**SX04・05**（第8図、図版6）SX04とSX05は0.8mの間を開けて存在する。いずれも北側が調査区

外に及んでいる。平面形が南北方向に長い方形を呈する遺構である。SX04は検出した長さ0.65m、幅0.5m、深さ0.13cmを測る。SX05は検出した長さ1.85m、幅0.8m、深さ0.35mを測る。この2つの遺構内には礫が詰められるように入っていたことが特徴である。挿図には礫の上部を検出した状態と完掘した状態を示した。覆土中から遺物の出土がなく時期は不明である。

## 2. SR4・5調査区

SR4・5調査区は周知の遺跡範囲の北端に位置する。道路拡幅工事部分(SR4)と道路新設工事部分(SR5)、面積260㎡を対象とした。調査では2面の遺構面を検出している。

### 1) 第1面の遺構

第1面とした調査面は、標高49.2~49.3mで検出した。この面では、小穴79、溝状遺構7、性格不明の遺構2を検出している。小穴は掘立柱建物になるものも含まれる。また、SD05に先行するSD01とSD02、SX01に先行するSD03とSD04を検出している。まず、この面で一番新しいと考えられるこれら溝状遺構から記述する。この面の時期は奈良時代から平安時代と考えられる。

**SD01・SD02** (第10図、図版7) A・B-2・3グリッドで検出した東西方向に平行してはしる溝状遺構である。いずれも直線的にはしる。確認面上場の幅がSD01は0.3~0.5m、SD02は0.3~0.4mを測る。それぞれの間内は内々で約2.2mを測る。深さはそれぞれ調査面から最も深いところで約8~10cmと浅かった。断面形は深さが浅いのははっきりとしないが、皿状を呈する。底のレベルはかなり緩やかな変化だが、東側(逆川が流れている方向)へ傾斜している。調査地内で5mの範囲で検出しただけだが、ほぼ同じ規模で平行している様子には企画性が感じられる。そのため、自然流路ではなく、人為的に掘られ、同時に機能した溝であったことが考えられる。覆土中から土師器と須恵器の小破片が少量出土している。

**SD03・04** (第10図、図版7) D-2・3グリッドで検出した東西方向にはしる溝状遺構である。SD03は直線的にはしる。確認面上場の幅が約0.3mを測る。深さは調査面から最も深いところでも5cmを測るのみである。断面形態は深さが浅いのははっきりしないが皿状を呈するのだろうか。底の傾斜は、かなり緩やかではあるが西から東へ低くなっている。自然流路とするには直線的すぎるように感じる。SD04は西側から約3mのあたりで合流が見られる。SD03寄りの溝が5~8cmほど底のレベルが高い。その平面形には若干の乱れがあるが、概ね直線的といえる。幅は0.25~0.6mを測る。断面形は皿状を呈し、底の傾斜は西から東へ低くなっている。形態から自然流路である可能性が考えられるが、SD03と約1mの間隔で平行するため、関連があるかもしれない。遺物は覆土中より土師器と須恵器の小破片が出土している。

**掘立柱建物跡** (第11図、図版9) D-2・3グリッドで検出した。7つの小穴が規則的に並ぶため、掘立柱建物跡として考えた。小穴は、径が0.2~0.3m程度、深さは調査面から0.1~0.3mを測り、いずれも小さいものであり、建物の規模もそう大きいものではないことが考えられる。

**SX01** (第11図、図版9) 調査区外へ及んでいるため全体がどのような形態の遺構か不明であるが、平面形は方形と考えられ、調査区内で検出した一辺は3.6mを測る。検出した深さは約0.1mと浅い。性格は不明である。

**小穴集中域** (第12図、図版8) E-5~7グリッドにかけて小穴を集中して検出した。径は0.2mのものから1.3mのものがある。柱穴になると考えられるものもあるが、建物の配置は不明である。

**SD07周辺** (第13図、図版8) E-2~4グリッドにかけて、緩い弧を描き東西方向にはしる溝SD07を検出している。幅は約0.5m、深さは最も深いところで0.2mを測る。底面は検出した西端から東

端で約20cmの差で東に傾斜している。調査以前まで使われていた道路に沿っているため、道沿いの区画や導水などのために掘削された溝と考えられる。また、E-3・4グリッドには径0.2~0.8mの小穴を比較的集中して検出している。これらは深さが0.2m程で、小規模な柱穴等ではないかと考えられる。またSD07のすぐ南側にはSP21がある。これは、長径1.25m、短径0.8mの平面形が不整形な楕円を呈し、深さ0.2mを測る土壌状の遺構である。

SD05(第14図、図版9) A-3グリッドからC-2・3グリッドにかけて検出した。C-3グリッドで約110度の角度で折れ曲がっている。幅0.5~0.9m、深さは約0.1mである。底面のレベルは約5cmの範囲で上下しているが、傾斜は見られない。区画のための溝と考えられる。

## 2) 第2面の遺構

第2面は、標高48.8~49.1mで検出した。小穴48、溝状遺構14を検出している。小穴は掘立柱建物跡になるものも含まれる。第2面の時期は、奈良時代と考えられる。

小穴集中域(第16図、図版10・11) C・D-3グリッドでは小穴を集中して検出した。小穴は、径0.25~0.75mを測り、多くが柱穴と考えられる。直線的もしくは方形に並ぶものがあり、掘立柱建物跡が複数棟重複していることが考えられる。それらの方向は、ほぼ同一であり、規則性を持って建てられたことが伺われる。

溝状遺構(第15図、図版12) A・B・C-3グリッドでは、東西方向及び南北方向の溝状遺構12を検出している。それぞれほぼ同一の方向ではしり、規則性が感じられる。検出した深さは深いもので0.15mと浅い。また、E-2・3グリッドではSD20を検出した。これは第1面で検出したSD07とほぼ同一の地点に存在しており、途中で途切れているが、同様な性格と考えられる。

## 3. D3調査区(第17図)

D3調査区はSR3調査区とSR4・5調査区とのほぼ中間に位置する。西から東に傾斜する地形である。東西約50m、幅約2m、面積約100㎡の排水路新設工事部分を調査対象とした。A-6グリッドで東は調査面を2面検出した。

### 1) 第1面の遺構(第18図、図版13)

標高48.5~49.1mを測るこの面では、小穴9と溝状遺構6を検出した。小穴は径0.25~0.5m、深さは0.1~0.25mのもので、規模は小さいが建物の柱穴と考えられる。溝状遺構は南北方向に直線的にはしるものと蛇行を見せているものがある。狭い調査区を横切るため傾斜は読み取りにくい。区画や導水のための溝と自然流路と考えられる。

### 2) 第2面の遺構(第19図、図版14)

標高48.3~48.6mを測るこの面では、小穴5と溝状遺構2を検出した。遺構はA-8・9グリッドに集中している。SP12とSP13は径0.7m、深さはそれぞれ0.2mと0.3mを測る。距離は約1.8mで掘立柱建物の柱穴と考えられる。SD08は、最大幅2.9m、深さ0.5mを測る。調査区を南北に横切る溝状遺構と考えられる。底付近から土師器甕の破片が出土している(第20図7・8)。

## 4. 出土遺物

### 1) 土器(第20図~第25図)

第20図1~6は須恵器である。1の無台坏身は口径14.0cm、器高3.8cmを測る。2の甕は口径23.9cmを測る。3・5・6は坏蓋で、口径は、3が14.8cm、5が13.2cm、6が14.6cmである。3の内面と口縁部外面に黒が附着していることから、転用甕と考えられる。7・8は土師器甕である。7は、口径

13.9cm、体部最大径15.3cm、器高は推定で17.8cmを測る。器表剥落により、調整は不明である。8は口径17.1cmを測る。9～22は須恵器である。9の坏身は、最大径11.2cm、器高3.65cm、細かいノタ目が残る。底部外面に「十」のヘラ記号(第25図-1)がある。10は坏身と考えたが、坏蓋の可能性もある。11の坏身は、口径8.9cm、口縁部外面と体部の境に沈線がめぐる。12～16は、かえりがある坏蓋である。12・13は、かえりが口縁部から下に出るが、14～16は下に出ない。最大径は、12が11.9cm、13が11.4cm、14が13.4cm、15が13.2cmを測る。17～22は坏蓋である。17は口径16.5cm、器高3.5cm、18は口径16.2cm、器高3.1cm、19は、口径16.5cm、器高2.6cm、20は口径12.1cm、器高2.9cm、21は口径13.0cm、器高2.0cm、22は口径15.8cm、器高現存で3.2cmを測る。21の環状紐は、天井部ではなく体部上端に付けられている。

第21図は須恵器である。1～5は坏蓋である。口径は、1が15.6cm、2が口径15.0cm、3が14.9cm、4が16.3cm、5が14.0cmを測る。6～10は、口径の大きさから皿蓋と判断した。6は口径19.6cm、器高3.4cm、環状紐が体部の中ほどからやや上に付けられる。7は口径19.2cm、8は19.0cm、9は19.2cm、10は23.6cmを測る。口縁部部の作りは、7が垂下し、8・9は内側に折れ、10は外反気味である。11～19は有台坏身である。11の底部は、高台部から下になぞかに出る。法量は、11が口径14.5cm、器高3.95cm、12が口径14.7cm、器高4.05cm、13が口径14.8cm、器高4.05cm、14が口径13.95cm、器高4.2cm、15が口径14.8cm、器高4.35cm、16が口径14.0cm、器高3.7cm、17が口径14.4cm、器高3.8cm、18が口径14.4cm、器高4.3cm、19が口径16.8cmを測る。11の体部内面には沈線状のノタ目が残る。18の底部と体部の境は鋭く屈曲する。12の底部外面に「十」のヘラ記号(第25図-2)、13の底部外面にもヘラ記号(第25図-3)がみられる。20～28は無台坏身である。20は、口径16.3cm、器高5.9cm、21は、口径14.7cm、器高3.45cm、22は口径13.8cm、器高3.6cm、23は口径13.6cm、器高4.1cm、24は口径13.3cm、器高3.65cm、25は口径13.5cm、器高3.4cm、26は口径12.6cm、器高3.05cm、27は口径12.2cm、器高2.75cm、28は口径10.4cm、器高3.95cmを測る。22・28の口縁部には明瞭な段がある。23の底部外面には「|」のヘラ記号(第25図-4)がある。

第22図-1～23は須恵器である。1～5は坏である。底部外面の調整は、1・2がヘラ削り、3～5は未調整である。法量は、1が口径14.8cm、器高4.5cm、2が口径13.9cm、器高4.65cm、3が口径15.2cm、器高4.2cm、4は口径14.0cm、器高4.1cm、5は口径14.1cm、器高4.3cmを測る。2の底部外面に「十」のヘラ記号(第25図-5)があり、3の底部内面には当て具の痕跡が残る。6～8は有台皿である。6は、口径17.6cm、器高1.9cm、7は高台径12.6cm、8は高台径12.8cmを測る。9は口径23.4cmを測る大型で、高盤の可能性もある。10は口径19.6cmを測る。11～14は皿である。法量は、11が口径18.3cm、器高2.25cm、12が口径16.6cm、器高2.45cm、13が口径15.0cm、器高2.2cm、14は口径12.4cm、器高2.65cmを測る。14は、口径が小さく、器壁が厚く、ノタ目が顕著で、他の皿とは異質である。15は壺蓋で、最大径8.1cm、器高現存で1.7cmを測る。16の小型壺は、口径7.5cm、最大径8.2cmを測る。17の壺は、口径12.5cm、最大径20.0cm、器壁を厚く作る。18～23は瓶である。18は最大径15.5cmを測り、肩が張る。19は最大径14.8cmを測り、肩は張らない。20は底部が高台部より下に出る。高台は、四角形を呈する。21～23は瓶の口頸部で、21・22は口縁部が大きく外反するタイプである。口径は、21が17.0cm、22が16.4cm、23は11.8cmを測る。

第23図1～12は須恵器で、13～27は土師器である。1は瓶の口頸部、2は小型瓶の口頸部である。3は壺の口縁部で、口径14.0cmを測る。4は平瓶の取っ手である。5は、最大径11.2cmを測り、注口が突出する。文様帯はなく、ヘラ削りは体部下端と底部に限られ、底部を平らに作る。6～9は壺である。6は口径29.4cmを測り、外面に凸帯が巡る。7は口径20.6cm、8は口径25.1cm、9は口径22.4cm

を測る。10は高環の脚部で2条の沈線が巡る。11は脚端部が大きく広がる高環の脚部である。12は最大径17.0cmを測る鉢または無蓋高環の坏部と考えられる。13～18は坏である。13は口径11.2cm、器高現存で3.6cm、14は口径11.9cmを測る。14は高環の坏部の可能性がある。15は口径15.0cm、器高2.95cmを測る。16は口径14.8cm、器高3.05cmを測り、外面に指頭痕が残る。全面を赤彩する。17は口径13.8cm、器高3.2cm、体部外面の下半に指頭痕残り、内面に横ナデの擦痕が残る。全面に赤彩を施す。18は口径10.8cm、器高3.8cmを測る。19～22は皿である。19は口径20.2cm、器高1.95cm、20は口径15.8cm、器高2.05cm、21は口径14.8cm、器高1.9cmを測る。20の内外面に赤彩が残る。23は台付き皿の脚部で内外面に横ナデの擦痕が残る。全面に赤彩が施される。24は蓋のつまみである。25は蓋の底部で、外面に細かい刷毛目が施される。26・27は、鍋または甕のI線部で、26が口径37.0cmを測り、外面に斜位の細かい刷毛目が残る。27は口径43.2cmを測り、縦位の刷毛目の後に横ナデが施される。

第24図1～16は土師器、17・18は灰釉陶器、19～31は山茶碗である。1～7は甕で、1は口径25.6cm、2は口径23.3cm、3は口径24.6cm、4は口径22.4cm、5は口径21.9cmを測る。2の外面は、斜位の刷毛目調整後に横ナデが施され、4・5の外面には横ナデの擦痕が残る。8～12は甕と考えられる。8は口径19.2cm、9は口径17.0cm、体部の最大径16.6cm、10は口径16.2cmを測る。10・11の内外面には横ナデの擦痕が残る。12は口縁端部を肥厚させる。13・14は台付き甕の脚である。13は端部径12.2cm、14は14.8cmを測る。13の外面には、縦位の粗い刷毛目が、内面には斜位の粗い刷毛目が施される。15は短脚の高環の脚と考えられる。16はミニチュア土器の底部と考えられ、底径4.2cmを測る。17は、高台径7.8cm、見込みに沈線が巡る。へう削りは高台の内側に限られる。18は、高台径6.4cm、へう削りは体部下端に及ぶ。19～24は、東遼江系の小碗である。法量は、19が口径9.6cm、器高2.9cm、20が口径9.2cm、器高2.9cm、21が口径9.4cm、器高2.5cm、22が口径9.2cm、器高2.3cm、23が口径8.9cm、器高2.95cm、24が口径9.2cm、器高2.75cmを測る。底部調整は、19・23が糸切り後ナデ、21・24は中央に糸切り痕を残し、ナデ調整を施す。25～30の山茶碗のうち、25・26は麗美・湖西系、他は東遼江系である。底部調整は、25が糸切り後ナデ、他は糸切り痕を残す。26の高台短部にはモミ痕が残る。25～27の高台は高いが、28～30は低い三角形をした小さな高台である。31の瀝美産の甕は、底部を薄く体部を厚く作る。

出土遺物は、7世紀中頃から8世紀全般、12世紀の2時期のものが主体をなしている。

## 2) 特殊遺物 (第26図、図版17)

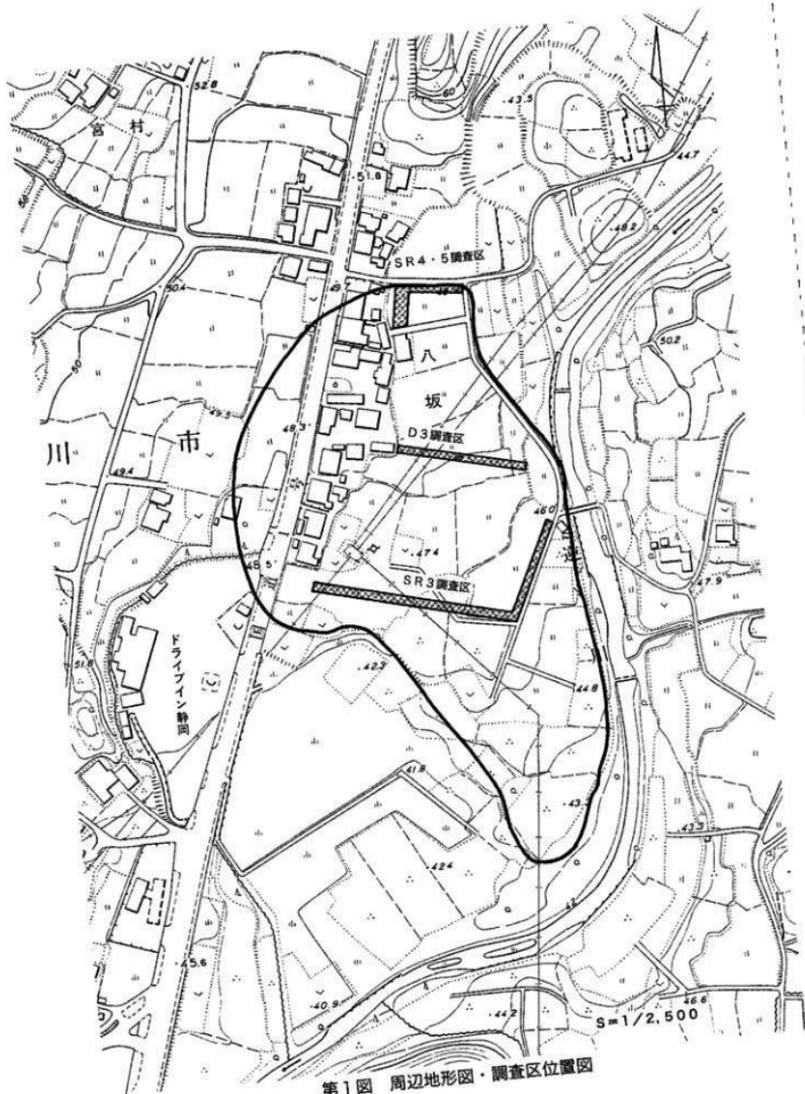
第26図1は、SR4・5調査区北側排水溝の掘削時に出土した須恵器円面祝の破片である。口径は推定で15cmである。I線部の直下はナデにより凹められている。胴部には連続して穿孔されており、横位の櫛目が入れている。

第26図2は、D3調査区の第1面A6グリッドから出土した砥石である。長さ8.79cm、幅2.79cm、厚さ0.94cmを測り、重さは36.1gを量る。表と裏、側面を砥面としている。穿孔は片側穿孔である。正面上部に鋸痕があり、裏面に刃潰し痕がある。

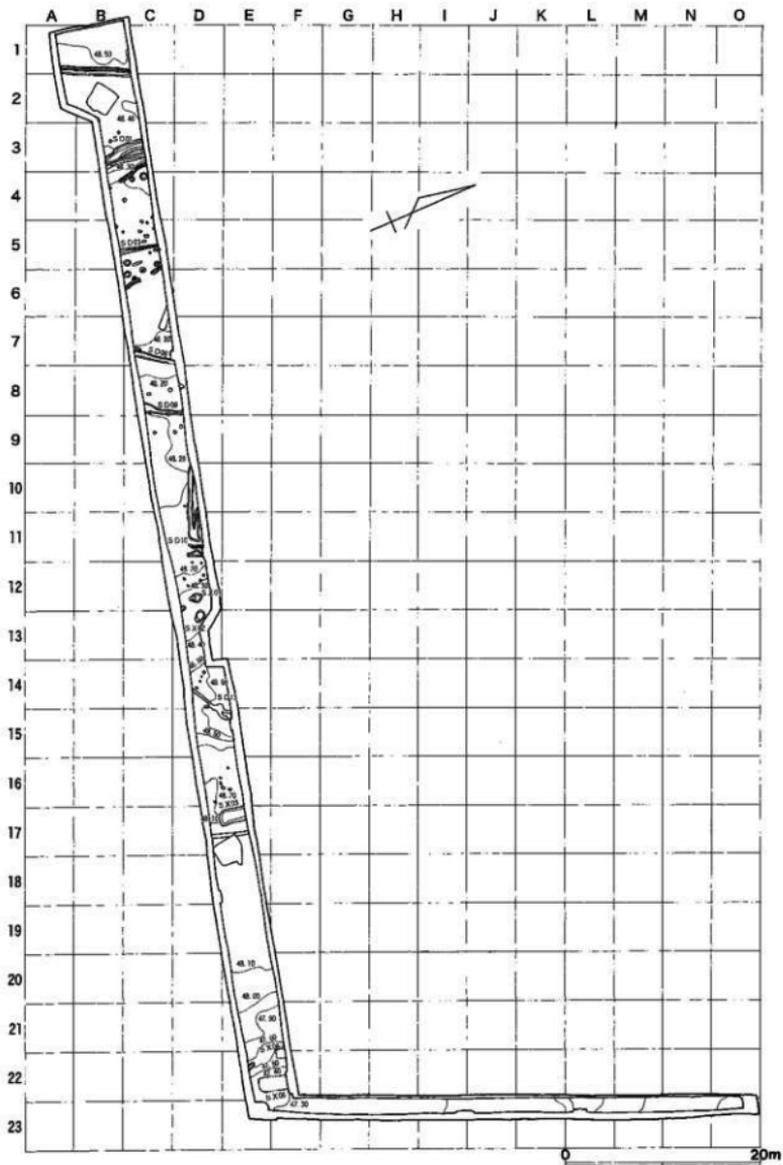
## 5. まとめ

ここで、今回の調査において特記される事項を記述し、まとめたい。

SR4・5調査区では、建物の柱穴と考えられる遺構を多く検出した。これらは全容がわかるものではなかったが、掘立柱建物跡が重複していることが考えられる。さらに、この調査区で出土した円面祝は官衙との関わりが考えられる遺物である。これらのことから、古代における頭地遺跡の性格は、一般の集落とは違うことが伺える。そして、それは八坂別所遺跡と関連して考えるべきものであろう。

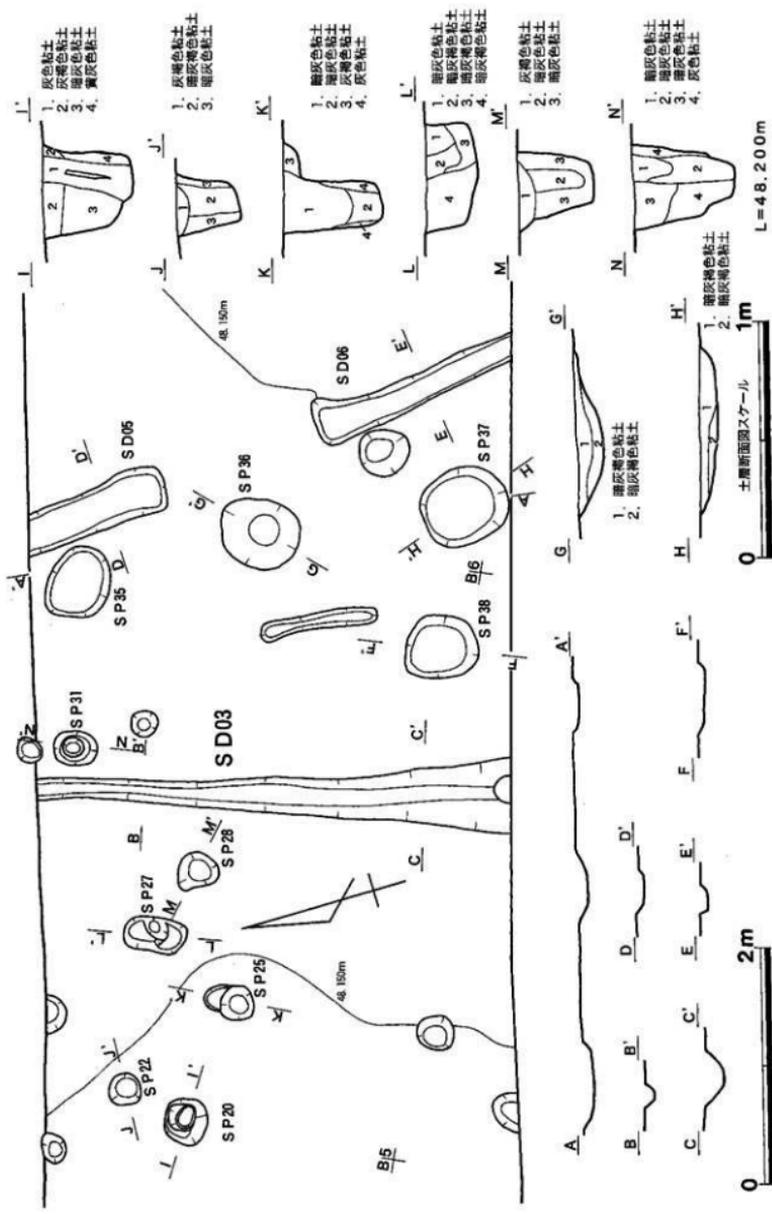


第1図 周辺地形図・調査区位置図



第2図 SR3調査区 全体図





- 1. 灰色粘土
- 2. 灰褐色粘土
- 3. 暗灰色粘土
- 4. 黄灰色粘土

- 1. 灰褐色粘土
- 2. 暗灰色粘土
- 3. 暗灰色粘土

- 1. 暗灰色粘土
- 2. 暗灰色粘土
- 3. 灰褐色粘土
- 4. 灰色粘土

- 1. 暗灰色粘土
- 2. 暗灰色粘土
- 3. 暗灰色粘土
- 4. 暗灰色粘土

- 1. 暗灰色粘土
- 2. 暗灰色粘土
- 3. 暗灰色粘土

- 1. 暗灰色粘土
- 2. 暗灰色粘土
- 3. 暗灰色粘土
- 4. 灰色粘土

- 1. 暗灰色粘土
- 2. 暗灰色粘土

- 1. 暗灰色粘土
- 2. 暗灰色粘土

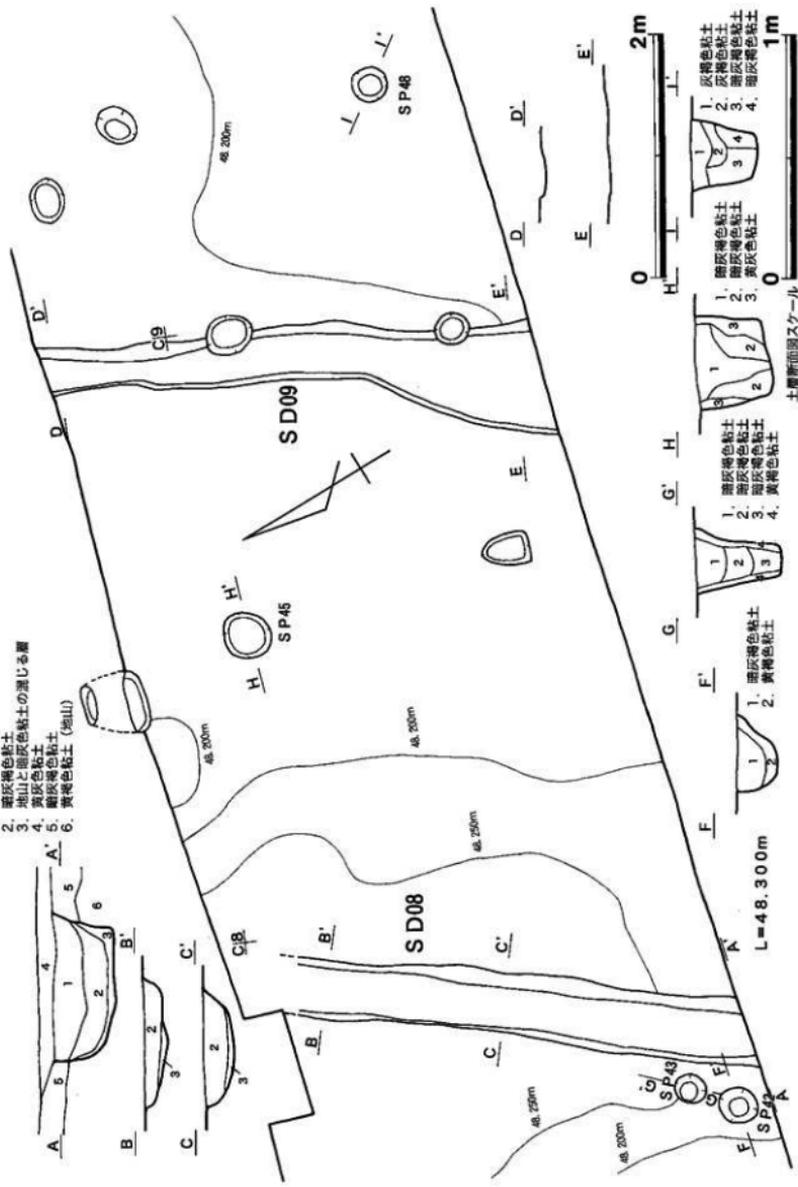
0 1m  
土層断面図スケール

0 2m

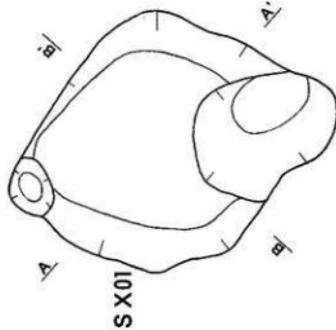
L=48,200m

第4図 SR3調査区 B・C-C-4~6グリッド遺構実測図

1. 黒灰色粘土  
 2. 黒灰色粘土  
 3. 赤山と黒灰色粘土の混じる層  
 4. 黒灰色粘土  
 5. 黒灰色粘土  
 6. 黄褐色粘土 (畑山)



第5図 S R3調査区 S D08・09周辺遺構実測図



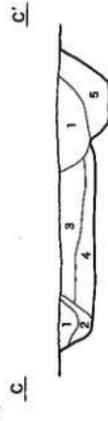
1. 暗灰茶褐色土
2. 暗灰茶褐色土
3. 灰茶褐色土



1. 暗灰茶褐色土
2. 暗灰茶褐色土
3. 灰茶褐色土



↑ 2 m 先C-13杭

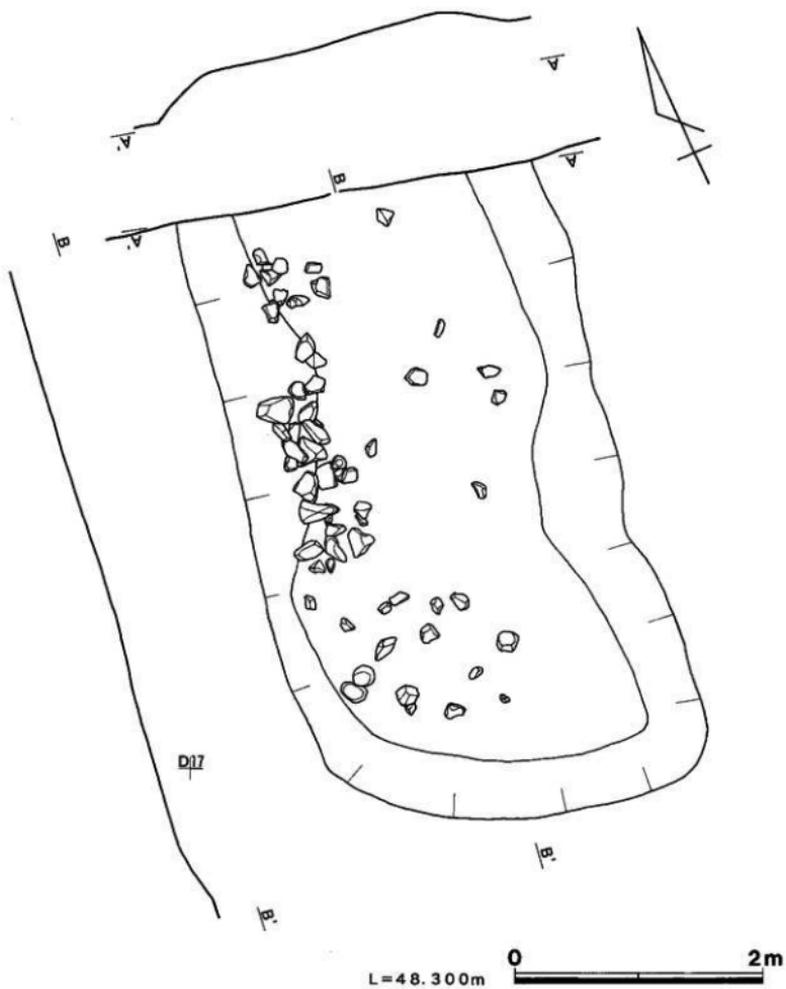


1. 暗灰茶褐色土
2. 灰茶褐色土
3. 暗灰茶褐色土
4. 暗灰茶褐色土
5. 灰茶褐色土



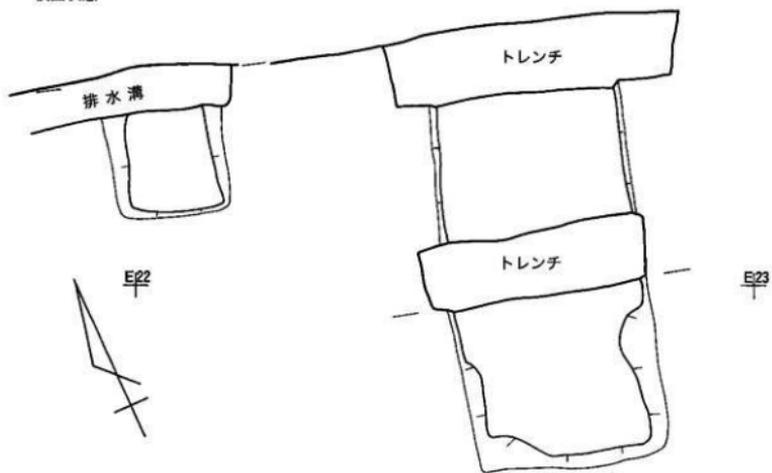
L=48.500m

第6図 SR3調査区 SX01・02実測図

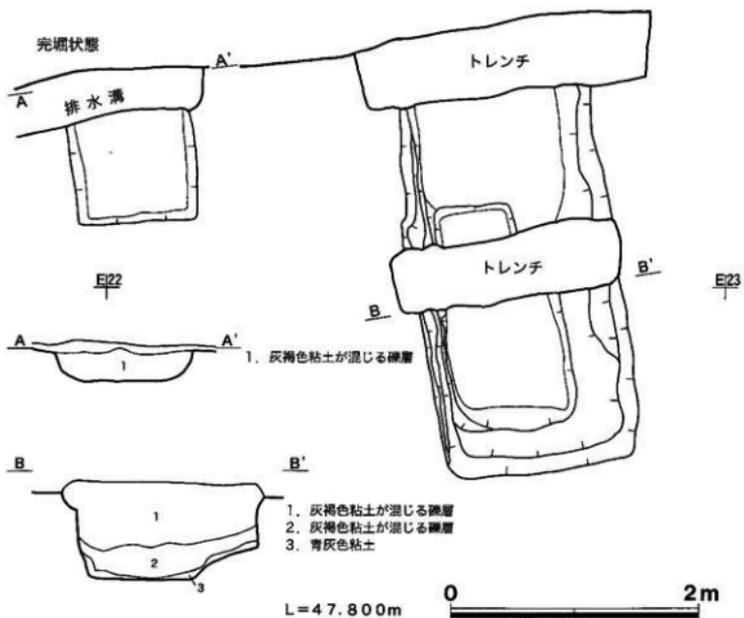


第7図 SR3調査区 SX03実測図

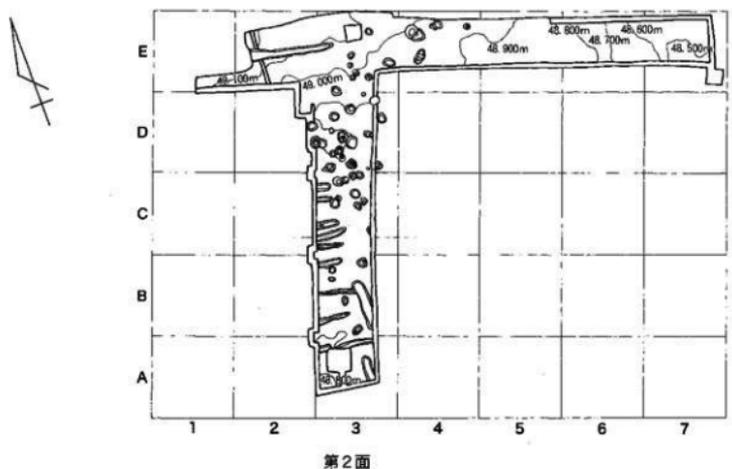
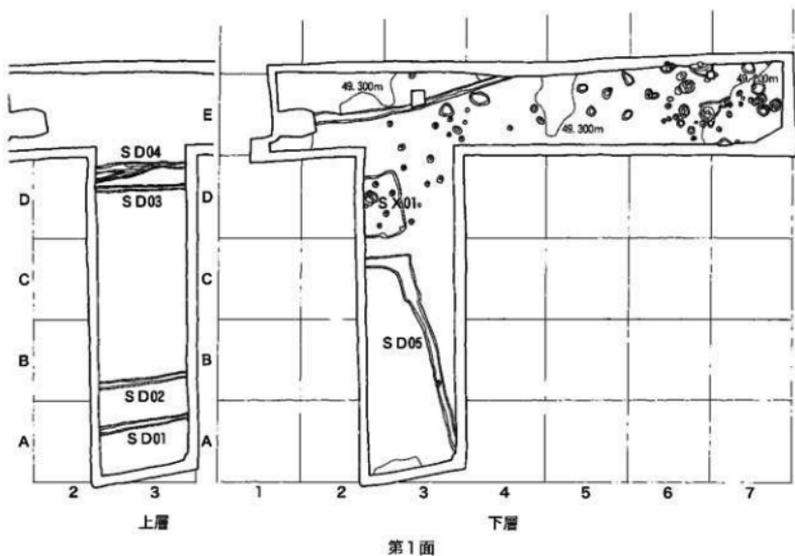
検出状態



完掘状態

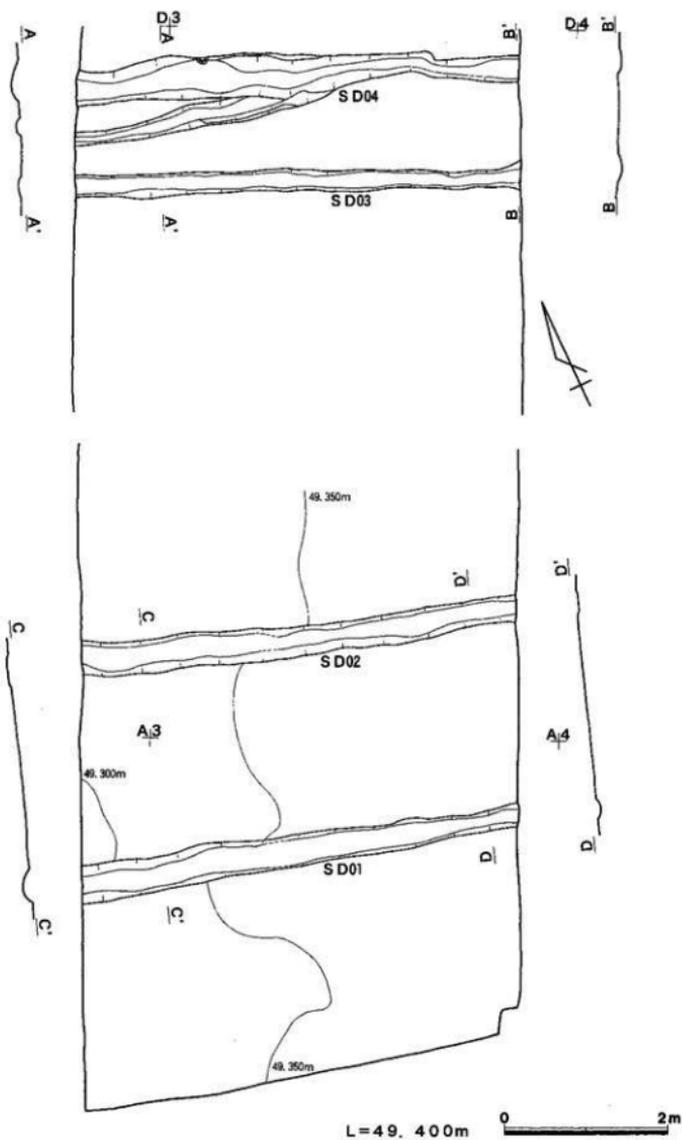


第8図 SR3調査区 SX04・05実測図

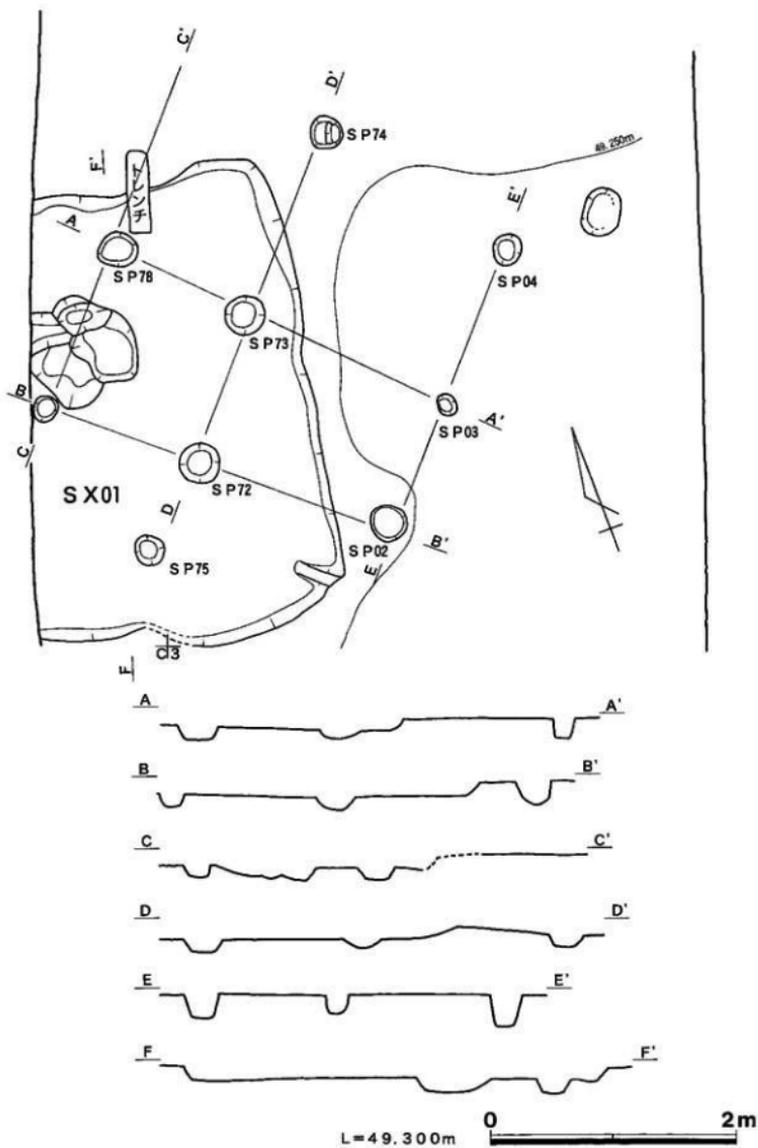


0 10m

第9図 SR4・5調査区 全体図

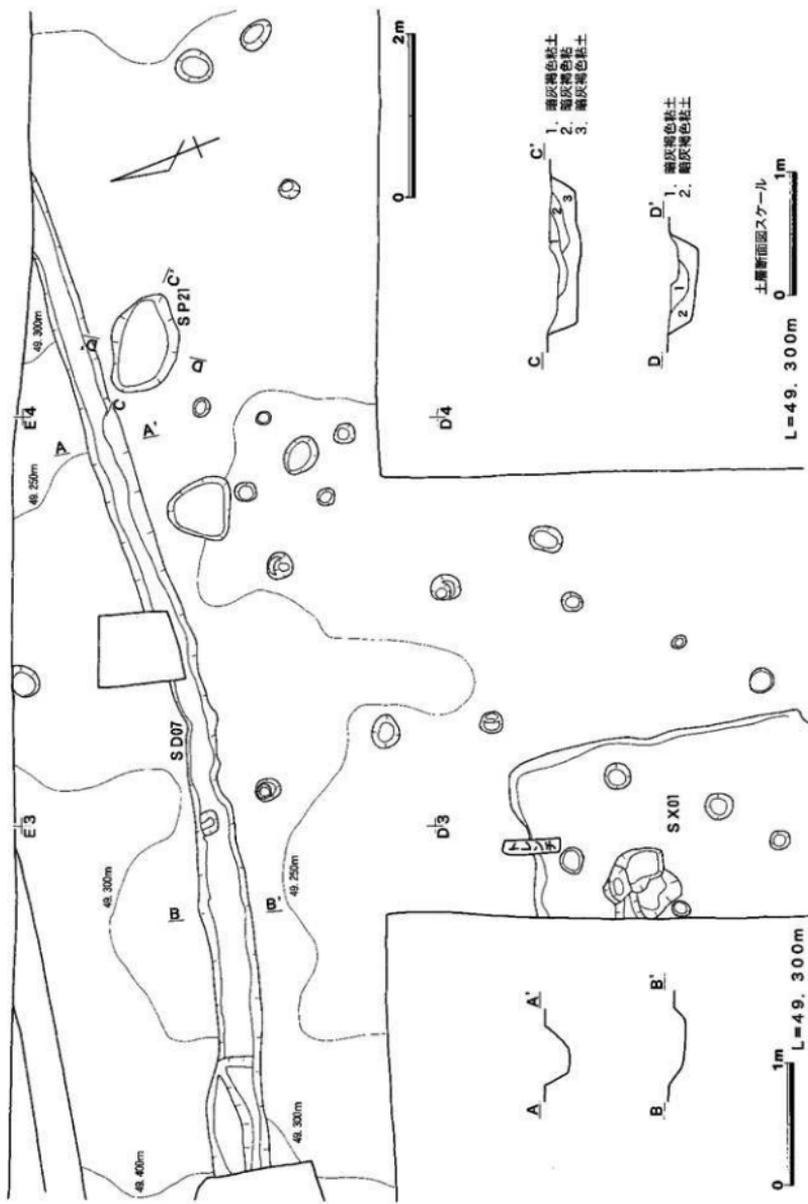


第10図 SR4・5調査区 第1面 SD01~04実測図

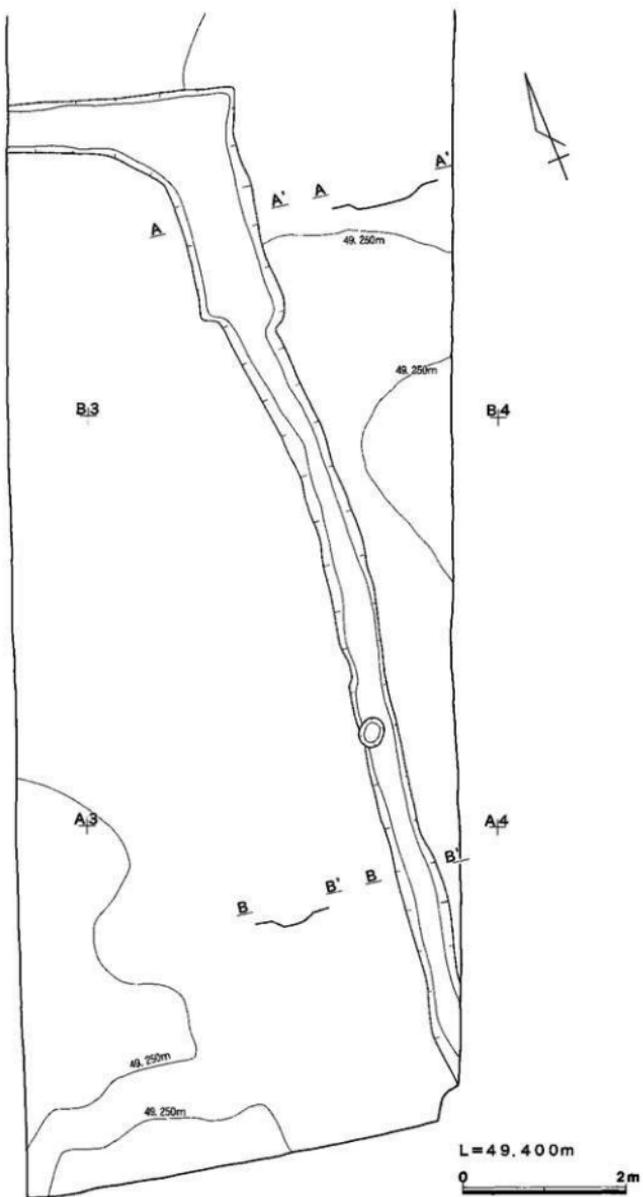


第11図 SR4・5調査区 第1面 SX01、掘立柱建物跡実測図

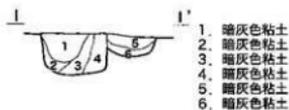
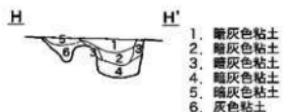
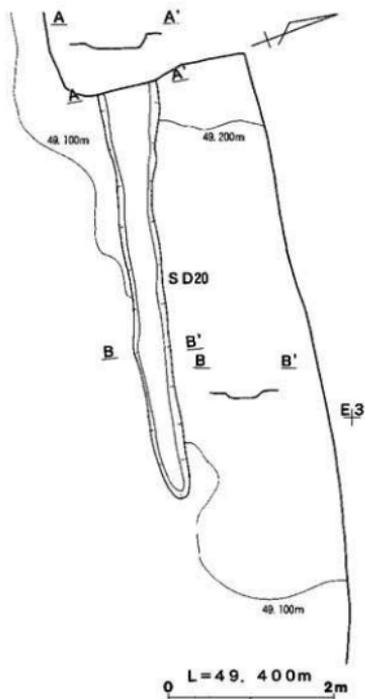
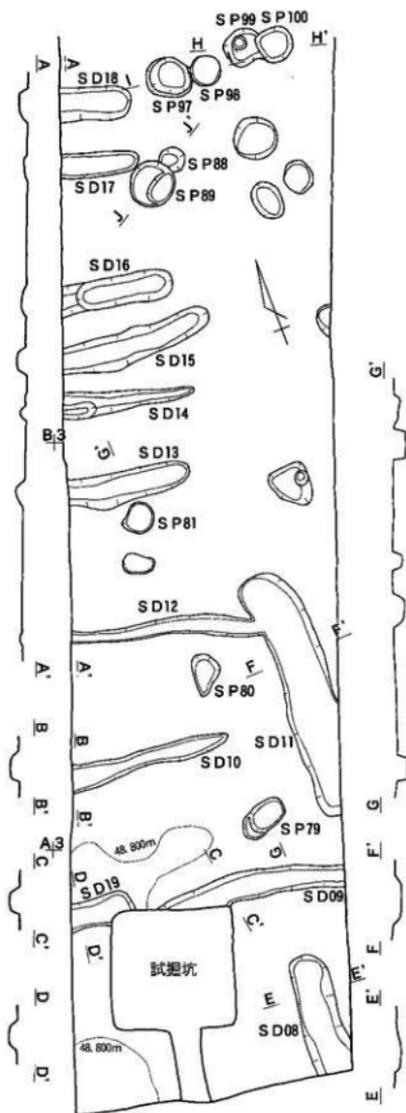




第13図 SR4・5調査区 第1面 遺構実測図(2)



第14图 SR4・5調査区 第1面 SD05実測図

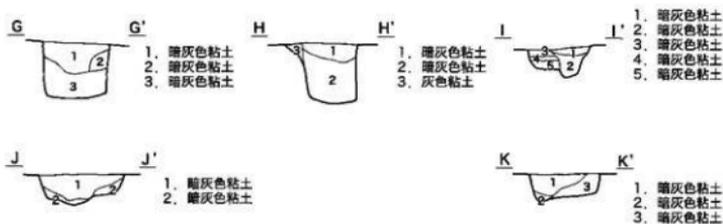
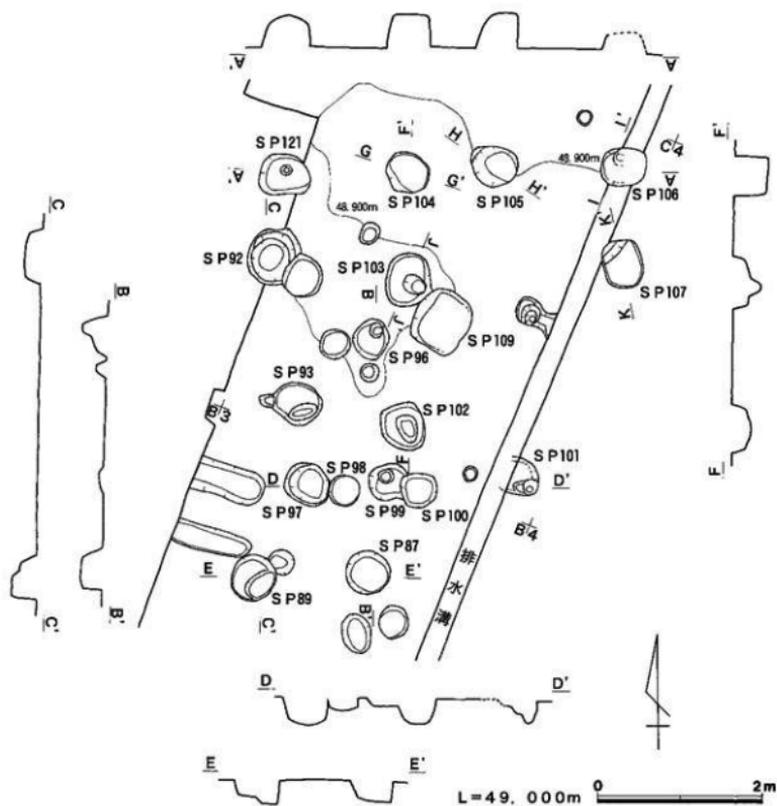


土層断面図スケール

L=49,000m 0 2m

L=49,000m 0 1m

第15図 SR4.5調査区 第2面 遺構実測図(1)

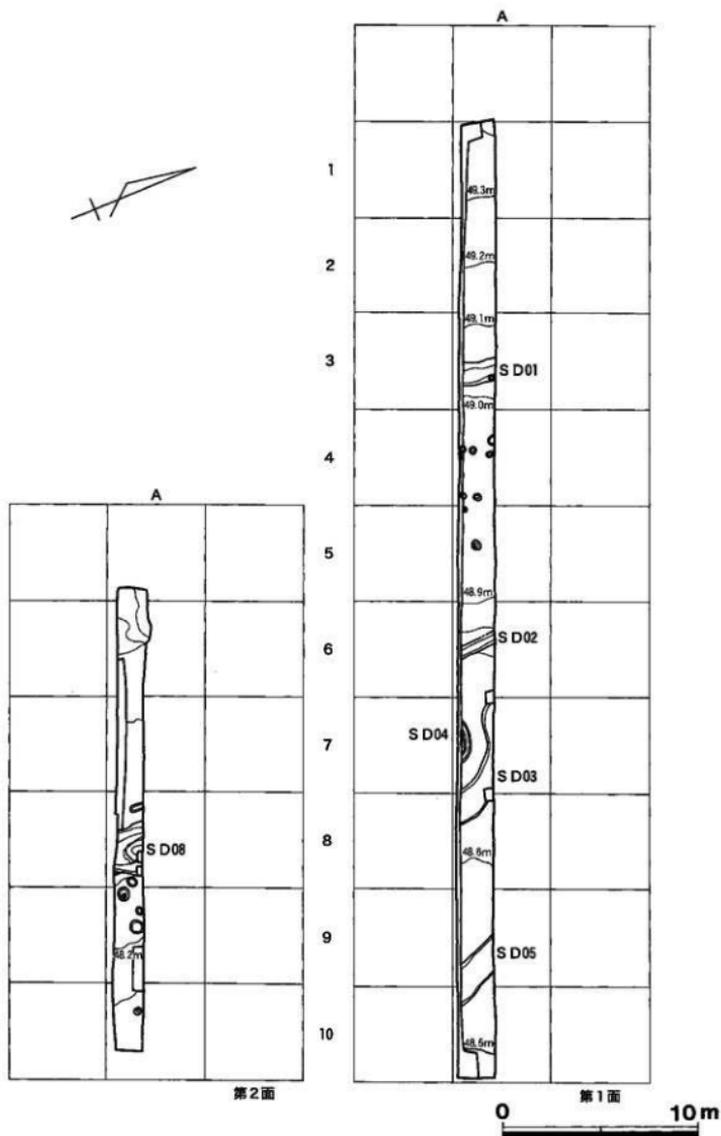


土層断面図スケール

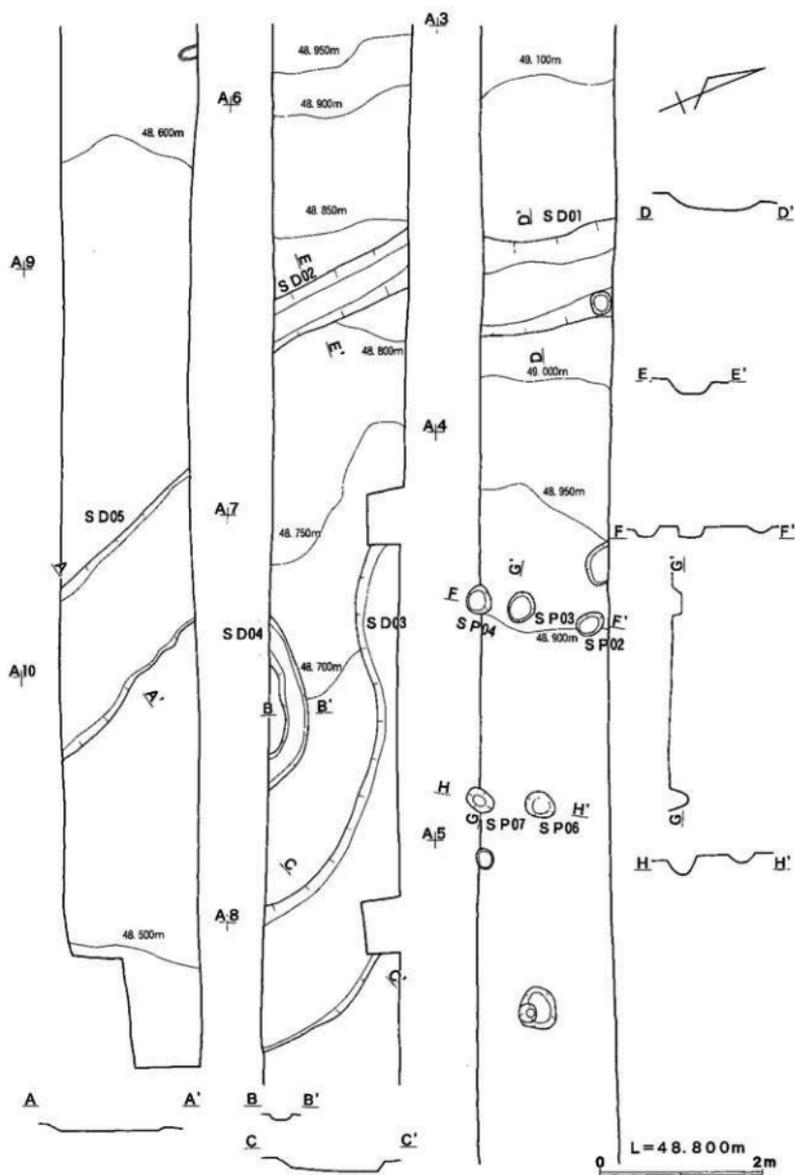
L=49.000m

0 1m

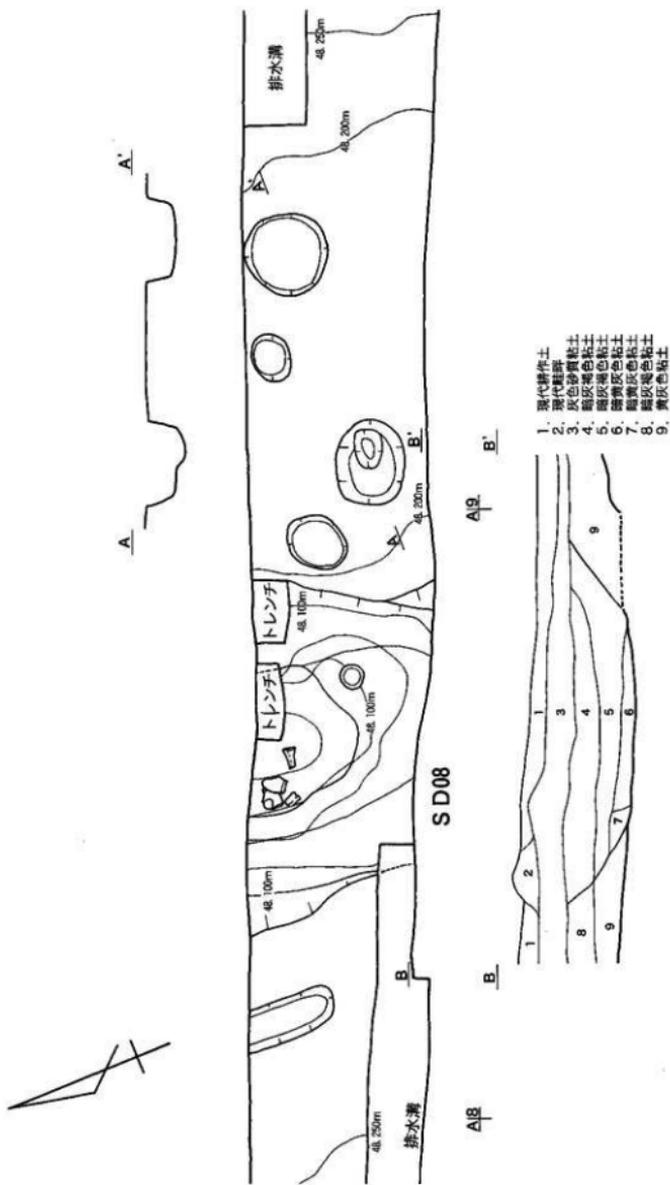
第16図 SR4.5調査区 第2面 遺構実測図(2)



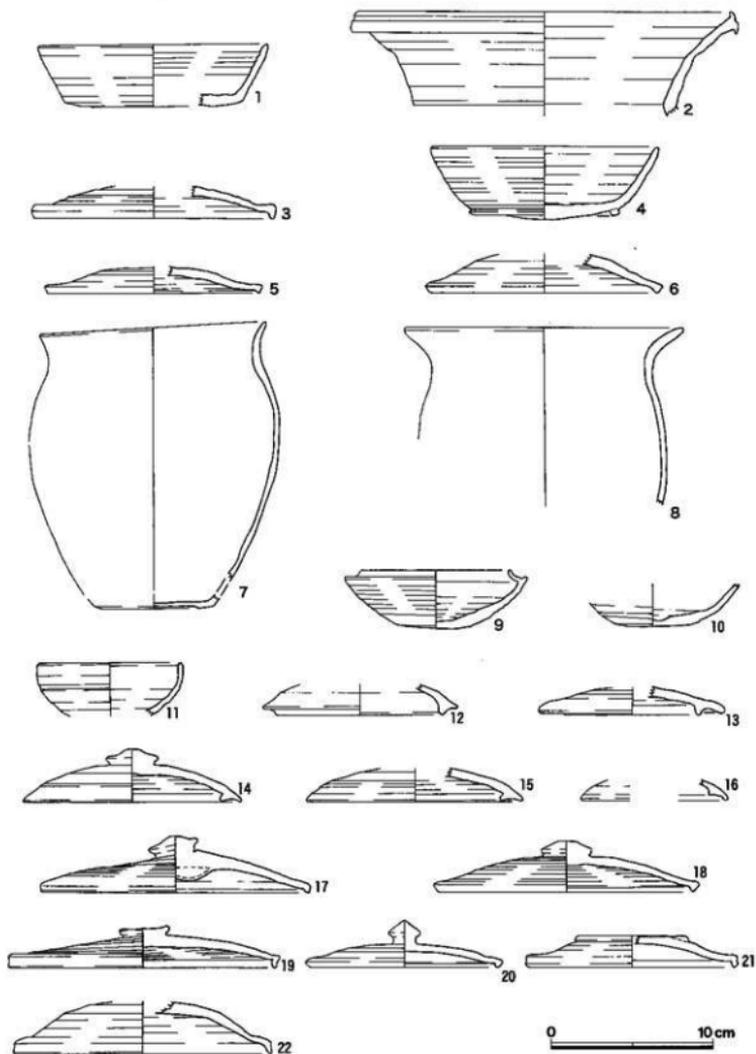
第17図 D3調査区 全体図



第18图 D3調査区 第1面 遺構実測図

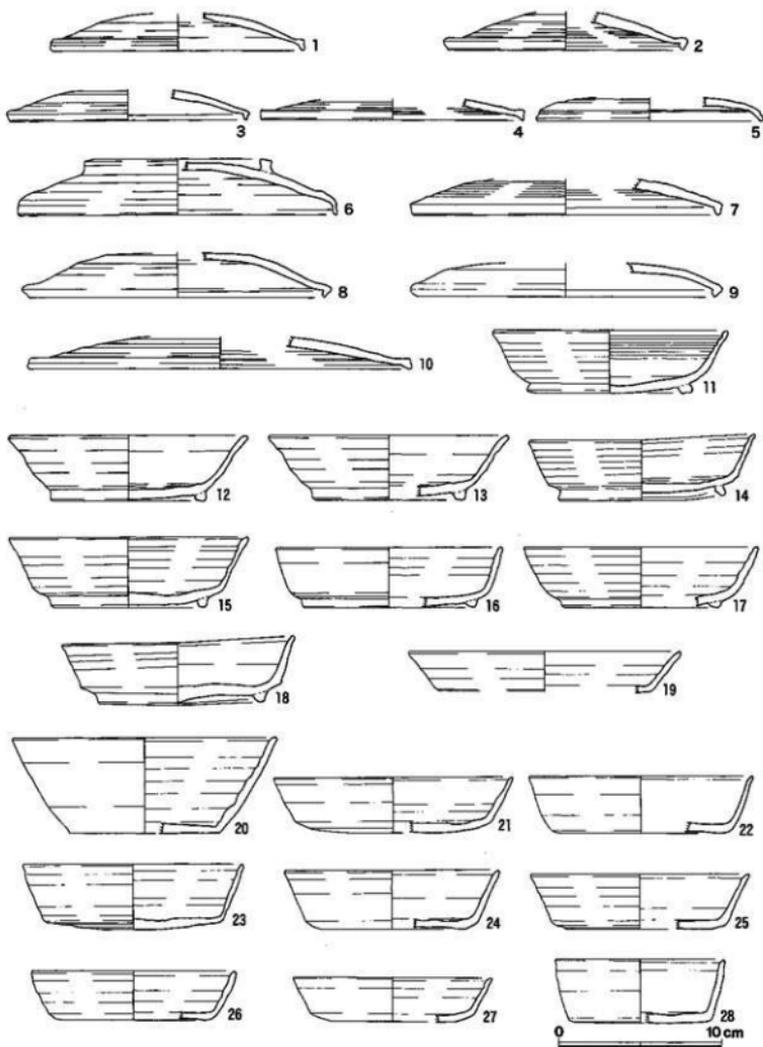


第19図 D3調査区 第2面 SD08周辺実測図



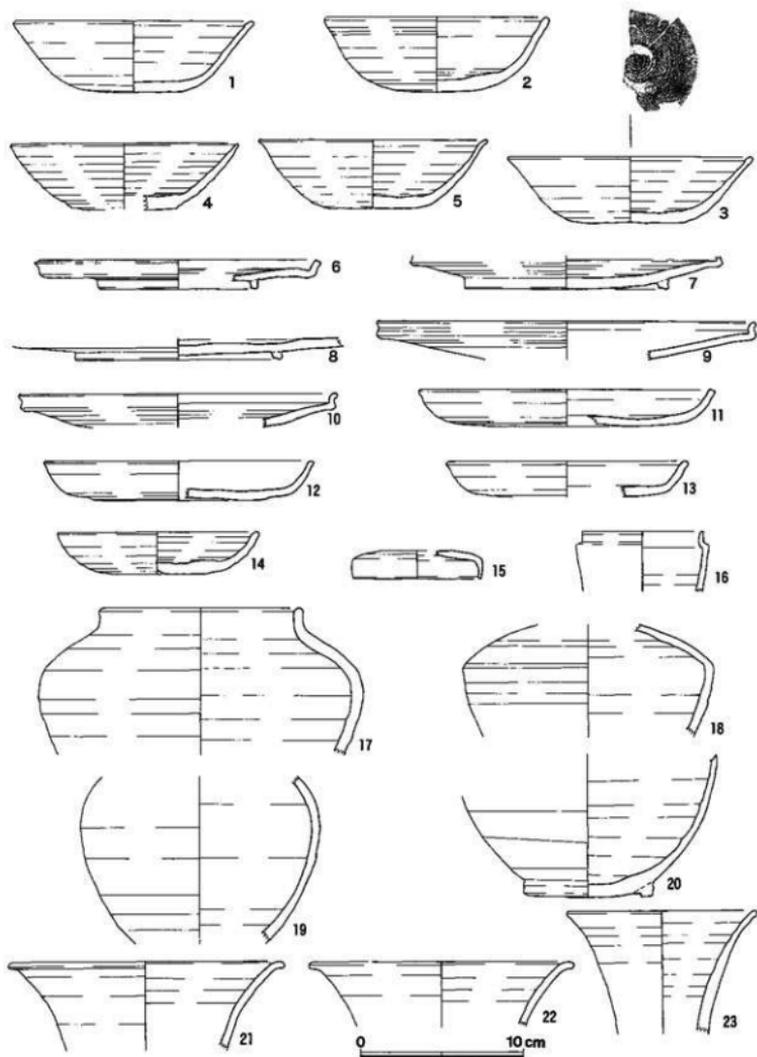
1=E-16区 SP63 2=D-3区 SP109 3=E-4区 SP124 4=A-7区 SD03 5=B-3区 SD05  
 6=A-9·10区 SD05 7·8=A-9区 SD08 9=i区 10=SR-4·5 11=E-7区 12=b区  
 13=A-7·8区 14·15=D-3区 16=B-2·3区 17=E-22·F-22·23·G-23区 18·19=D-3区  
 20=E-2区 21=E-1区 22=B-2区

第20图 頭地遺跡出土遺物実測図(1)



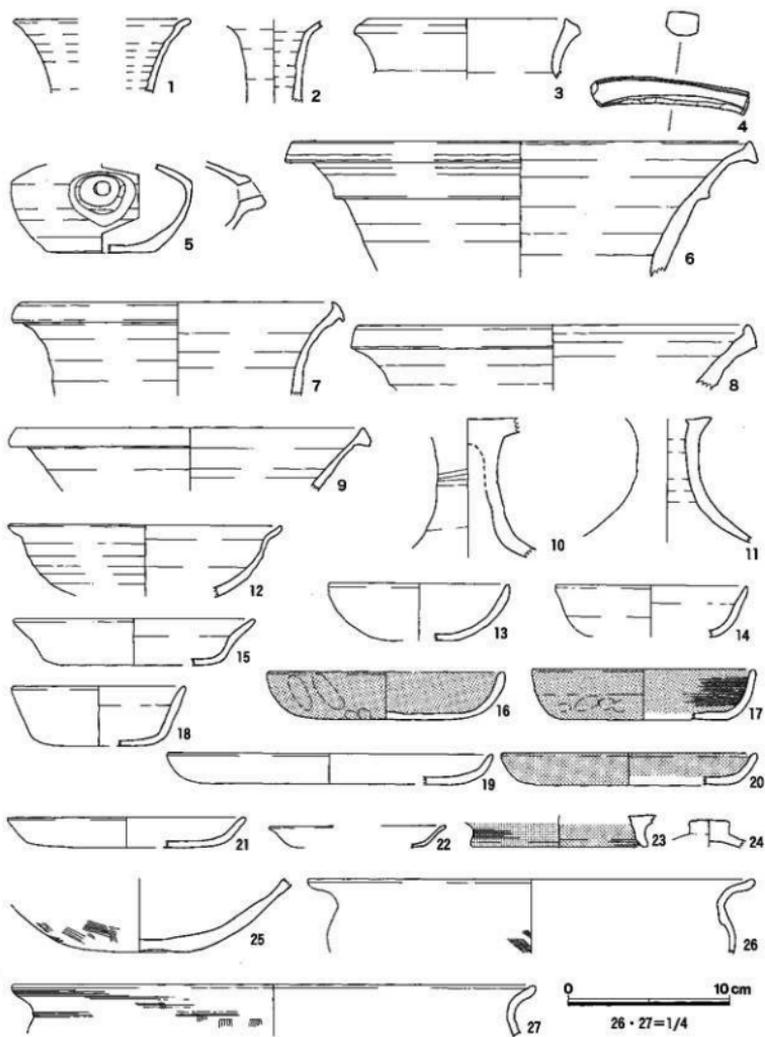
1・12・16=E-3区 2・6・9・10=E-2区 3・4・7・15=SR-4・5 5=g区 8・14・19=D-3区  
 11=D-2区 13=B-3区 16=a区 17=H・I-23区 20=I区 21=J・K-23区 22=C-3区 23=E-2・3区  
 24=F-7区 25=B-2・3区 26=A-2・3区 27=E-1区 28=E-2・3区

第21圖 頭地遺跡出土遺物実測図(2)



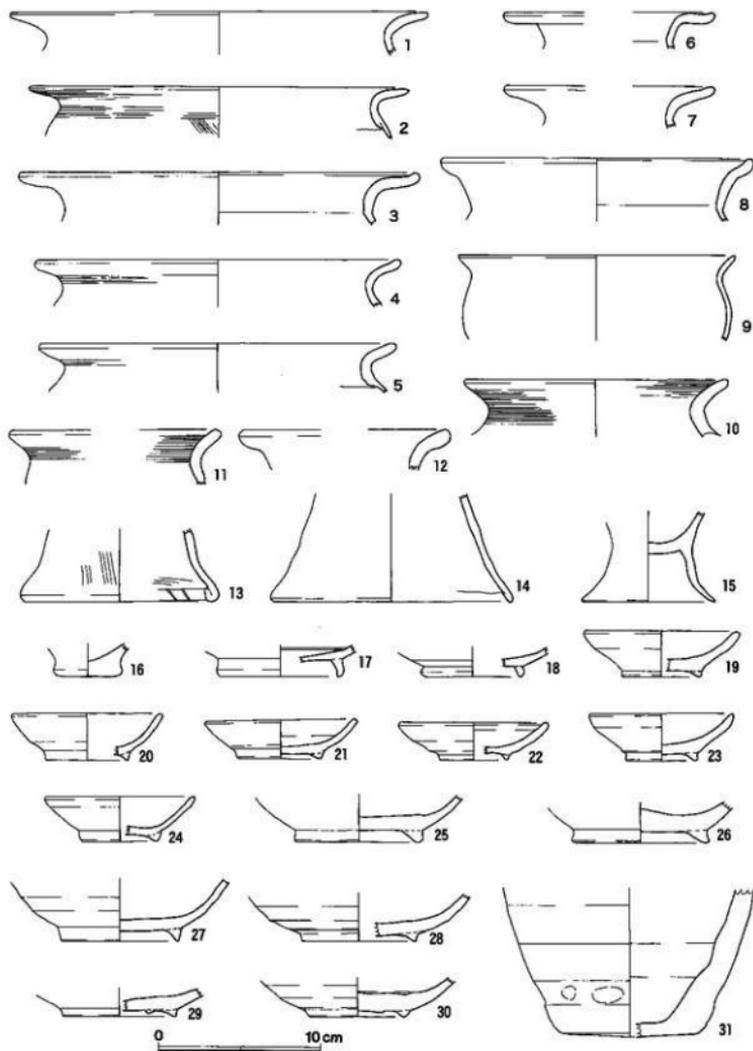
1=C-2, D-2・3区 2=E-22区 3・11・21=D-3区 4=B-2・3区 5・8=SR-4・5  
 6・18=E-3区 7・10・12・13=E-2区 9=E-1・2区 14・16=A-8区 15=D区 17=F-1~3区  
 19=E-1~3区 20=D-2・3, E-2区 22=F-7区 23=D-2・3区

第22図 頭地遺跡出土遺物実測図(3)



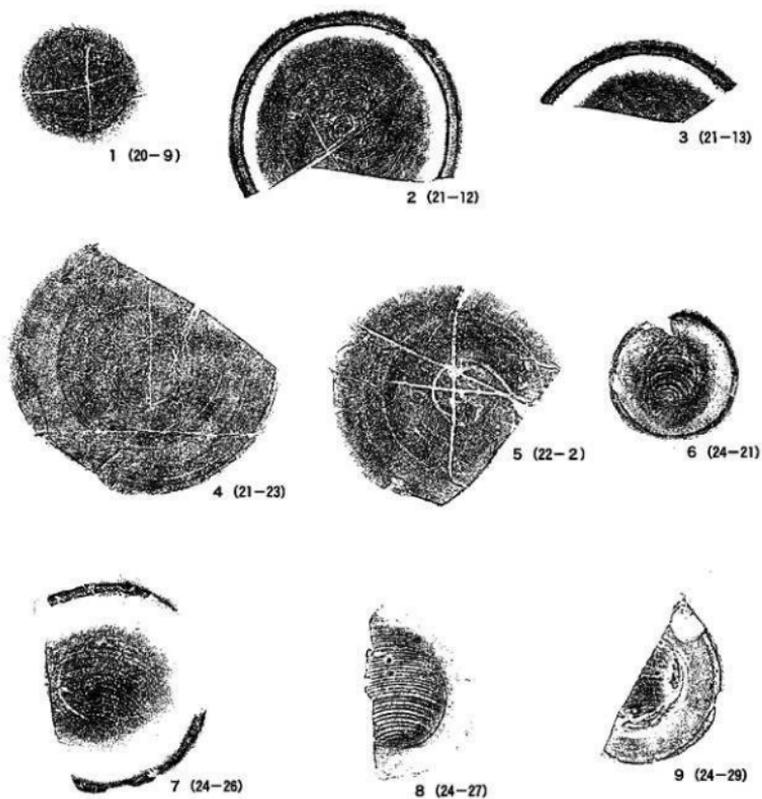
1・22=SR-4・5 2・14~16・19・25~27=E-3区 3=I区 4・5・18=C-2・3区 6・7=D-2・3区  
8=J・K-23区 9~11=F-7区 12・17・20・21・24=E-2区 13=D-3区 23=A-6区

第23图 頭地遺跡出土遺物実測図(4)

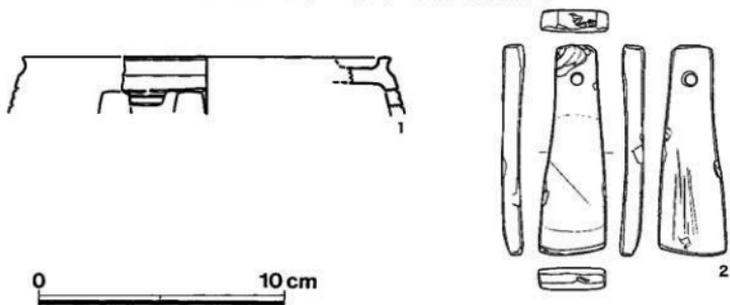


1·6=E-3区 2=A-2区 3·10=E-2区 4·5·9·31=i区 7·16=F-7区 8=A-8区  
 11·12·19·26=SR-4·5 13=D-3区 14=g区 15=L-23区 16=A-3区  
 17·20·21·23·25·27~29=a区東 22=D-2·3区 24=B-4区 30=e区

第24図 頭地遺跡出土遺物実測図(5)



第25図 底部ヘラ記号・糸切り痕拓影図



第26図 頭地遺跡出土特殊遺物実測図

図版1 SR4・5調査区



調査区全景：第1面（北上方から）

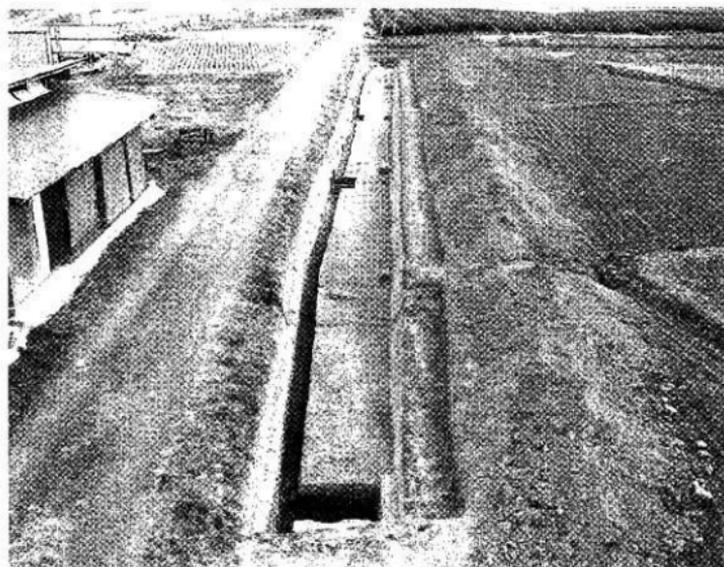


調査区全景：第2面（東上方から）

図版2 SR3調査区



調査区全景：南北方向（西から）

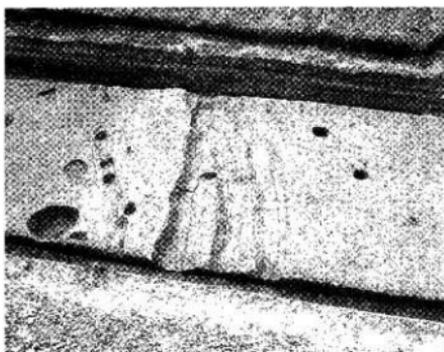


調査区全景：東西方向（北から）

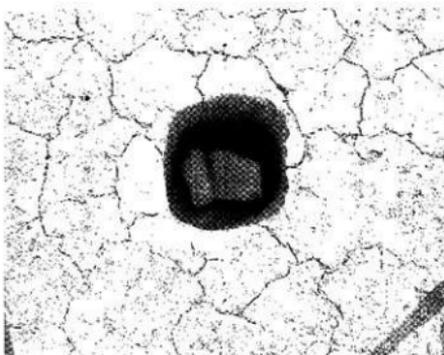
図版3 SR3調査区



B・C-6グリッド以北  
遺構集中域(東から)



SD01周辺 完掘状態(北から)



SP03 礫出土状態

図版4 SR3調査区

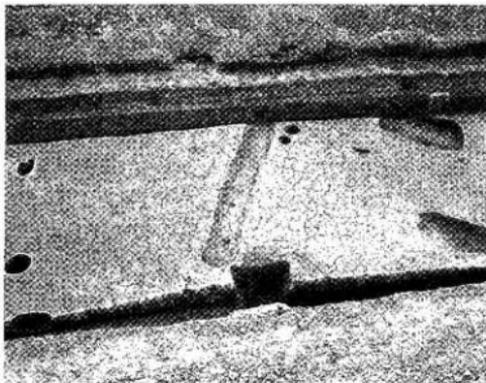


B・C-4～6グリッド完掘状態（北から）

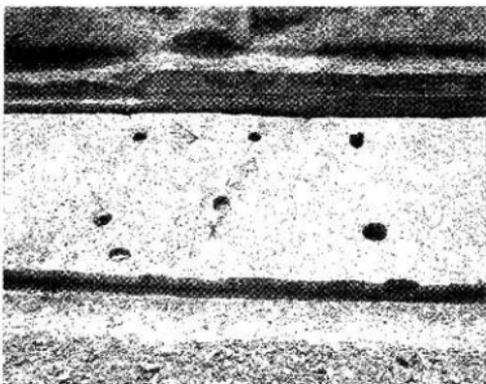


B・C-4～6グリッド完掘状態（東から）

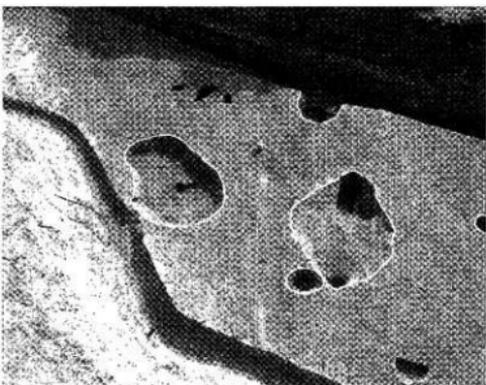
図版5 SR3調査区



S D08 周辺完掘状態 (北から)



S D09 周辺完掘状態 (北から)



S X01・02 完掘状態 (北から)

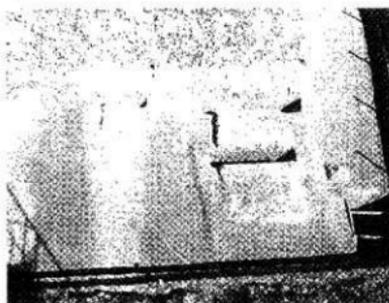
図版6 SR3調査区



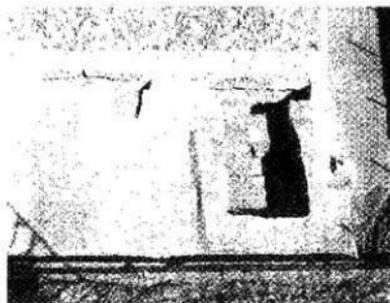
S X03 礎出土状態 (西から)



S X03 完掘状態 (西から)

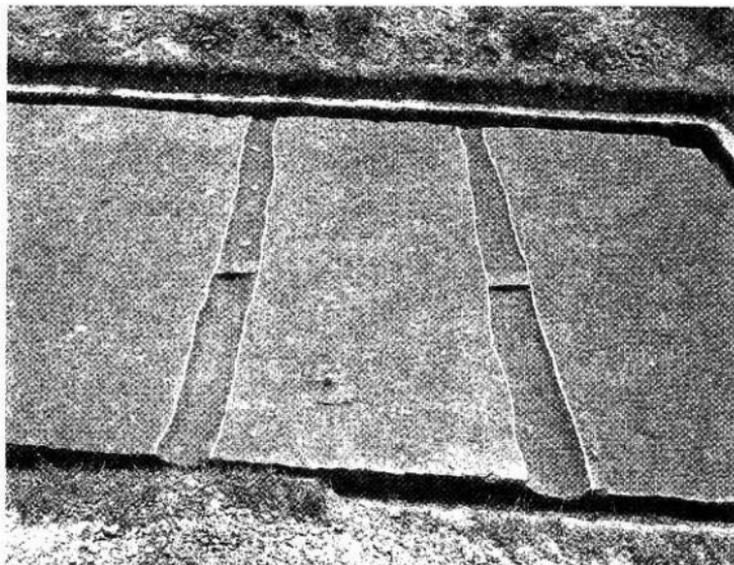


S X04・05 礎検出状態 (南から)

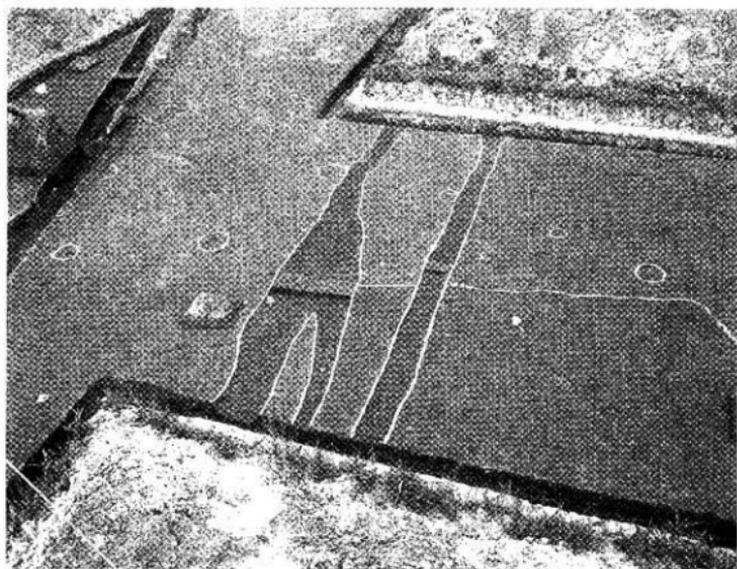


S X04・05 完掘状態 (南から)

図版7 SR4・5調査区

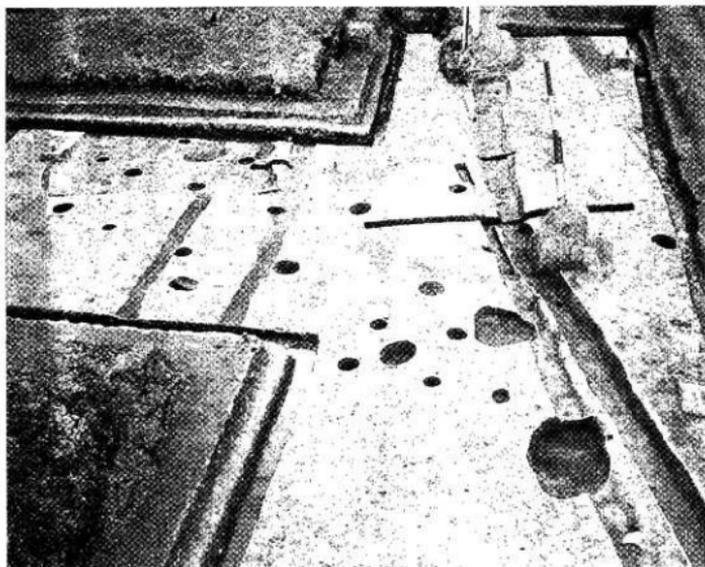


SD01・02 完掘状態（西から）

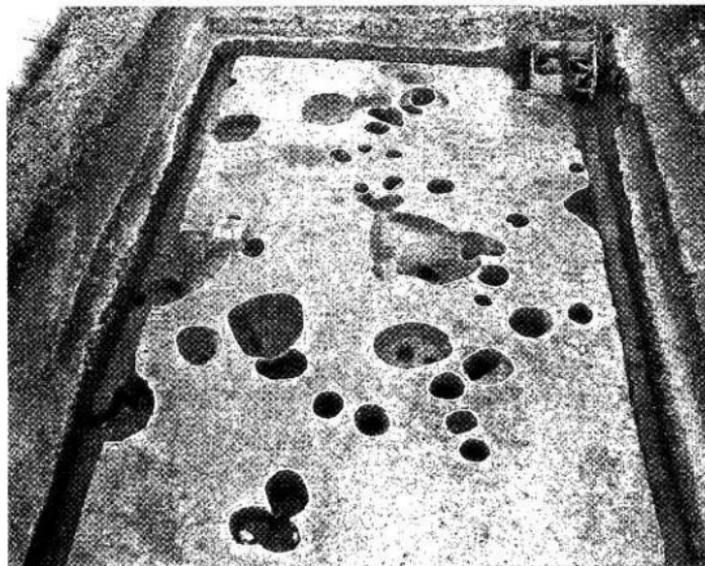


SD03・04 完掘状態（西から）

図版8 SR4・5調査区

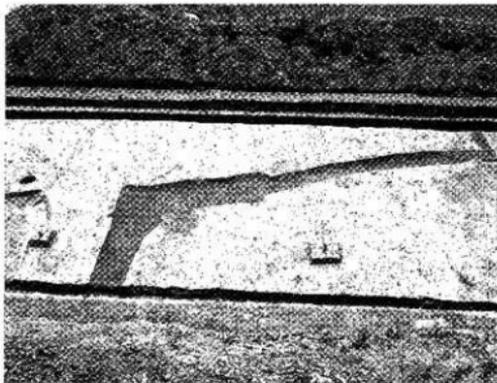


第1面調査区全景（南から）

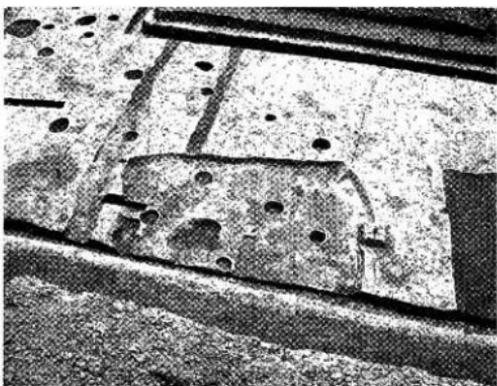


小穴集中域：E-6・7グリッド完掘状態（西から）

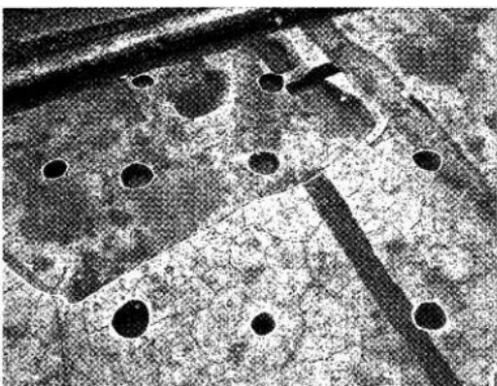
図版9 SR4・5調査区



SD05 完掘状態 (西から)

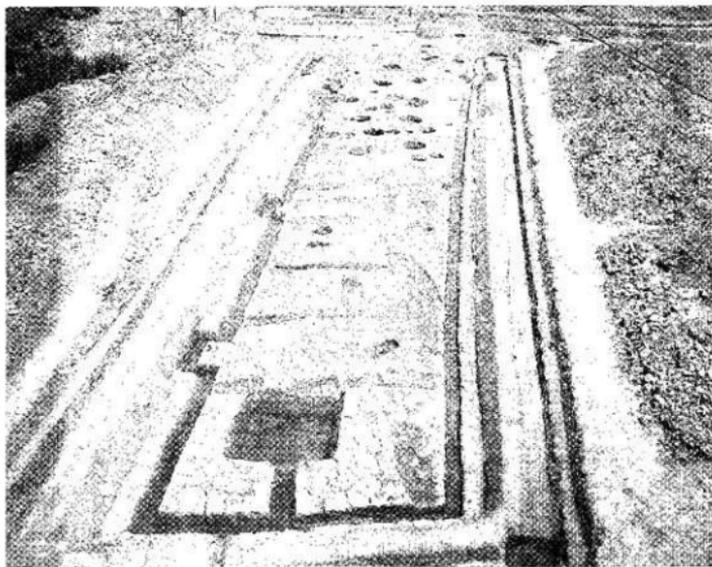


SX01 完掘状態 (西から)

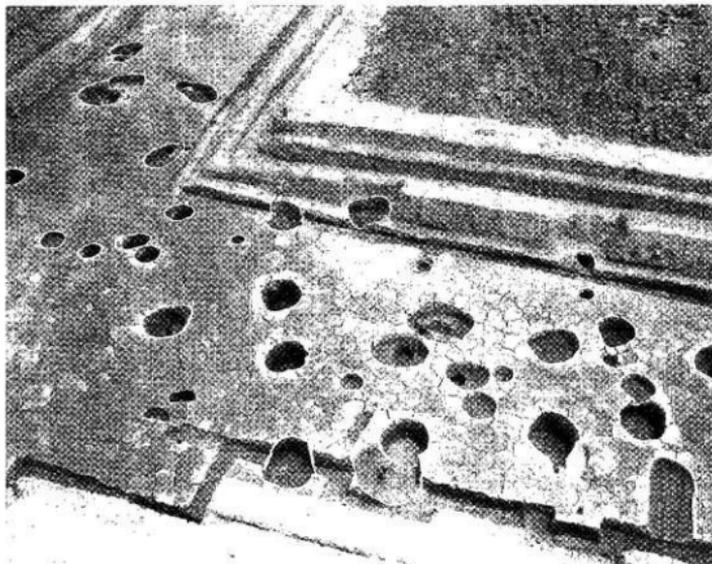


掘立柱建物跡 (南東から)

図版10 SR4・5調査区

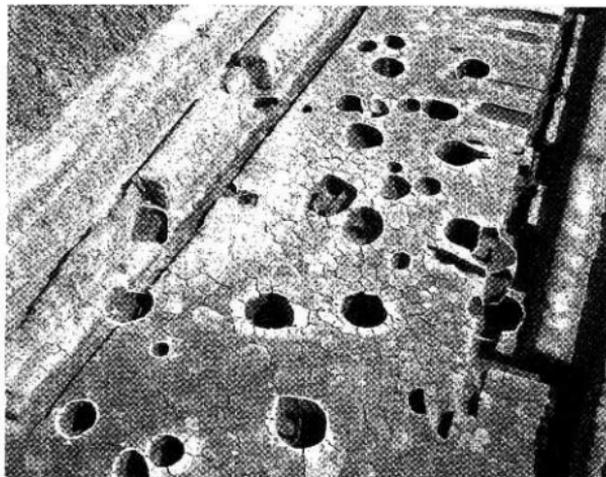


第2面調査区全景（南から）



掘立柱建物跡・小穴集中域（西から）

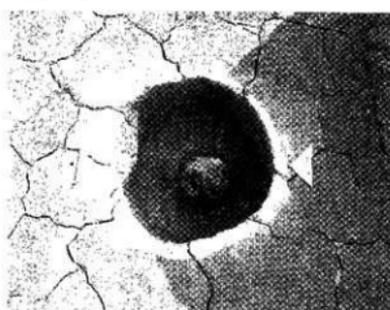
図版11 SR4・5調査区



掘立柱建物跡（北から）



S P123礎・柱根出土状態（東から）



S P120柱根出土状態（北から）

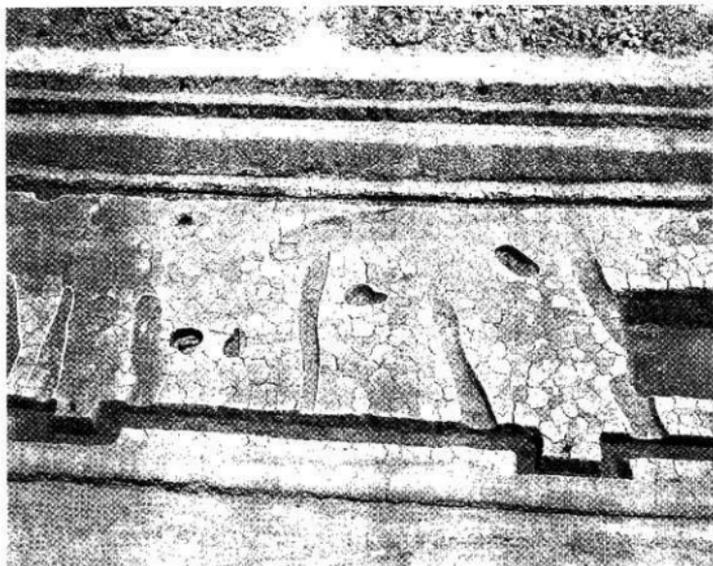


S P87柱根出土状態（東から）



S P89柱根出土状態（南東から）

図版12 SR4・5調査区



溝状遺構完掘状態（西から）

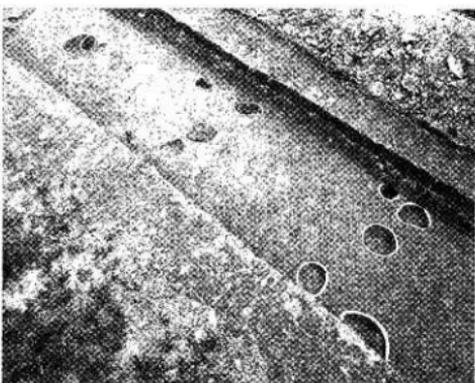


溝状遺構完掘状態（南から）

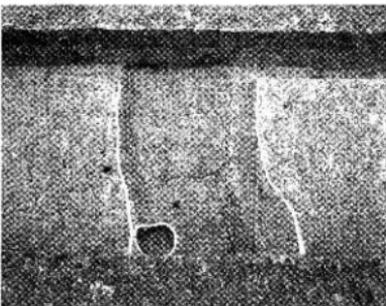
図版13 D3 調査区



調査区全景：第1面(東から)



小穴集中域：A4グリッド  
(北から)



S D01 完掘状態 (北から)

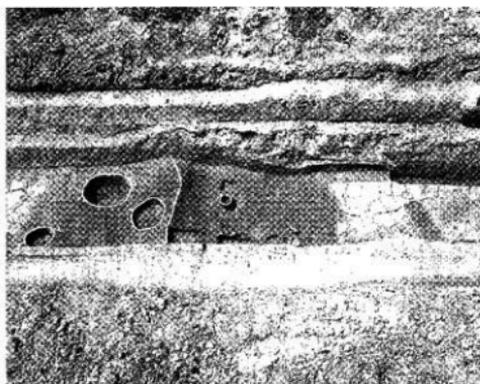


S D03・04 完掘状態 (南東から)

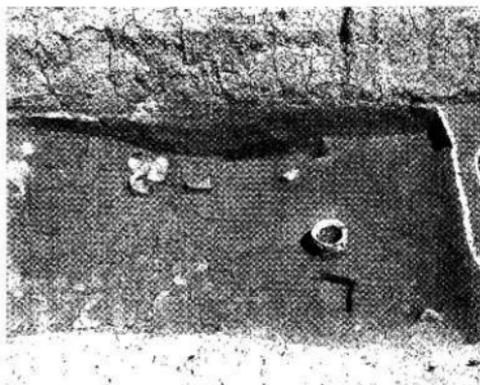
図版14 D3調査区



調査区全景：第2面（東から）



SD08 周辺（北から）



SD08 遺物出土状態（南から）

图版15 出土遺物(1)



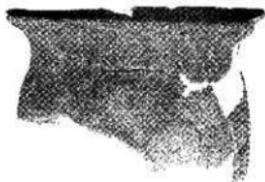
20-4



20-9



20-7



20-8



20-17



20-19



21-11



22-12

图版16 出土遺物(2)



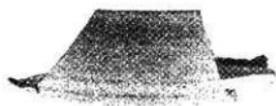
21-15



21-18



21-20



21-23



21-26



22-1



22-2



22-15

図版17 出土遺物(3)



22-19



22-20



24-21



円面硯



砥石



## IV 栗下遺跡・メノト遺跡の調査

栗下遺跡及びメノト遺跡の現地調査は平成9年12月～11年1月に実施した。調査対象は道路拡幅工事部分（R1、R2）、道路新設工事部分（R3）、排水路新設工事部分（D5）である。なお、R2道路と併設された栗下遺跡の範囲のD5排水路工事部分の一部は平成11年5月に調査を実施した。

### 1. R1調査区

R1調査区は、道路拡幅部分、延長200m、幅1m～4.5m、面積600㎡を調査対象地とした。遺跡は栗下遺跡の範囲となる。遺構は出土遺物から縄文時代及び中近世のものと考えられる。細く長い調査区の設定となったため、調査区をグリッドよりさらに大まかにa区からf区まで便宜的に区分けを行った。遺構の分布もある程度のまとまりが見られるため、ここでは主に区ごとに記述していく。

#### 1) 遺 構

**小穴群** 小穴が集中して検出されたのは、a区としたE-40・41グリッド、D-41～43グリッド、E-38・39グリッド、f区としたH-12～15グリッドであった。また、E・F-27・28グリッドでは小穴6が方形に並び、掘立柱建物跡と考えられる。

**a区小穴群**（第3図、図版2・3）標高51.3～51.5mを測るこの地点では、小穴55を検出した。径が0.2～0.7mのものが多いが、SP65、SP72、SP76のように径が1mを超える小穴とするには比較的規模の大きいものも存在する。SP65とSP76は覆土中に10～50cm程の礫が含まれていた。これらは土質的な性格の遺構とも考えられる。平成16年度に隣接地を調査した際にも、同様な規模の大きい穴を検出している。

**f区小穴群**（第8図、図版7）標高約51mのこの地点では、幅約3m、延長約13mの範囲に小穴76を検出している。穴の径は0.2～0.8mで、平面形は楕円形が多いが、方形に近いものもある。深さのあるものが多く、柱穴と考えられる。中には柱根の残されているものも見られる。穴同士が重なり合い、切り合いが見られることから、複数の建物が時間差を持って存在していたことが考えられるが、調査区の狭さから配置は不明である。出土遺物から近世のものと考えられる

**掘立柱建物跡**（SH01）（第6図、図版5）E・F-38・39グリッドで、東西方向に長い方形に並ぶ6つの小穴を検出し、掘立柱建物跡と考えた。建物の範囲は南側に拡がる可能性がある。北側には東西方向の溝状遺構SD05が存在するが、一つの小穴が切っており、SD05より新しいことがわかる。SH01を構成する小穴からは遺物が出土しなかった。

**溝状遺構他** 溝状遺構は調査区に沿うように東西方向にはしるもの、調査区を横切るように南北方向にはしるものに大別される。

**SD12**（第3図、図版2・3）E-36～38グリッドで検出した。a区小穴群の東側、調査区を斜めに横切り南方向へ0.5m落ち込む。その落ち込みから約3～4mの間を持って相対するような立ち上がりでE-36グリッドで検出したため、調査時には溝状遺構と考えたが、谷状の落ち込みとした方がよいと思われる。覆土は上位に黄褐色土が堆積し主に粘土だが、砂利や礫も多く含んでいた。礫に混じって、縄文土器や石器が多く出土し、また上製耳飾り2点が出土している。この遺構から東側では、残りの状態の悪い縄文土器片がごく少数出土しているだけなので、縄文時代にはここが栗下遺跡の東の端であると考えられる。これより東から検出した遺構は、いずれも中・近世のものと考えられる。

**SD13・14・15**（第4図、図版3）E-36・37グリッドで検出した。東西方向に（SD12とした谷の落ち込みの縁に沿って）はしるSD13・14が、南北方向にはしるSD15を切っている事を確認してい

る。いずれも検出した深さは浅い。SD15は山側から川へ向かう自然流路と考えられる。SD13はSD15を横断しさらに東へ続き、調査区外へ入っているのを確認している。

SD10・11（第4図、図版4）E・F-32グリッドで検出したSD10は、幅3mを測るが、その内側、やや東側寄りに1.4mの幅で3条の溝が刻まれている。E・F-31グリッドで検出し、幅2mを測るSD11は、SD10と約2m東に平行して存在する。いずれも山側から川へ向かう自然流路と考えられる。SD08・09（第5図、図版4）調査区に沿って東西方向にはしるSD08とやや南寄りに斜めにはしるSD09はE・F-29・31グリッドで検出した。SD08は幅0.4～0.6m、深さは最深で0.1cmを測る。概ね直線的にはしるが、東に隣接するSD07付近でやや北寄りに角度を変えている。底面は東から西に向かって傾斜している。SD09は幅0.4mを測る。検出した深さは0.05cm程度と浅い。直線的にはしるが調査区南側限界付近でさらに南へ角度を変えている。

SD06・07（第5図、図版5）E・F-28グリッドで検出した南北方向にはしる溝である。SD07は幅1.0～1.35m、深さは0.18mを測るが、2条に分かれ、土層の観察によりそれぞれ時期差があることが確認できた。また、北側で交わるSD08を切っている。SD06は幅0.5m、深さは0.15mを測る。北側でSD05と交わる辺りは乱れている。また、SD05を切っている。いずれも自然流路と考えられる。

SD05（第5図、図版6）F-25～31グリッドで検出した東西方向にはしる溝である。平面形にやや乱れはあるが、概ね直線的である。幅は0.4～0.7mを測り、深さは最深で0.11mである。底面は3cmの幅で上下するが、明確な傾斜は読み取れない。部分的に北側へ垂直方向に分岐しているが、覆土に違いは見られず、同時に存在し、埋没したことが考えられる。西側をSD06に切られ乱れていたため、遺構名を分けたが、SD08と繋がるものと考えられる。性格は水田耕作に関連する溝と考えられる。

SX01（第7図、図版6）E・F-24・25にまたがり検出した。平面形は、最大径1.95mの円形で、断面形は、深さは1mのすり鉢形である。側面は段がいくつか見られる。底の径は0.55mである。覆土の土層断面を見ると、レンズ状の堆積をしているため、時間差を持って埋没した事が考えられる。また、覆土中から10～50cmの礫12個が出土しており、埋没過程で廃棄されたものと考えられる。調査で掘削時にも底から水が湧き出していたことから、井戸状の機能があったものではないかと思われる。

## 2. R2調査区

R2調査区は、道路拡幅部分（及びD5排水路が併設される部分も含む）、延長104m、幅1.5m～3m、面積260㎡を調査対象とした。ここでもグリッドより大まかにa区からg区まで区分けを行っている。遺跡はa区、f区、g区とした部分はメノト遺跡の範囲、その他は栗下遺跡の範囲になる。なお、このR2調査区のうち、b区とした部分の東に隣接して平成11年度にD5排水路部分の追加調査を実施したが、その調査についてもここで触れることにする。

### 1) 遺構

貯蔵穴群（第11図、図版8・9）栗下遺跡の範囲となっている段丘から、比高差約1m下がってすぐの部分で土坑を検出した。

土坑の覆土及び周辺土層には堅果類が多く見られ、それらを貯蔵する目的で掘られた穴であると考へ、貯蔵穴とした。約1.5mと幅の狭い調査区、延長約20mの範囲の中で約20基の存在が考えられる。ここで検出した貯蔵穴の最大の特徴は底及び側面に編物を使用していることである。

貯蔵穴が掘られた場所は、シルト及び砂利層が地山で、しまりの緩い砂混じりの粘土が折り重なるように堆積しており、段丘の変わり目に沿って存在した小川が埋没したことが考えられる。この場所は、現在でも湧水が豊富であり、貯蔵穴は伏流水を利用したものと考えられる。また、現道を挟んで

東側をf区、g区としたが、f区においても貯蔵穴のプランを確認している。ただし、調査範囲の幅が1m以下で確認面が深かったことから、掘削ができなかった。f区の南側のg区では、黄褐色～灰褐色を呈するシルト質の地山を掘り込む小穴を検出している(第17図、図版8)。この層位は縄文土器のみ含まれる包含層の下にあたり、縄文時代の層と考えられる。地形的に南から北側へ若干の傾斜がある。貯蔵穴群と関連して、堅果類の処理をした場所である可能性があるが、火を焚いた跡等、積極的にそれに繋がると思われる痕跡は見つからなかった。

**b区遺構群**(第12図、図版10) A-E-51~54グリッドにかけて、土壌や小穴多数を検出している。SF02は長さ1.8m、幅0.9m、深さ0.3mの土壌である。東側に0.4mの範囲で中段がある。覆土から縄文土器小破片が出土しており、うち条痕が残る破片がある。小穴は、径0.3~1mのものがあり、0.5~0.6m程度のものが多いように思われる。中には深さがあり、柱穴になると考えられるものもある。これら小穴のすべてからあったわけではないが、出土遺物は縄文土器小破片である。無文のものがほとんどである。出土量はいずれも少量である。

**SX01**(第13図、図版14・15) B-51・52グリッドで検出した。大きさは径2.3m、平面形は五角形に近い不整形円といった形である。検出した深さは約0.15mを測る。断面形は皿状を呈する。中央から北寄りには底から0.1m掘り下げられている。さらに中心やや北西寄りの部分に径0.5m、深さ0.05mの掘り込みがある。この掘り込みとその周囲から、拳大の礫と条痕を施された深鉢(第26図26、図版21)が出土している。礫の中には火を受けたと考えられるものも含まれたが、この掘り込みや周囲に火を受けた痕跡はなく、覆土中にも焼土などは見られなかった。遺構内の周囲には径0.23~0.55m、深さ0.05~0.1mの小穴6が存在している。規模は小さいが、縄文時代晩期の住居跡の可能性があると考えられる。

**掘立柱建物跡**(第14図、図版10) いずれも径が約0.8m、深さも約0.5mと同規模な土坑が約2mの間隔で方形に並ぶ、SP125、SP126、SP127、SP128をひとつの建物と考えた。SP127の東側は大きく現代の攪乱が入っているため不明だが、南北方向に続く可能性もある。出土遺物はすべての穴から縄文土器小片が出土しているが、無文のもので時期の決定が難しい。

**c区遺構群**(第15図、図版11) C-D-46・47グリッドにあたる。b区とした部分ほどではないが、小穴が比較的多く見ついている。径0.25~0.5mの平面形が円形のものが多いが、SP12のような長楕円形のものも見られる。D-46グリッドから検出したSP130とSP131からは縄文土器の胴部が出土している(第19図5・6、図版20)。いずれも上部と底部を欠いているが、正位置で出土している。互いの距離は0.7mを測る。同様の形態、大きさの土器であり、互いに関連性のある埋壘と考えられる。

**d区遺構群**(第16図、図版11) E-44、D・E-45グリッドにあたる。遺構の分布は特にE-44グリッドに集中している。大きさ約1m、深さ0.1mの浅い掘り込みと、形0.25~0.5m、深さ0.1~0.2mの小穴を折り重なるように検出している。小穴の中で、深さがあるものは、小規模ながら建物の柱穴になると考えられるが、配置等は不明である。

### 3. D5調査区(第18図、図版13)

栗下遺跡とメノト遺跡の境である、1~2mの比高差のある段丘の変わり目に沿うように計画された排水路工事部分を調査対象とした。調査区の幅は約1mである。この調査区では、段丘の変わり目に沿う部分では、包含層から縄文土器が多く出土しており、上位段丘の栗下遺跡から廃棄されたものと考えられる。この調査区からは検出した遺構は少なく、第1図に示したg区とした部分において、延長約16mの調査範囲で小穴12を検出したのみである。小穴は径0.25~0.55mで平面形は多くは楕円

であるが方形に近いものも見られる。多くは深さのあるもので、柱穴になると考えられるが、配置は不明である。時期は、小穴内から小皿が出土していることから、13世紀以降の遺構と考えられる。

#### 4. 粟下遺跡・メノト遺跡出土遺物

##### 1) 縄文土器 (第19図～第31図、図版20～24)

第19図には完形に近いものや大きい破片を示した。1は縄文を施文した深鉢である。器形は口縁に向かい底から大きく開く。口径は底径器高底部には木葉痕が見られる。また、補修孔が開けられている。5・6はR2調査区で検出された埋壘と考えられるものである。第21図1～19は口縁部及び口唇に文様を施す縁帯土器と思われるものである。第22図には、沈線により区画した中に縄文を施す文様を持つ土器片を載せた。第22図15と16には丸い刺突文があるが、これは巻貝の腹によるものと考えられる。第22図20はほぼ完形の小型の深鉢である。底部には網代痕が残る。第23図1～12は口縁部内面に文様を施すものである。浅鉢もしくは鉢になるものが多いと考えられる。第24図は口縁部に横位の沈線を施すものを載せた。1は底部を欠き体部の4分の1ほどの大きな破片である。3条の沈線は施文された後に指なでされていると考えられる。外面及び内面には炭化物の付着が顕著に見られる。4・6・9には巻貝を押しつけ回転させる扇状圧痕が見られる。第25図1～21は、斜位の沈線もしくは羽状や矢羽根状と表される沈線文を持つものである。沈線で区画し、羽状文の沈線が不揃いだったり密接している例は古く、羽状文が明瞭で重ならないような例は新しい傾向ではないかといわれる。第25図22・23は巻貝により施文されたと考えられる。横位の条痕を施し、縦位の沈線と巻貝の腹もしくは尻による刺突文を施す。第25図24～29は縄文を施した破片である。うち29は巻貝による疑似縄文と考えられる。第26図1～19は口縁部に櫛状の施文工具で波状文などを施文するものである。第26図20～38、第27図1～20には条痕で仕上げられた土器を載せた。第26図21～23、27には口縁部に横位、縦位、弧状の沈線が施されている。第26図29～32は波状の口縁部を持つもので、29～31は沈線文を施している。また、29と32の波状の頂点には押圧により凹みが付けられている。第27図21と22は浮線文が施されたものである。23～30は粘土紐を貼り付けた横位の隆帯の上に連続した押圧や押し引きを加えたものである。31と32は土製の耳飾りである。31には沈線により放射状の文様が描かれる。第28図には主に無文のものを載せた。2は粘土紐を鉢巻きのように口縁部に貼り付け隆帯としている。6の口縁部には横位の沈線が1本施されている。20～22は浅鉢である。20の口唇には縄文が施文されている。22には補修孔が見られる。第29図と第30図には底部を載せた。第29図から第30図1～8、10、11は底部に網代痕が残るものである。第29図11は台付部分と考えた。外面に水平方向の平行沈線が引かれる。上面に網代痕が残る。第30図9は縄文が施文されている。底部の拓本に見られる白く抜けている丸いものはドンダリの圧痕である。第30図14と16は台付部分と考えられる。14には水平方向の沈線が施文されている。18は摩耗が著しい。台付部分の接合部の可能性がある。周囲に浅い連続した押圧が加えられている。第31図は注1土器と、その一部と思われる破片である。1・2・10～12は把手、8は把手の付いた口縁部、15～23・27～29は口縁部である。24は口縁に近い部分、3～7・25・30～32は胴部の上半部分と考えた。9は直接接合できなかつたが、同一個体と考えられる破片を図上復元した。向かって右側に注口部分を載せたが、注口の下に環をつくり、上は欠けているが環状の把手が付くと考えられる。15～19は口縁部の屈曲部分に鈎状もしくは瘤状の突起を付けている。19はその突起上端に刺突を加えている。21には丸い刺突が見られるが、巻貝の尖った先端で突いたものと考えられる。26はソロバン玉状の体部のもので、底部のつくりが特徴的である。33～35は注口部分である。35には注口部を一周する沈線文が施されている。

## 2) 石 器

粟下遺跡及びメノト遺跡の調査で出土した石器はすべて縄文時代のものである。数量はテンバコ33箱分あるが、今回報告ではそのうちから抽出した、粟下遺跡出土石器43点、メノト遺跡出土石器75点について報告する。

### 粟下遺跡出土石器（第32図～第35図、図版25・26）

出土した器種は、石鏃、石錐、打製石斧、磨製石斧、石冠、各種礫石器類である。

石鏃は21点示した（第32図）。凹基鏃が15点、有茎鏃が3点、その他3点である。平面形態は、三角形が最も多く、これに飛行機形、五角形が加わる。石材は、黒色頁岩がほとんどであり、これに珪岩、安山岩、そして黒曜石や下呂石といった遠隔地石材が加わる。黒曜石のうち3点について原産地分析を行った結果、3が伊豆柏峠産であり、6と9は信州産であることが明らかになった。凹基鏃は15点である。頁岩が8点、珪岩が2点、黒曜石が4点、下呂石が1点である。五角形石鏃は、頁岩が3点、黒曜石が1点である。5と7は、かえし部から尖頭部に向かう途中、内側に湾曲するため、縁辺中央がゆるやかな段を形成している。そして尖頭部分が、さらに細く加工されている。ここでは「五角形」平面形態に分類した。8は将棋の駒形の五角形石鏃である。頁岩製は、7が不整な鋸歯である他は、すべて鋸歯縁である。黒曜石製6は加工が不整形である。4は、平面形態が飛行機形態である。石材は下呂石である。三角形は、頁岩、珪岩、黒曜石製である。ほとんどが、尖頭部を欠損している。9は先端から衝撃剥離がみられる。有茎鏃は3点ある。安山岩、頁岩、黒曜石製である。16の有茎鏃は基部を平らに作り出したあと、径の細いハンマーによる押圧剥離を2箇所いれることで、茎部とかえし部を作り出している。石鏃の鏃身の平面形態は五角形である。縁辺は径の細いハードハンマーの押圧剥離で鋸歯状に作出している。石材も安山岩製であり、他とは異なる。19は頁岩製の平基鏃である。21は、大形で厚みがある石鏃である。他の完成品と比べ、剥離が一定していなく、未製品の可能性がある。20も石鏃の形態が整わず、未製品の可能性がある。

石錐は1点示した（第32図22）。黒色頁岩製のものである。錐部が破損している。形態整形の剥離は、大半がステップで終結しており、石鏃の加工とは異なる。

打製石斧は9点示した（第33図）。素材剥片の縁辺をハードハンマーの直接打撃で加工している。形態的には短冊形、バチ形があり、大半は短冊形である。石材は頁岩が主であり、これに硬砂岩や安山岩、結晶片岩が加わる。土擦れ痕の結果生じたと考えられる顕著な摩耗がみられる打製石斧がある。この摩耗は、主に石器正面に広く摩耗が分布し、石器裏面側には、微小剥離痕などに摩耗が切れたり、摩耗範囲が正面と比較して狭い範囲に広がるといった特徴がある。摩耗に伴う線状痕は、石器正面側に、刃部に対して直交方向に走っているのがみられる。こうした特徴から、土掘りに対して使用されたと考えられる。8は素材礫の一端を加工し刃部を整形し、それ以外には加工はみられない。

磨製石斧は乳棒状磨製石斧が3点である（第33図10～12）。ハードハンマーの直接打撃で全体を成形し、その後敲打と研磨で整形している。石材は、凝灰岩製である。11は、破損した石斧を、敲石に転用している。石斧の破損した刃部側を、折面を打面とし、直接打撃で加工している。第33図12は刃部が破損している。10は大形の乳棒状磨製石斧である。重量が1kg弱あり、木の伐採用と考えられる。石斧の基部付近は柄に装着したためか、潰れたような痕跡がみられる。

第34図1は凝灰岩製の石冠である。全面を敲打し、その後研磨で整形している。頂部は入念な研磨によって断面三角形状に整形しており、下部も平らに加工するため、入念に研磨している。

礫石器類は8点示した（第34図、第35図）。石材は大半が砂岩であり、これに凝灰岩が加わる。第34図2は砂岩製の砥石である。第34図3は敲石である。卵形の素材の一端に敲痕がみられる。第34図4

は硬砂岩製磨石と敲石である。石器表裏に磨面がみられ、側面に敲痕がみられる。第34図5は敲石である。石器表面に黒色の付着物がみられる。第34図6は磨石と凹石を兼ねたものである。石器の表裏に数個の回転穿孔によって生じた凹みがある。裏面に磨面がみられる。第35図1は磨石と敲石である。4面に磨面がみられ、磨面と下見に敲痕がみられる。第35図3は敲打で凹みをいれてから、回転穿孔している。受熱しており、破損面は赤化している。石器正面に破損がみられる。第35図2は石器正面に溝状の磨面と回転穿孔の凹みがある。裏面は広い範囲の磨面がみられる。

メノト遺跡出土石器（第36図～第42図、図版27～30）確認できた器種は、石鏃、石匙、削器、両極石器、打製石斧、磨製石斧、石錘、石棒、石刀、石冠？、各種礫石器類である。

石鏃は17点示した（第36図）。凹基鏃が8点、有茎鏃が4点、その他5点である。平面形態は、三角形が最も多く、これに飛行機形、五角形が加わる。石材は、黒色頁岩が主であり、これに珪岩、そして黒曜石や下呂石といった遠隔地石材が加わる。黒曜石3点について原産地分析を行った結果、3点とも信州産であることが明らかになった。大半は押圧剥離によって加工され、部分的に径の細いハンマーで鋸歯状に縁辺が加工されている。次に基部形態ごとに記述する。凹基鏃は8点である。黒曜石が1点、下呂石が1点、赤珪岩が1点以外、5点は頁岩製である。五角形石鏃の第36図5～7は、5をのぞき鋸歯縁石鏃である。6は将棋の駒形の五角形石鏃である。素材剥片の打面側を石鏃に基部にし、素材末端側尖頭部している。先端部分は押圧剥離の後、径の細いハンマーで鋸歯状に加工している。7は凹基鏃の縁辺に鋸歯縁を作り出している。5は剥離が整っておらず、部分的に鋸歯状になっている程度であり、意図的に鋸歯縁を作り出しているのか確定できなかった。3の下呂石、4の黒曜石の石鏃は、形態的に類似し、また鋸歯縁をもたない石鏃である。2は非常に小形の石鏃である。5は三角形形態の石鏃で、縁辺を鋸歯状に加工している。8は研磨した剥片を素材として利用している。確認できる剥離はすべて研磨面を切っている。磨製石鏃の未製品の可能性がある。有茎鏃は4点である。頁岩3点、黒曜石が1点である（第36図9～12）。12の飛行機鏃をのぞき、3点は同じような平面形態を呈している。それは、かえし部から尖頭部に向かう途中、内側に湾曲するため、縁辺中央がゆるやかな段を形成している。そして尖頭部分が、さらに細く加工されている。ここでは「五角形」平面形態に分類した。基部に径の細いハンマーによる押圧剥離で、かえし部と茎部の境を入れている。9を除くと、すべて鋸歯縁である。12は頁岩製の飛行機鏃である。押圧剥離で加工している。それ以外として、13が黒曜石製平基鏃である。縁辺は鋸歯状に加工されている。14～16は基部の作りが明瞭でない上、石鏃形態全体が整っていないので、未製品の可能性がある。17は基部が破損している人形の石鏃である。

石匙は2点である（第36図19・20）。19は黒色頁岩製である。平面形態は石鏃に類似しているが、両辺の加工が異なることから、横形石匙と分類した。20は黒色頁岩製の横形石匙である。縦長剥片を素材とし、ほぼ全縁辺を加工している。使用痕の分析では光沢と線状痕から皮や肉を切るのに用いられたと考えられる。

削器は3点あり、内2点は尖頭削器である。尖頭削器の2点は、径の細いハンマーによって鋸歯状に刃部が作出されている。第36図21は縦長剥片を素材としている。自然面打面からハードハンマーの直接打撃で素材剥片を剥離している。石器左辺をハードハンマーの直接打撃で整形し、右辺を押圧剥離で加工し刃部を作出している。検鏡したが、使用痕は確認できなかった。第37図1の尖頭削器は、左右刃部に摩耗らしき痕跡がみられた程度であり、光沢などは確認できなかった。第37図2はホルンフェルス製である。第36図18は頁岩製の両極石器である。

打製石斧は18点示した（第37図、第38図）。素材剥片の縁辺をハードハンマーの直接打撃で加工して

いる。形態的には短冊形、バチ形、分銅形があり、大半は短冊形である。石材は、頁岩を主に、硬砂岩、凝灰岩、安山岩である。側面の稜を意図的に敲き潰している資料がある。土擦れ痕の結果生じたと考えられる顕著な摩耗がみられる打製石斧がある。この摩耗は、主に石器正面に広く摩耗が分布し、石器裏面側には、微小剥離痕などに摩耗が切れたり、摩耗範囲が正面と比較し狭い範囲に広がるといった特徴がある。摩耗に伴う線状痕は、石器正面側に、刃部に対して直交方向に走っているのがみられる。こうした特徴から、土掘りに対して使用されたと考えられる。

磨製石斧は9点示した(第39図1~9)。乳棒状磨製石斧と定角式磨製石斧がある。1点硬砂岩製があるが、残りはすべて凝灰岩製である。1は典型的な定角式磨製石斧である。白色凝灰岩製で、全体を研磨で整形している。2は凝灰岩製で、ハードハンマーの直接打撃で全体を成形し、研磨で整形している。刃部は、研磨により整形されている。3は硬砂岩製である。破損資料の破損面を再加工し、石斧にしている。4も、側面や刃部を再加工した痕跡がみられる。乳棒状磨製石斧は、ハードハンマーの直接打撃で全体を成形し、その後敲打と研磨で整形している。石材は、凝灰岩製である。7は破損した石斧を、敲石に転用している。石斧刃部の折面を打面とし、直接打撃で敲石刃部を加工している。8は刃部が著しく破損している。9はハードハンマーの直接打撃で加工し、打製石斧のようであるが、石器素材が他の乳棒状磨製石斧と同じ、緑色の凝灰岩であること、全面が軽く摩耗していることから、乳棒状磨製石斧の未製品と判断した。

石錘は6点示した(第39図10~15)。うち4点は打穴石錘、1点は切目石錘、残りは有溝石錘である。すべて頁岩製である。

石棒は3点あり(第40図1~3)、石棒は片岩系の石材を使用している。1は石棒の破損品である。ハードハンマーの直接打撃で荒削りし、敲打と研磨で整形している。形態的に蛇頭状の頭部をもち、頭部と体部の境に研磨で溝をいれている。また頭部の頂部に溝をいれ、頭頂部を意識的に作り出している。頭部側面に陰刻により紋様が刻まれている。2も石棒の破損品である。3は未製品であり、剥離で荒削りした後、敲打と研磨で整形している。第40図4は凝灰岩製の石刀である。ハードハンマーの直接打撃で荒削りし、敲打と研磨で整形している。頭部と体部の境に溝をいれ、頭部を作り出している。また頭部の頂部に溝をいれ、頭頂部を意識的に作り出している。刀部は直刀形であり、刀の鋒部分には、一条の溝をもつ。左辺は研磨によって断面三角形形状に研ぎ出している。ただし頭部からすぐに刃を作り出さず、若干の間、刃のない部分がある。そのため、その部分の断面形は丸い。第40図5は石冠と考えられるので、結晶片岩製である。石材的に石棒の未製品と思ったが、側面を平らにしていること、その反対側が山形状になっていることから、石冠の未製品ではないかと判断された。敲打し、その後研磨により整形している。

礫石器類は14点示した(第40図6・7、第41図、第42図)。石材は大半が砂岩であり、他に凝灰岩が加わる。第40図6は凝灰岩製の多孔石である。正面と側面に数個の回転穿孔によって生じた凹みがある。第40図は敲石である。石器表裏に敲痕がある。第41図1は磨石と敲石を兼ねたものであり、石器表裏に磨面、側面に敲痕がある。第41図2は敲石である。長軸の一端に敲痕がある。第41図3は磨石である。石器正面の平らな面に磨面が形成されている。第41図4は敲石である。長軸の一端に敲痕がある。第41図5は敲石である。石器表裏と側面に敲痕がみられる。下面の敲打が激しかったためか、石器に潜在的な割れが生じている。第41図6は磨石と敲石を兼ねたものである。石器表裏に磨面、側面に敲痕がある。側面の敲打が激しかったためか、石器に潜在的な割れが側面から生じている。第41図7は敲石である。大型の扁平円礫を素材とし、石器表裏に敲打痕がみられる。第42図1・2は磨石と敲石を兼ねたものである。第42図3~5は大形礫石器である。3は、凝灰岩製で、数個の回転穿孔

によって生じた凹みがあり、側面には磨面がみられる。4は破損品である。磨面の他に、石器の表裏に数個の回転穿孔によって生じた凹みがある。第42図5は、正面に大形の磨面がみられ、付近に1つ回転穿孔によって生じた凹みがある。上面は意図的に打ち割ったと考えられる。

### 3) 編物製品 (図版16~19)

メノト遺跡で検出した堅果類貯蔵穴の内部と周辺の土層中には、多くの編物製品が残されていた。ほとんどが破片で出土し、現地で確認した数は43点を数えた。なお、現地調査では、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所により、遺構(貯蔵穴)と編物、合わせて19点の取り上げが行われた。そして、平成11年度から15年度にかけて同研究所清水整理事務所においてPEGの含浸による保存処理が行われた。ここでは、そのうち10点について紹介する。

**貯蔵穴11 (SP11)** (図版16・17) 側面編物: 貯蔵穴の大きさは、直径0.8m、深さ0.4mを測る。穴の内側の側面に使われていたものである。編み方は、ヒゴの幅15mm、2本が単位、2本くぐり2本越え、2本送り、ヨコヒゴの間隔が広い編み方である。元々の製品は不明であるが、貯蔵穴内部で使用するため作られたとも考えられる。編物の当て始めと終わりが重なっている。

底面編物: 貯蔵穴の底一面に同じ編物製品の破片を敷いている。編み方は、網代編み、幅5mm、1本くぐり、2本越え、1本送りである。製品は不明だが、編物の縁の細工が残っている。穴の底と編み物の間には砂がたまって、編み物が波打つようになっている。

**貯蔵穴8 (SP8)** (図版18) 貯蔵穴の大きさは、直径0.8m、深さ0.45mを測る。穴の内側の側面に使われたものである。編み方はヒゴの幅15mm、2本が一単位、2本くぐり、2本越え、2本送り、ヨコヒゴの間隔が広い編み方である。製品は不明である貯蔵穴11のものと同様である。なお、貯蔵穴8の底面には、現状の大きさ46cm×38cmの網代編みと六つ目編みの編物の破片が敷かれていた。編み方は、網代編みが幅5mm、1本くぐり、1本越え、1本送り、六つ目編みはヒゴの幅7~8mmでさらにヨコヒゴが1本加えられたものである。六つ目編みの破片を敷き、その上に網代編みの破片を敷いている。残り具合は悪い。

**編物2-1** (図版19) 現状の大きさは30cm×20cmを測る。編み方は網代編みで、ヒゴの幅3.5~5mm、2本くぐり、2本越え、1本送りである。斜めにヒゴを巻いてまとめられた縁が残っており、製品はカゴと考えられる。素材は、分析の結果タケ亜科の可能性が高いとされた。

**編物2-2** (図版19) 編み物2-1の裏に存在していたため、いっしょに取り上げられ、保存処理の際に分離された物である。現状の大きさは20cm×10cmを測る。編み方は網代編み、ヒゴの幅3~5mm、1本くぐり、2本越え、1本送りである。製品は不明である。素材は分析の結果、タケ亜科の可能性が高いとされた。なお、偶然クリの実が含まれていたが、このクリの実は幅4cmの大きさがある。これは最近の研究では栽培種とされる大きさである。

**編物4** (図版19) 大きさは32cm×25cm編み方はヒゴの幅7.5~11mm、1本くぐり、1本越え、ヨコヒゴ(タテか?)の間隔が広い編み方である。製品は不明である。素材は分析の結果、タケ亜科の可能性が高い。

**編物12-1** (図版18) 大きさは28cm×14cmを測る。編み方は網代編みで、ヒゴの幅5mm、2本くぐり、2本越え、1本送りである。縁が残されており、製品はカゴと考えられる。素材は草本双子葉類の茎の可能性が高いとされた。縁は斜めに組み合わせられる。その下は違う素材(幅3mm、分析の結果素材は不明)を4本を一単位として2条まわる、装飾的な細工がされている。

**編物12-2** (図版19) 編物12と伴に取り上げられたものである。残り具合が悪く壊れているためわかりにくい、ヒゴの幅4.5mm、編み方は網代編みで、2本くぐり、2本越え、1本送りと思われる。素

材は分析の結果、組織がほとんど観察できず不明であった。

**繻物13** (図版18・19) 一緒に取り上げられ、別々に保存処理されたが、同一品と考えられる。大きさは36cm×32cmを測る。編み方は、ヒゴの幅1～15mm、2本くぐり、2本越え、2本送り、ヨコヒゴの間隔が広い編み方である。製品は不明である。節状のものが見られる。素材は分析の結果タケ亜科とされた。

#### 4) 粟下遺跡出土陶器 (第43図1～19)

1・2、6～8、10～19は山茶碗、3～5は近世陶器、9は灰釉陶器である。1は口径15.6cm、器高4.6cmを測り、高台は低く丸みを帯びる。底部外面中央にかすかに糸切り痕(第44図-1)を残す。2は口径15.4cm、器高4.55cmを測り、高台は低く三角形を呈する。底部外面に糸切り痕(第44図-2)を残す。3のすり鉢は口径23.7cmを測る。志戸呂産で、17世紀前半に位置づけられる。4のすり鉢は初山産で、17世紀に位置づけられる。5は常滑産の甕で、16世紀後半に位置づけられる。6の托は、小皿に杯を載せたような形である。口径4.0cm、最大径7.8cm、器高2.0cmを測る。中央はくぼんでいて、すり鉢状を呈する。底部外面に糸切り痕(第44図-3)を残す。7・8の山茶碗のうち、7は渥美・湖西系で、8は東遠江系である。8の高台は低く輪トチ状を呈し、底部への接合は粗雑である。9の灰釉陶器は、高台短部に研磨を施し、底部外面に糸切り痕(第44図-6)を残す。見込みに他の製品の高台片が癒着している。10～17の山茶碗のうち、14・17は渥美・湖西系で、他は東遠江系である。11～13、15・16は底部外面に糸切り痕を残すが、14・17は糸切り後ナデを施す。11・17の高台端部にはモミ痕が残る。18の小皿は渥美・湖西系で、口径9.4cm、器高2.65cmを測る。器高が高く、口縁端部を肥厚させる点、小皿の作りに共通するといえる。19は東遠江系の小皿で、口径8.3cm、器高1.95cmを測る。出土遺物は、12世紀後半～13世紀後半のものが主体をなすと考えられる。

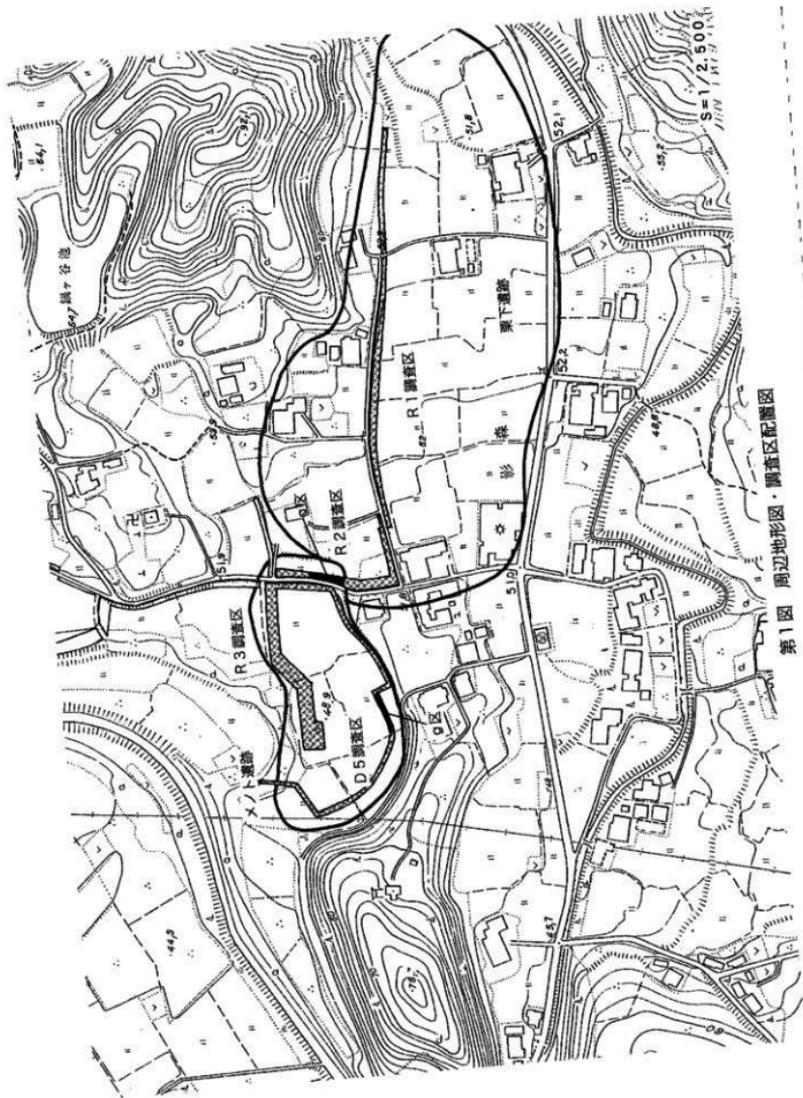
#### 5) メノト遺跡出土陶器 (第43図20～26)

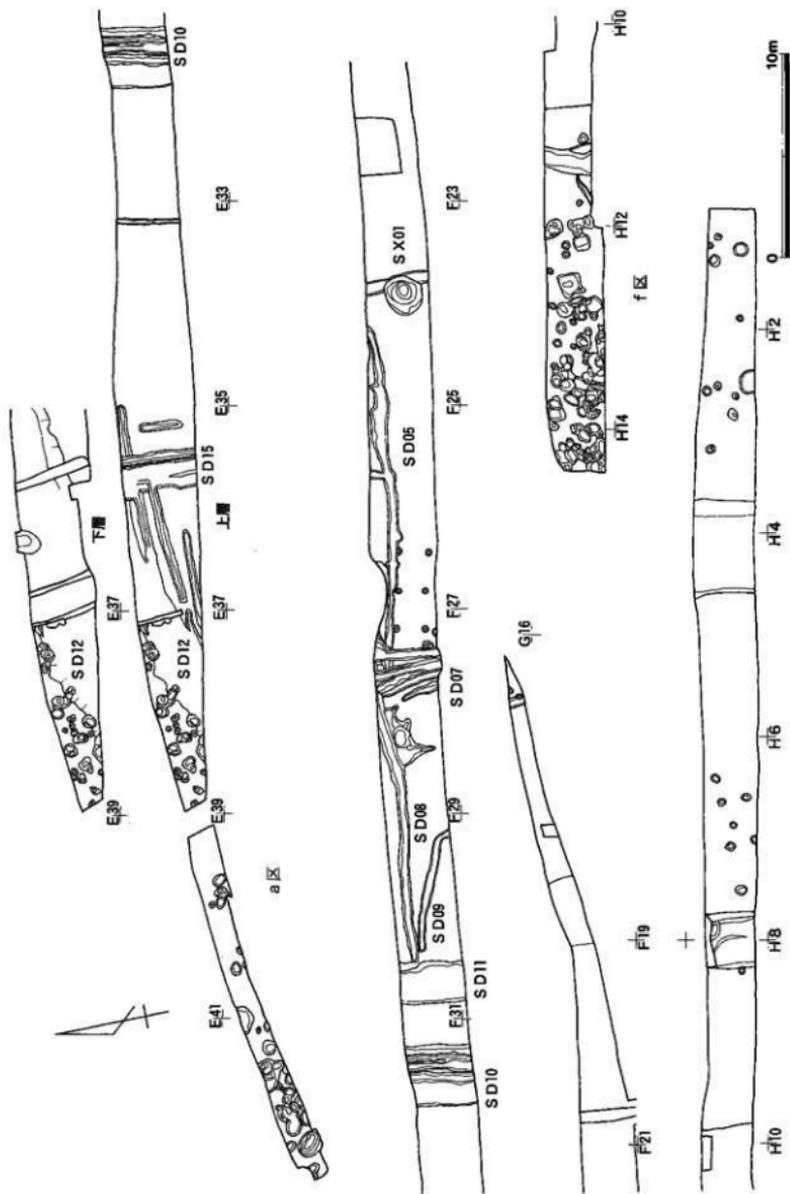
第43図-20～26は山茶碗である。20は渥美・湖西系の山茶碗、他は東遠江系の山茶碗である。20は口径17.2cmを測り、口縁部外面に軸がみられ施軸されている可能性がある。22～25の底部外面に糸切り痕が明瞭に残り、21は底部外面中央にだけ糸切り痕(第44図-15)が残る。26の小皿は、口径7.7cm、器高1.8cmを測り、底部は突出気味である。出土遺物は、12世紀後半～13世紀後半に位置づけられる。

## 5. まとめ

ここで、遺構及び遺物の検出状態から縄文時代の様相を簡単に触れままとしたい。粟下遺跡からは小穴・土坑を多く検出しており、居住域と考えられる。メノト遺跡からは、伏流水を利用した堅果類貯蔵穴を検出し、この付近で食物の貯蔵・加工の場としていたことが考えられる。集落内での空間的な使い分けが明らかになったことは重要である。また、土器は、メノト遺跡の段丘の変わり目周辺からと粟下遺跡のS D12とした川へ向かう斜面地からの出土量が多い。どちらも捨て場である可能性がある。前者には後期中葉から後期末のものが多く傾向があり、後者には晩期のものが多く傾向がある。そのことから、居住域が、西側から東側へ変遷した可能性がある。

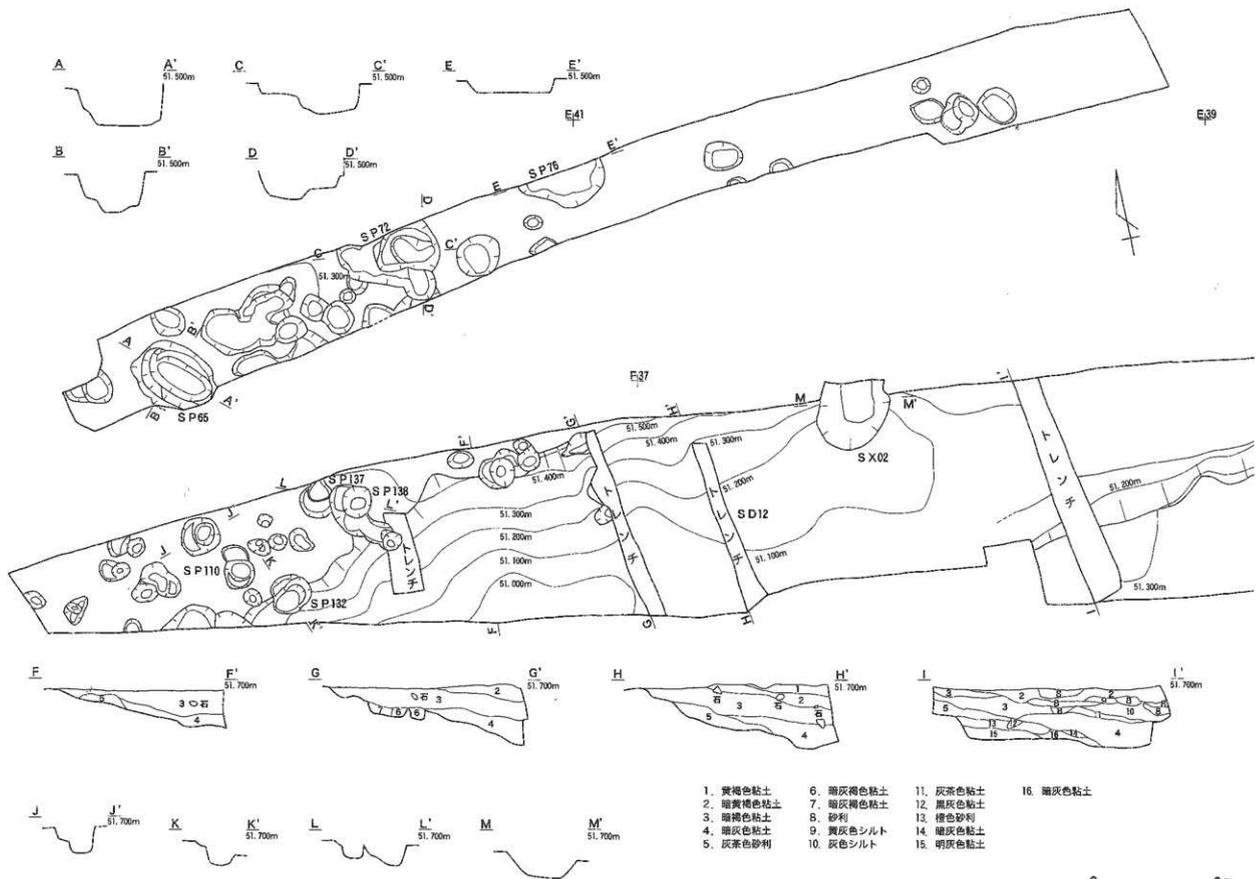
今回の調査で得られた資料は多いが、担当の力量不足からすべてを報告することができなかった。そのため、この調査の成果については、改めて検討することとした。



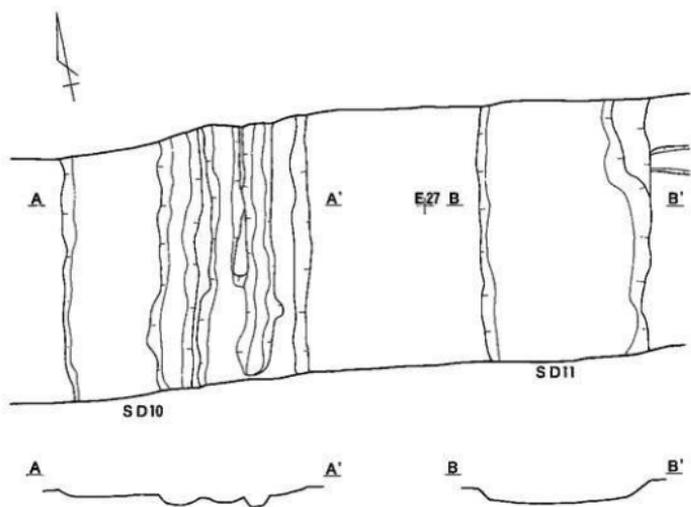
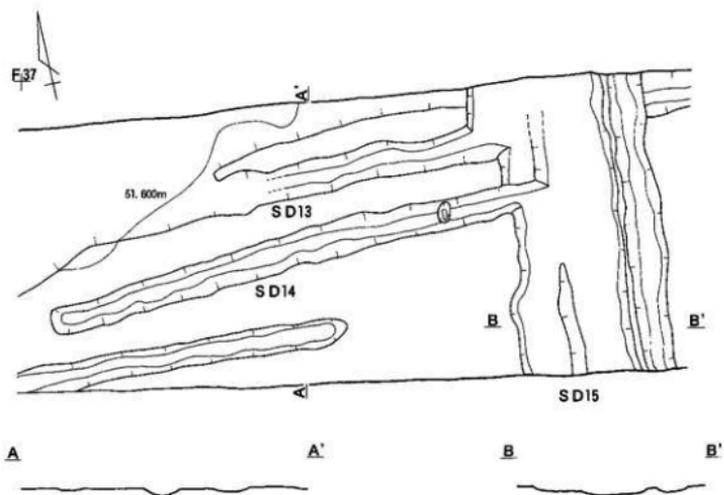


第2図 R1調査区全体図



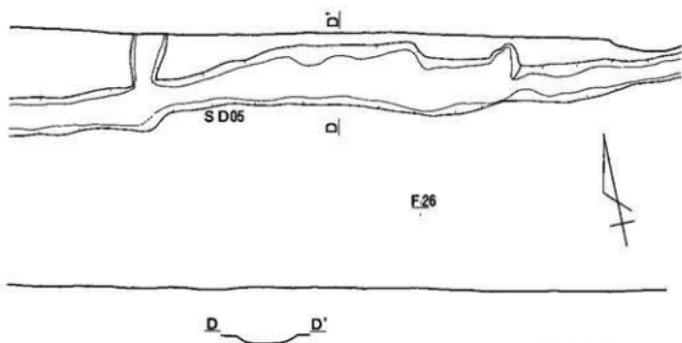
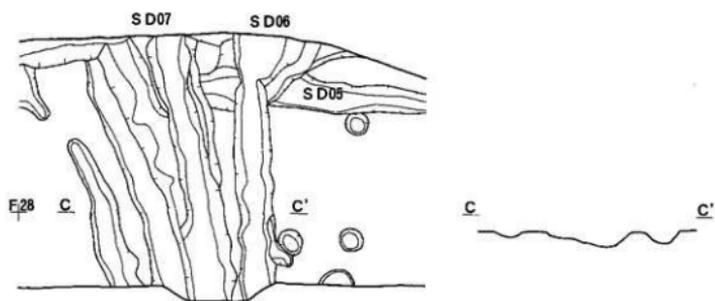
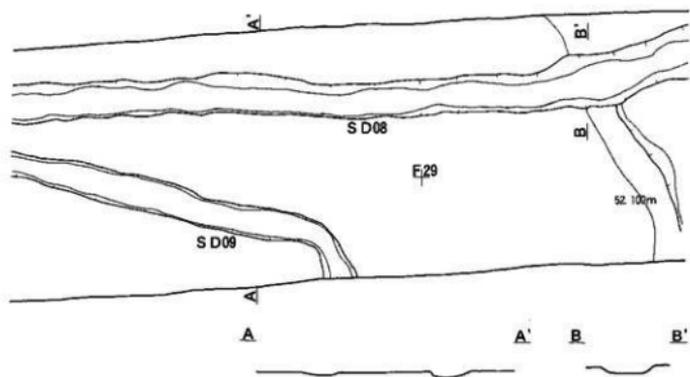


第3図 R1調査区 a区遺構実測図



L = 52.000m 0 2m

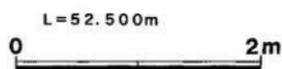
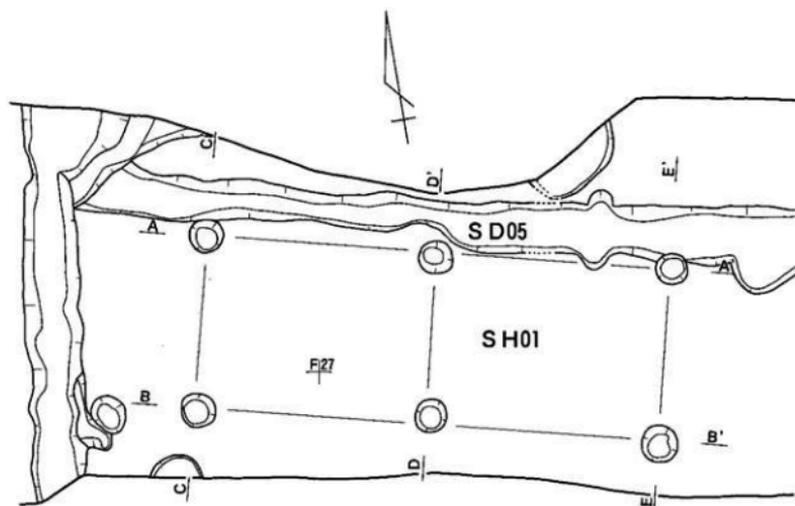
第4図 R1調査区 溝状遺構実測図(1)



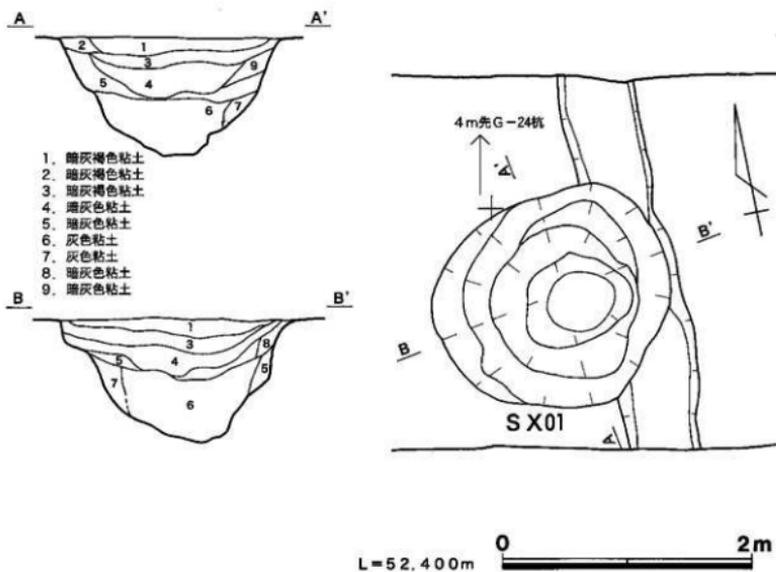
L = 52.400m



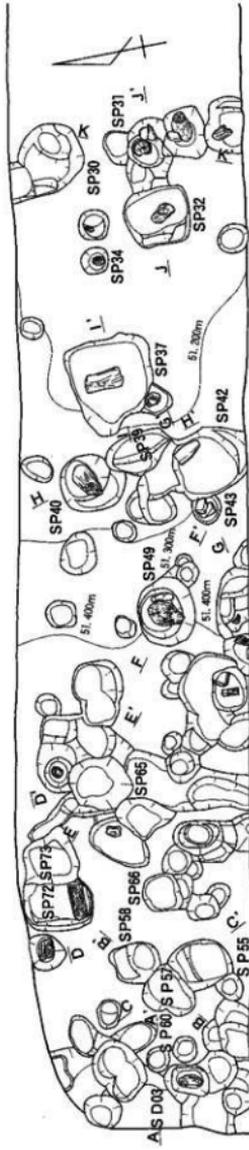
第5図 R1調査区 溝状遺構実測図(2)



第6図 R1調査区 掘立柱建物跡 (SH01) 実測図

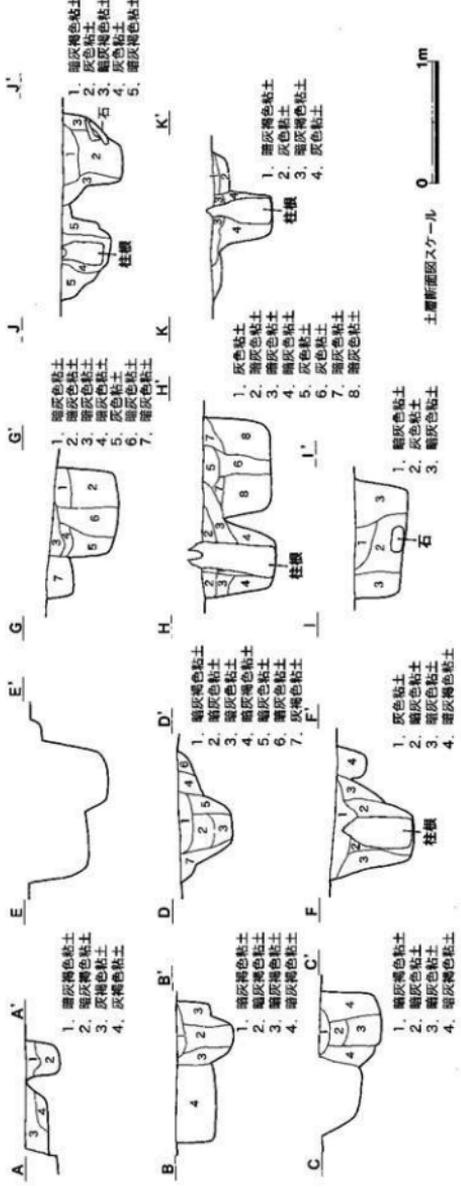


第7图 R1 調査区 SX01実測図



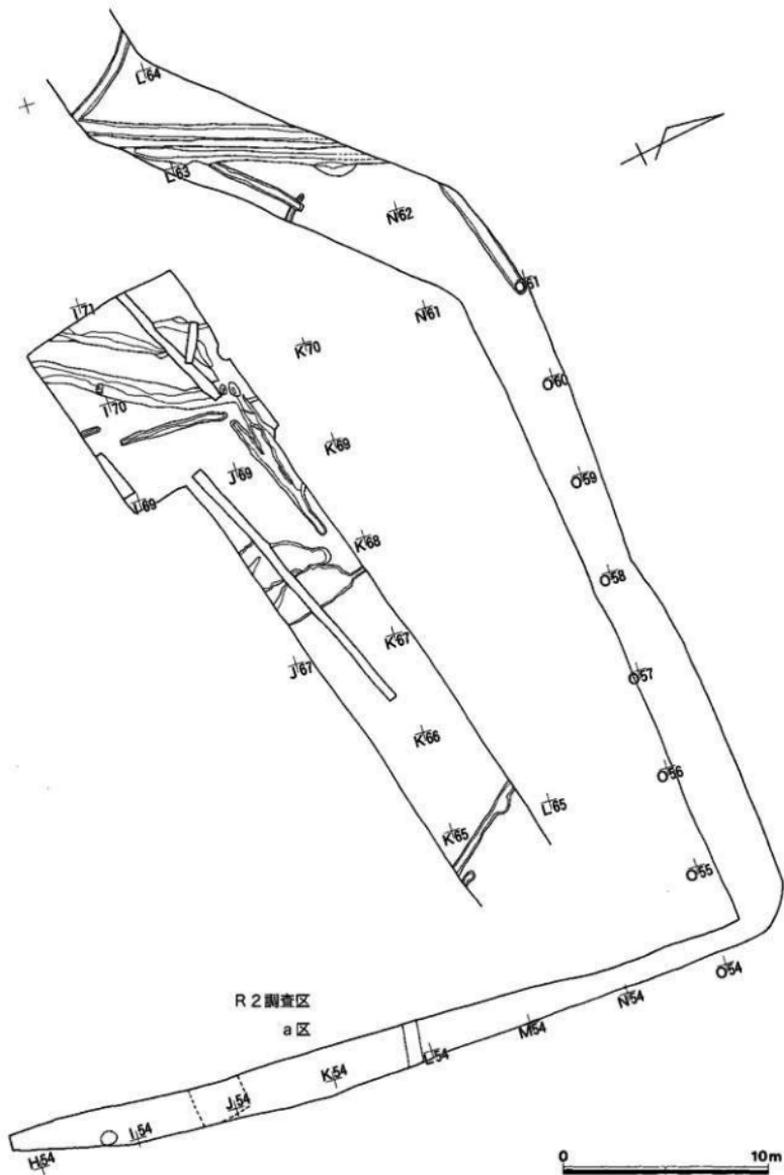
H14

H13

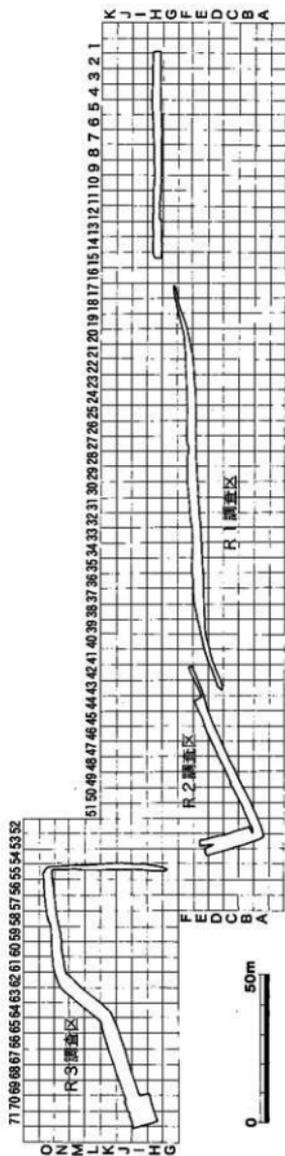
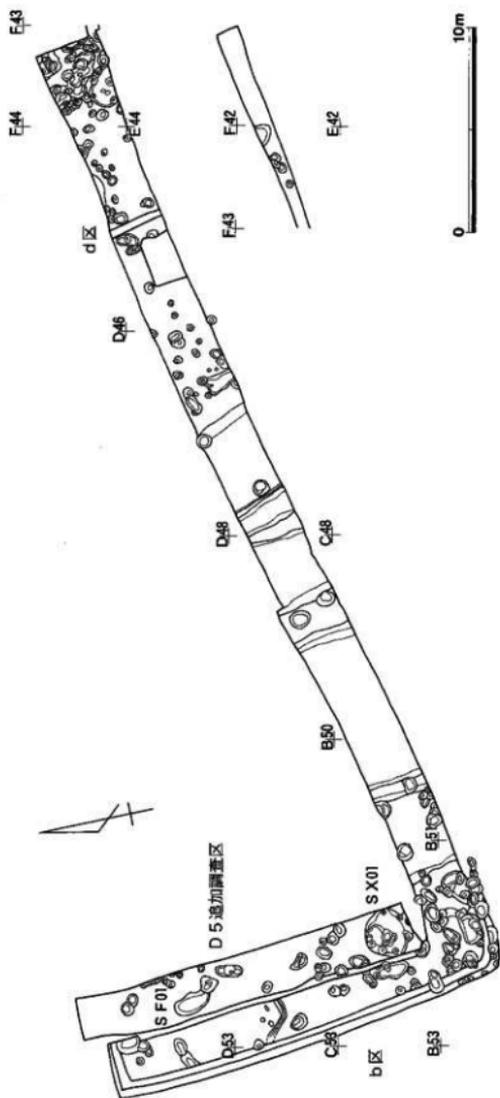


土層断面図スケール

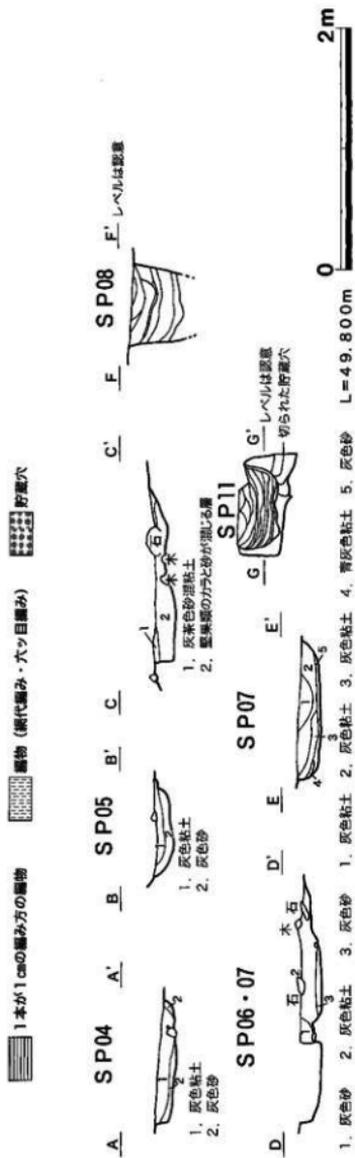
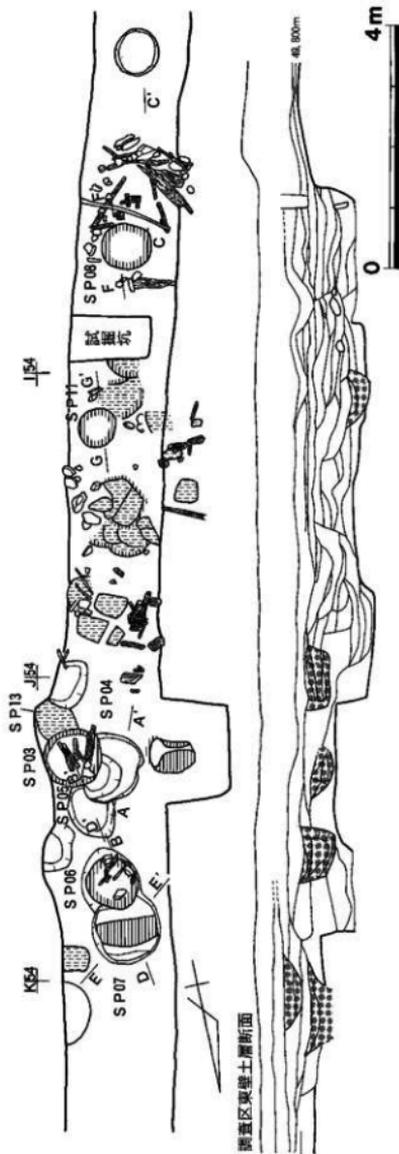
第8図 R1調査区 f区遺構実測図



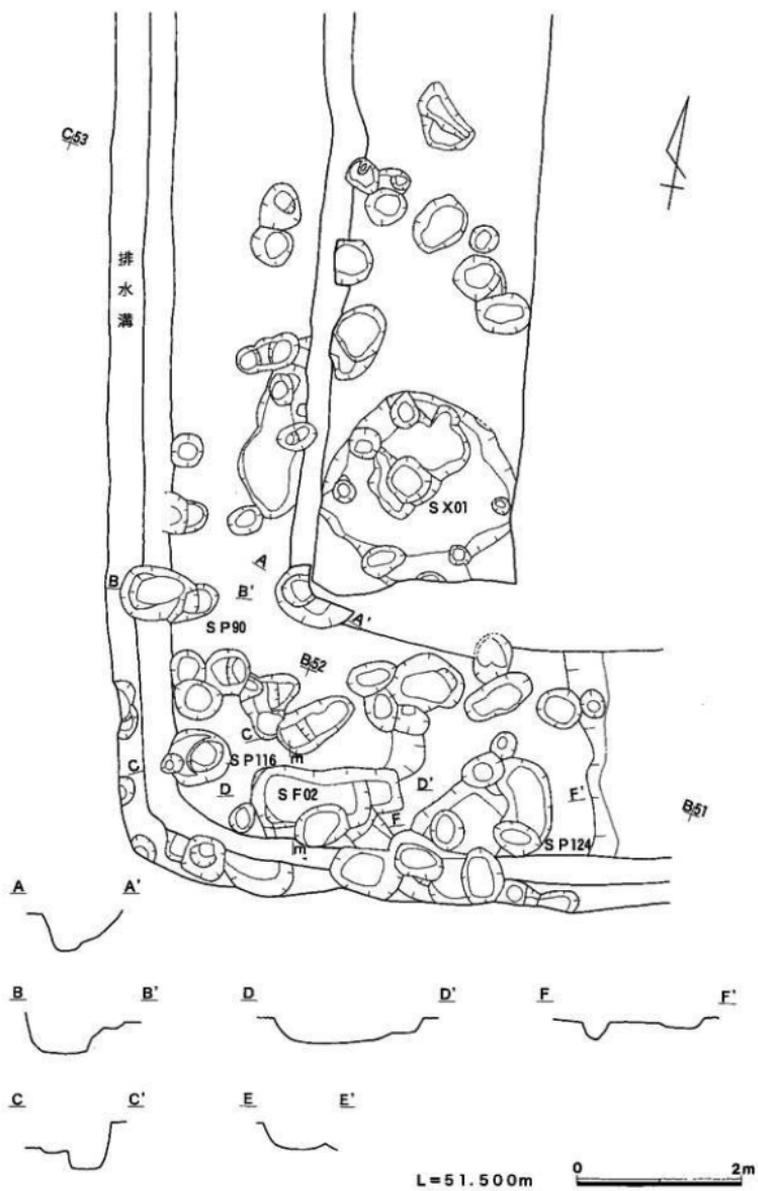
第9図 R2調査区a区・R3調査区全体図



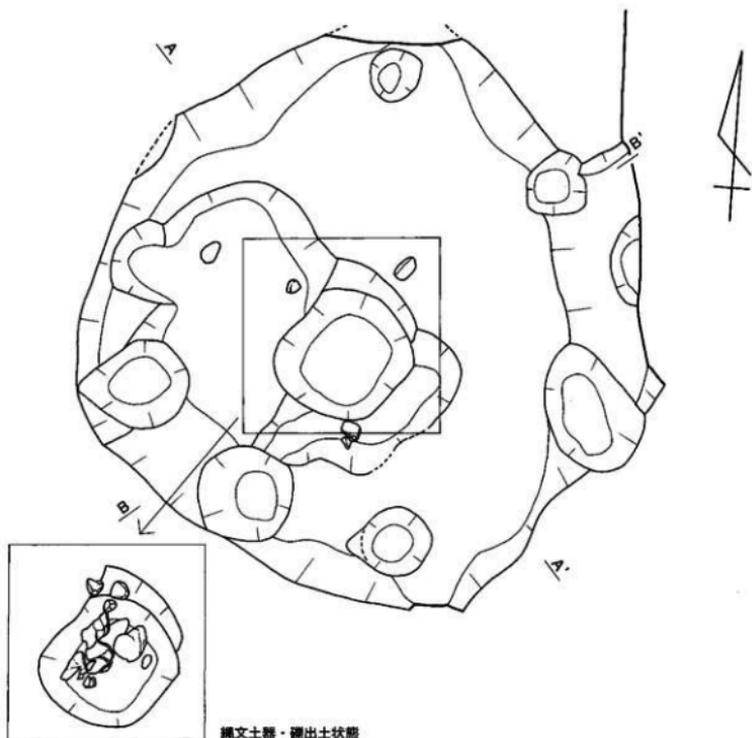
第10図 R2調査区 b～e区全体図・グリッド配置図



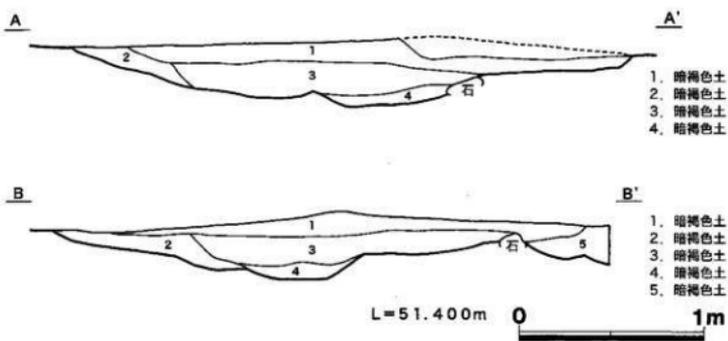
第11図 R2調査区 a区貯蔵穴実測図



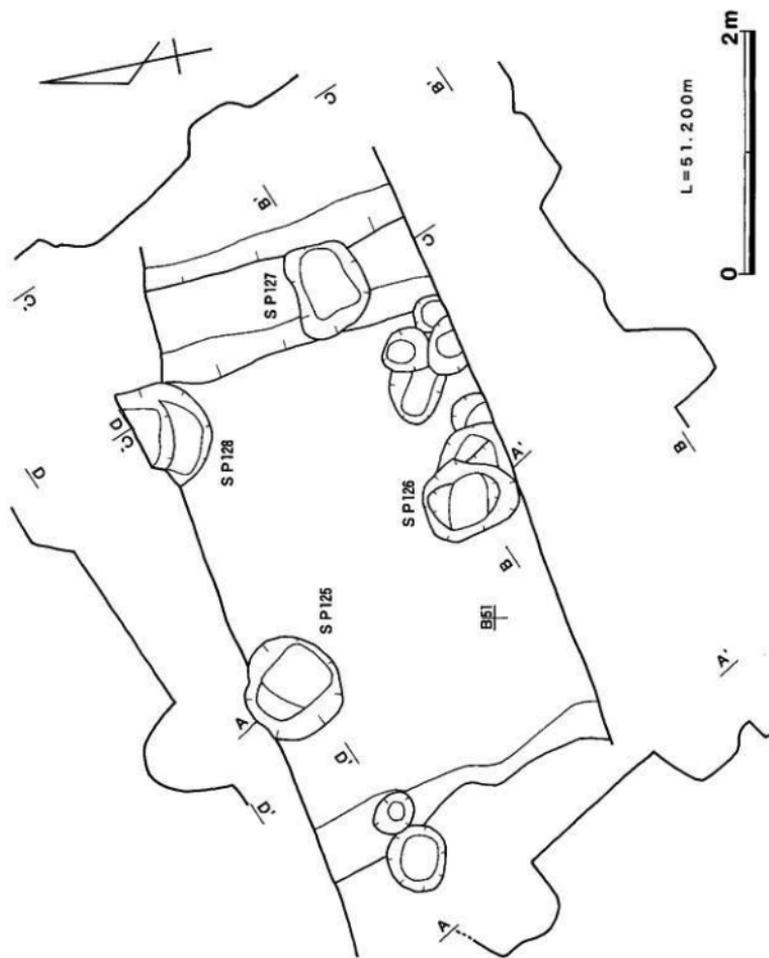
第12図 R2調査区 b区遺構実測図



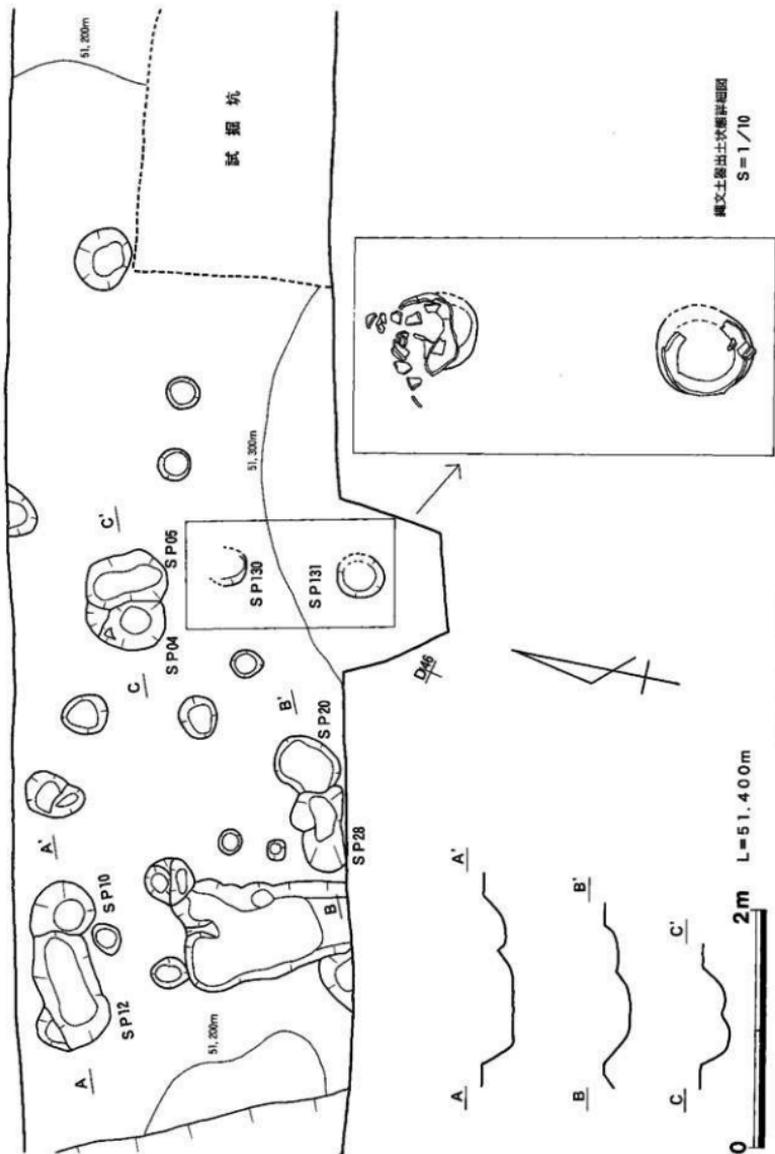
縄文土器・露出土状態



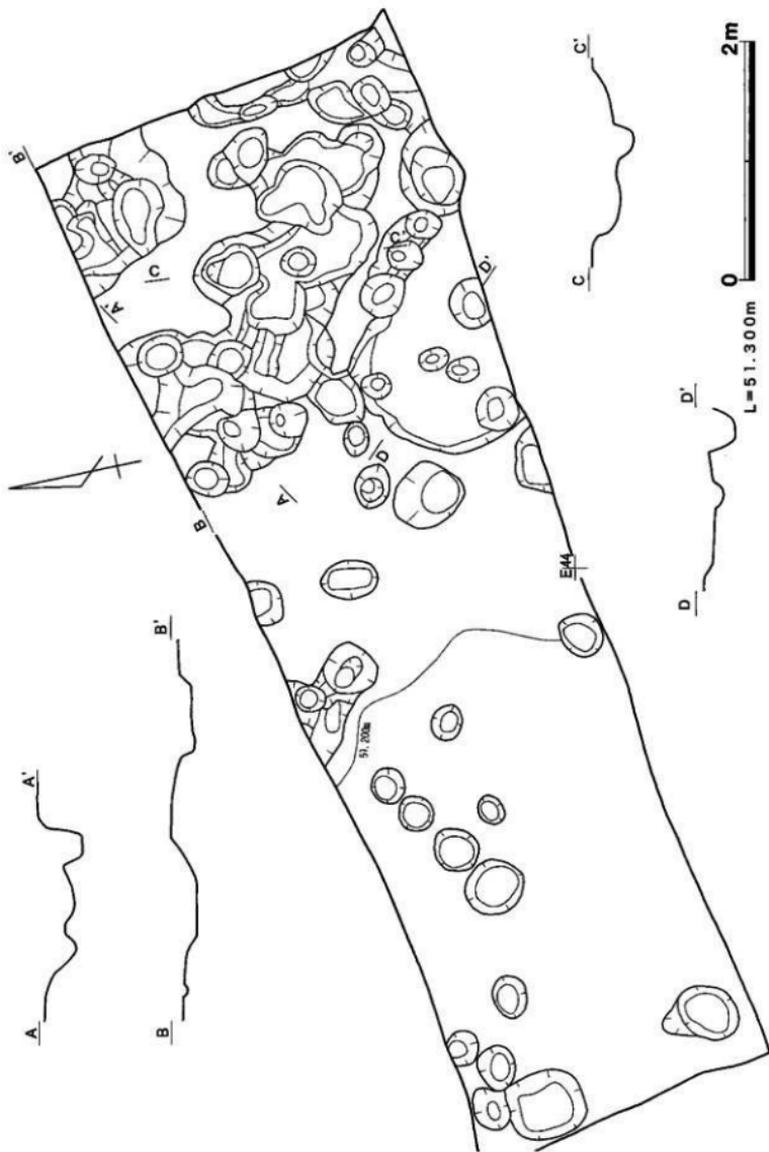
第13図 D5追加調査区 SX01実測図



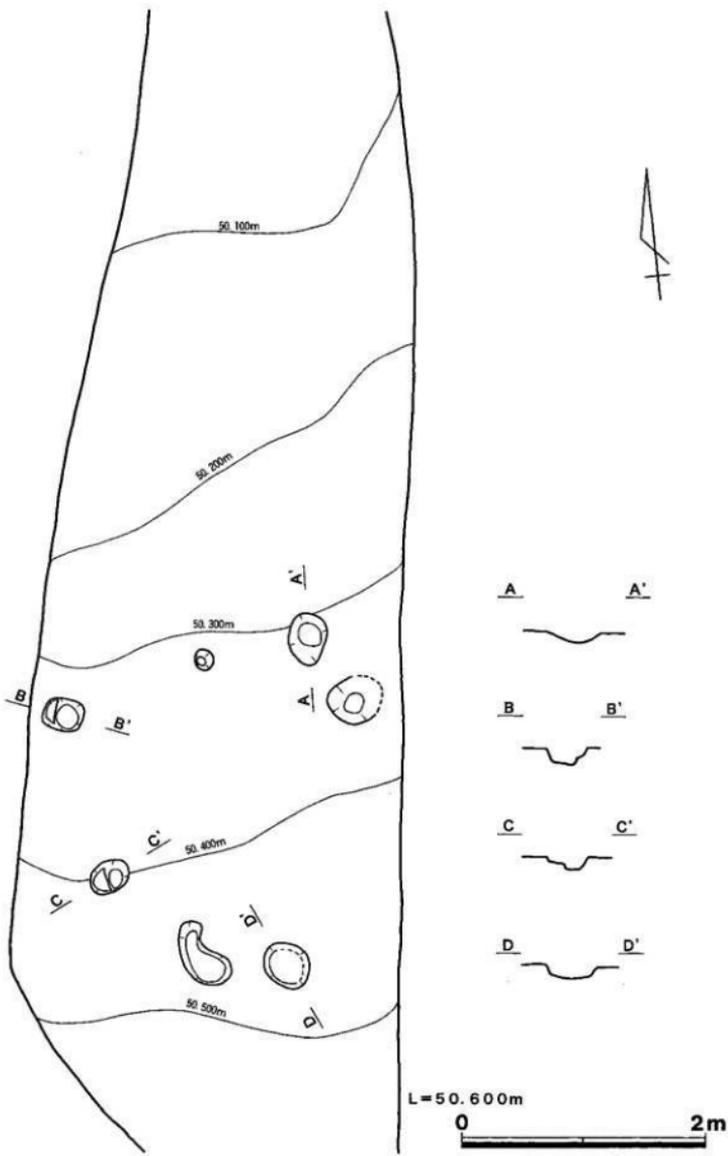
第14图 R2調査区 b区掘立柱建物跡実測図



第15図 R2調査区 d区遺構実測図(1)

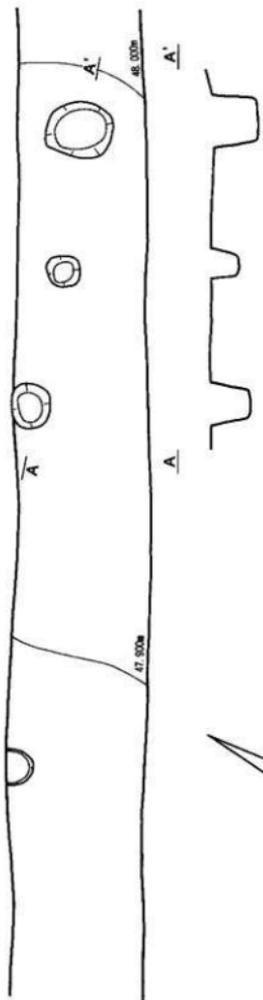


第16图 R2 調査区 d区遺構実測図(2)

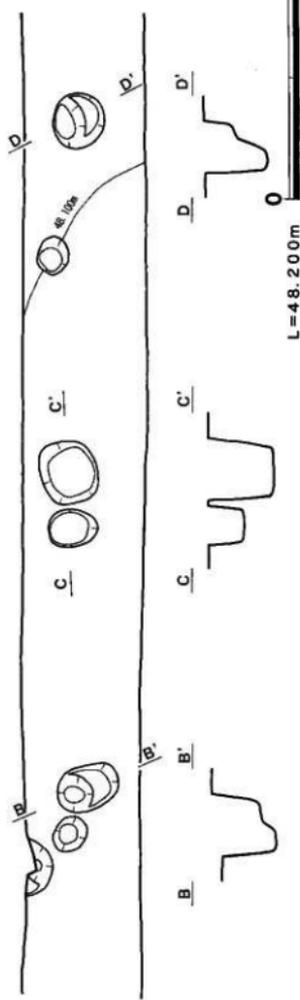


第17図 R2調査区 g区遺構実測図

上図面を縮小

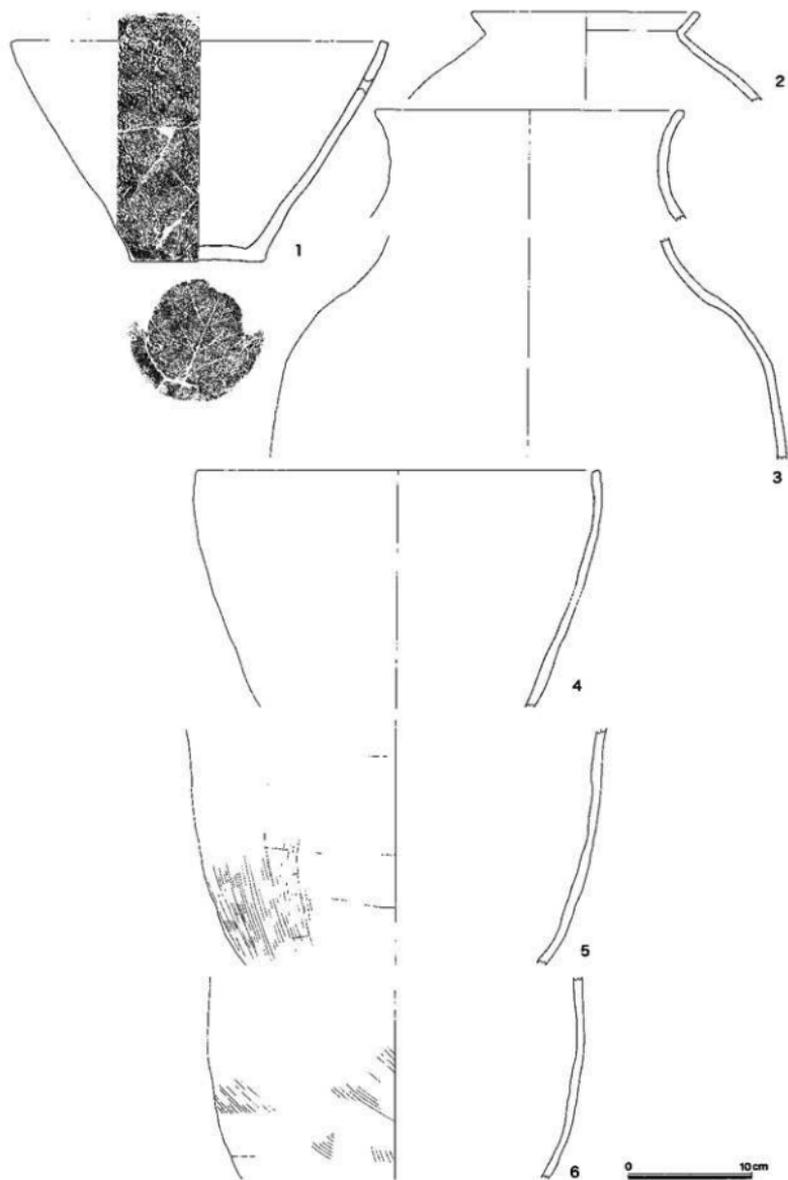


上図面を縮小

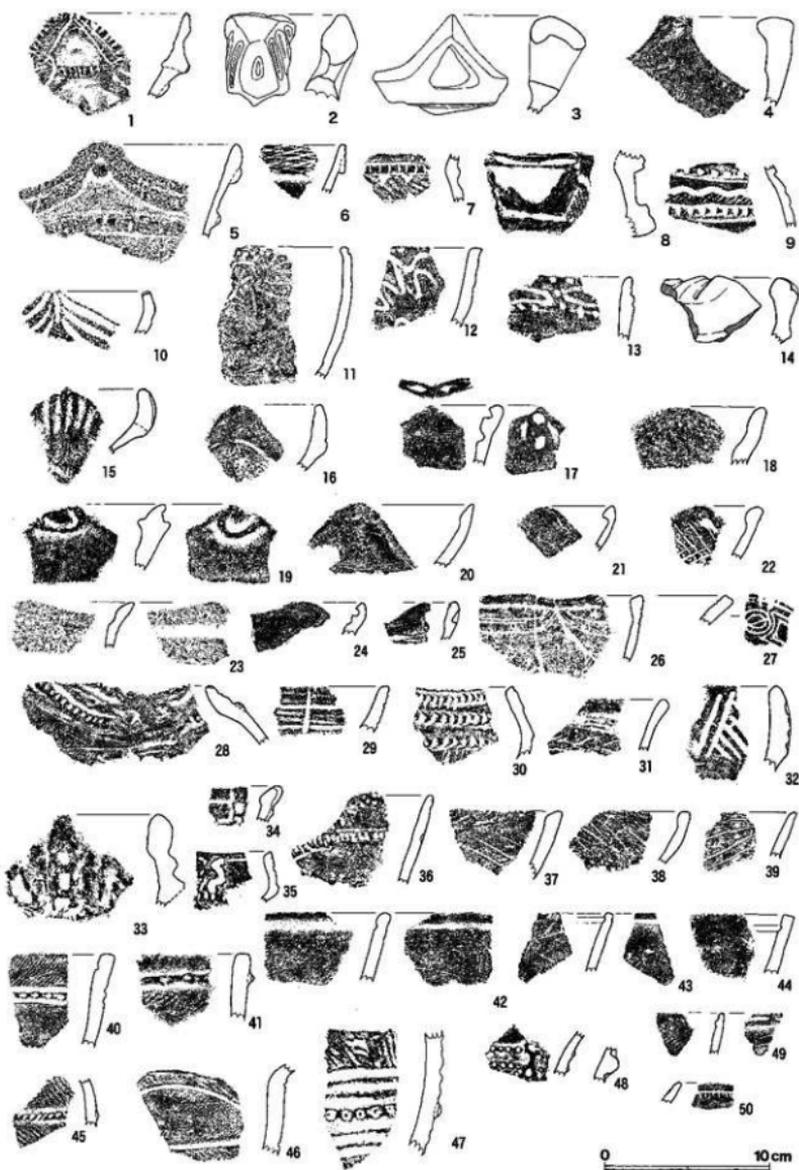


L=48.200m

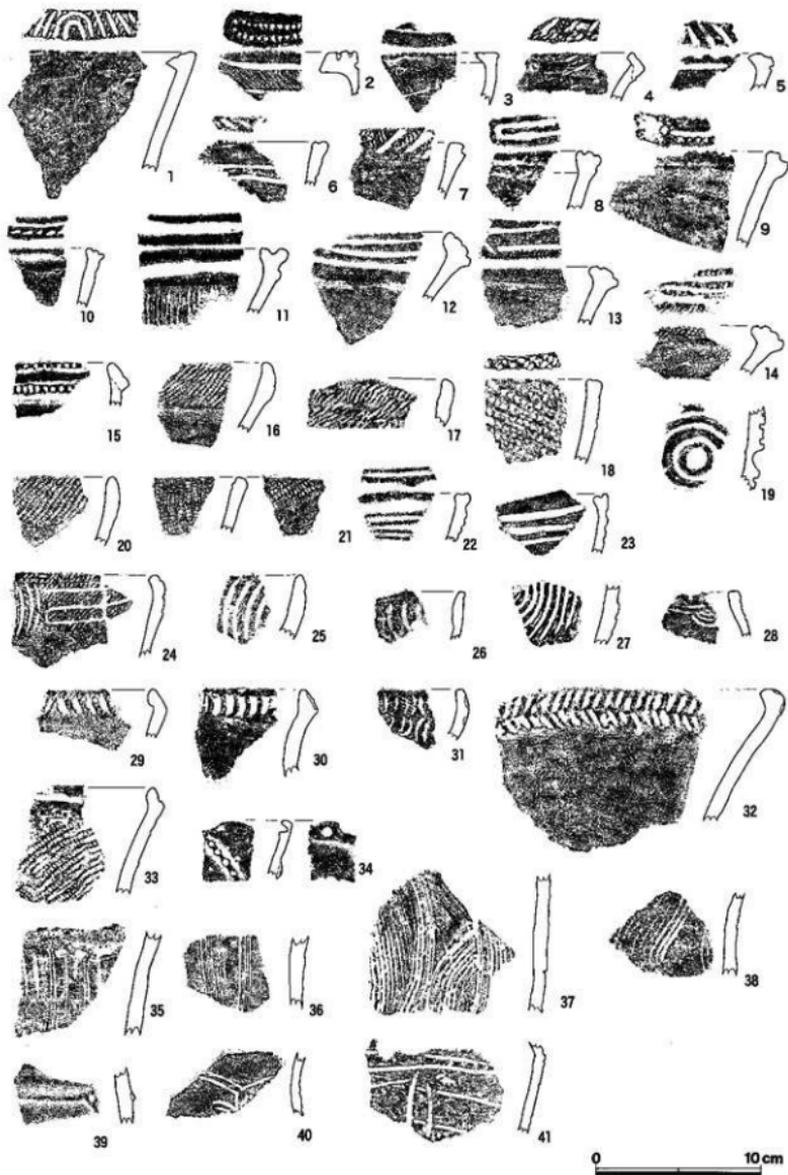
第18図 D5調査区 遺構実測図



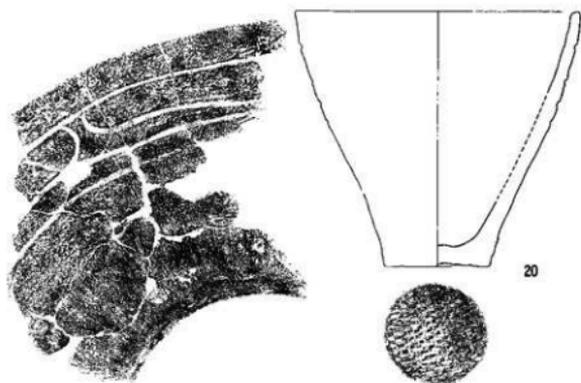
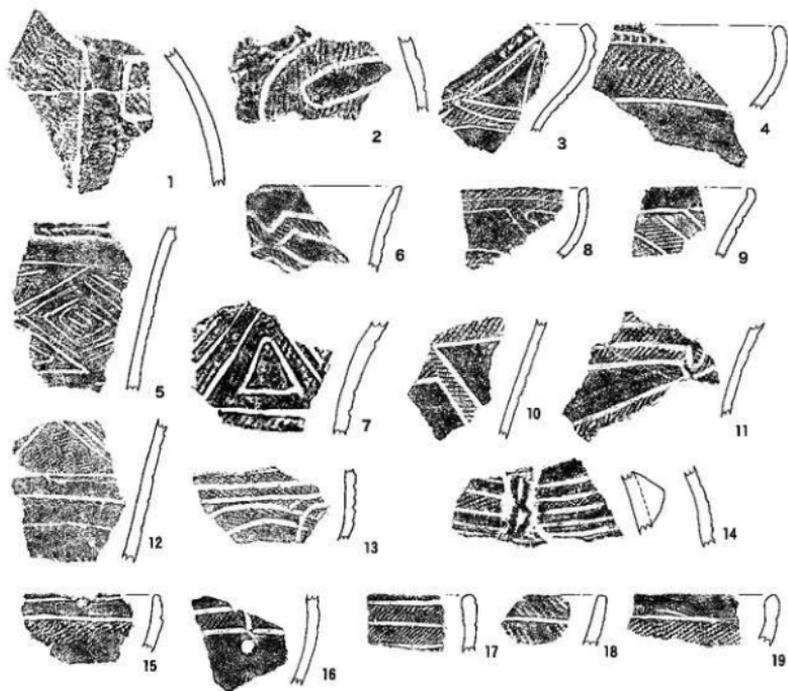
第19図 出土遺物実測図：縄文土器1



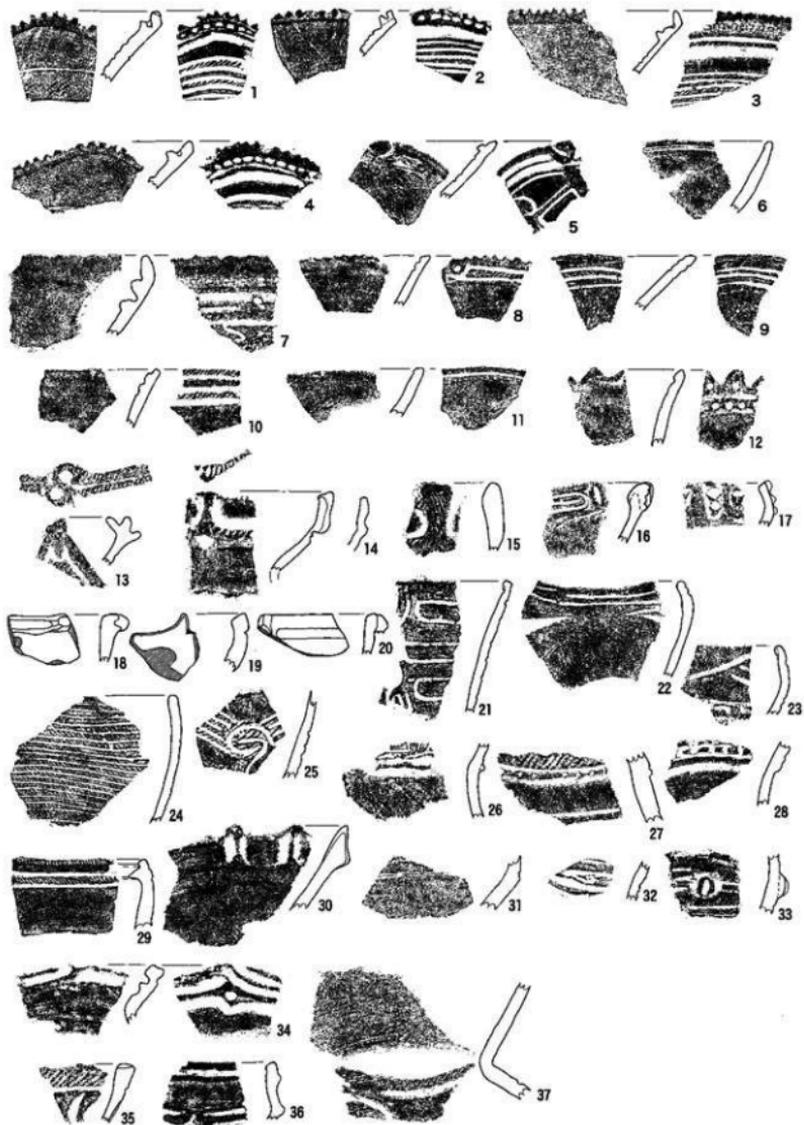
第20図 出土遺物実測図：縄文土器2



第21图 出土遺物実測図：縄文土器3

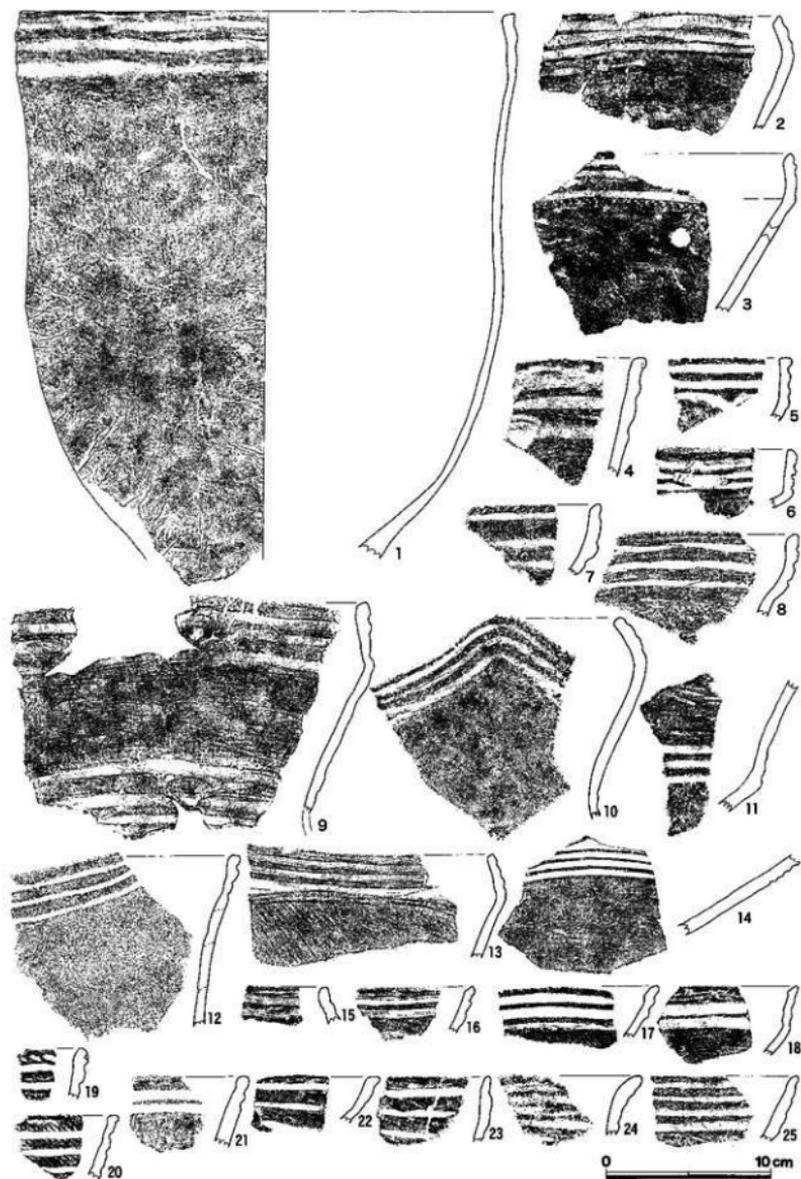


第22図 出土遺物実測図：縄文土器4

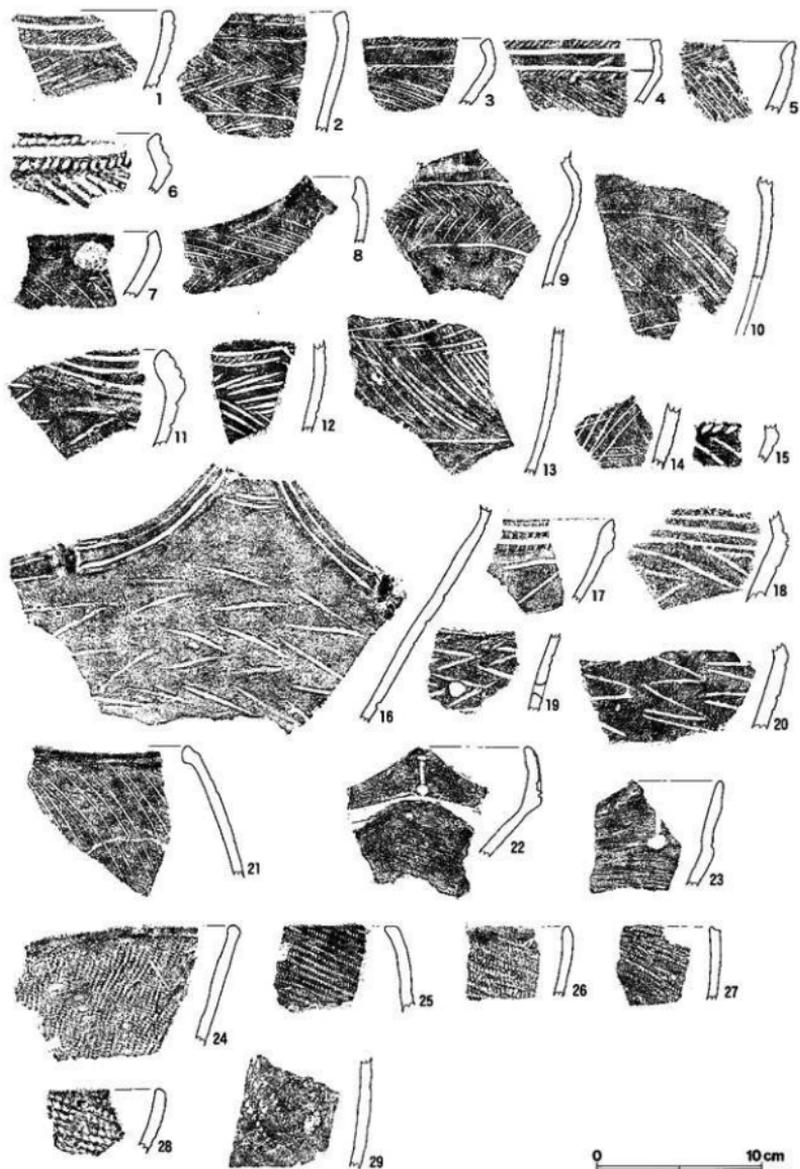


0 10 cm

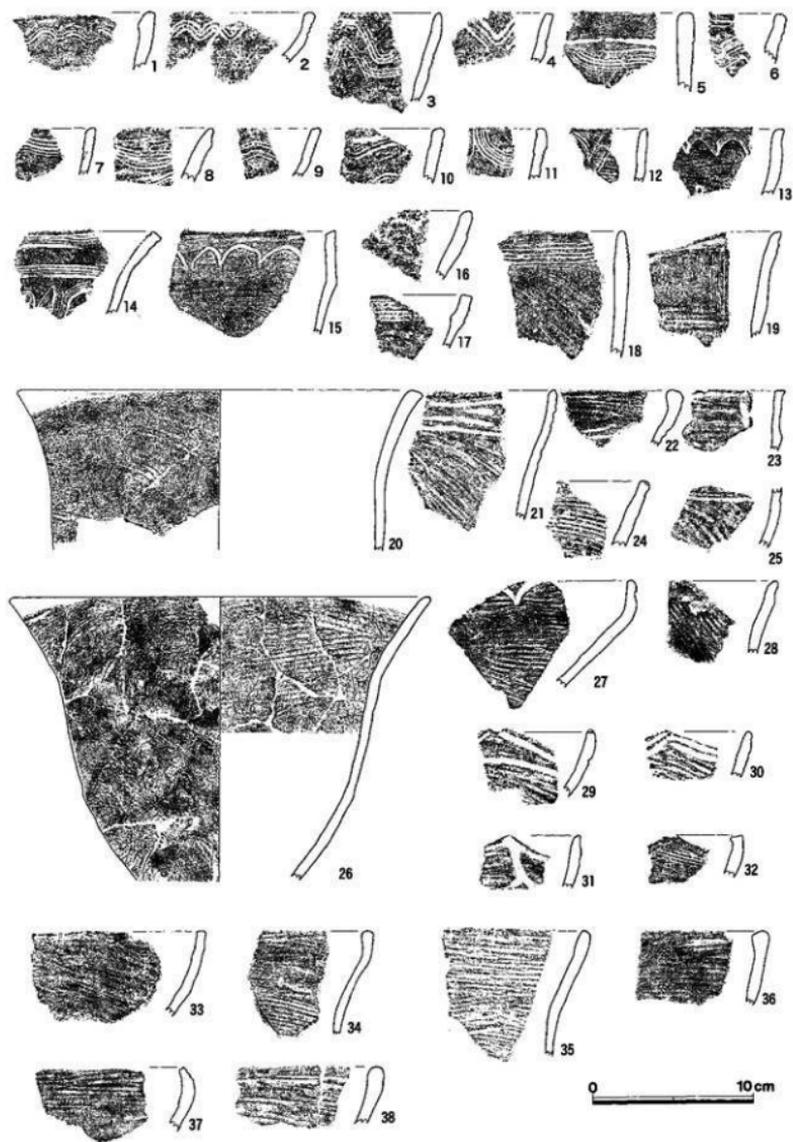
第23図 出土遺物実測図：縄文土器5



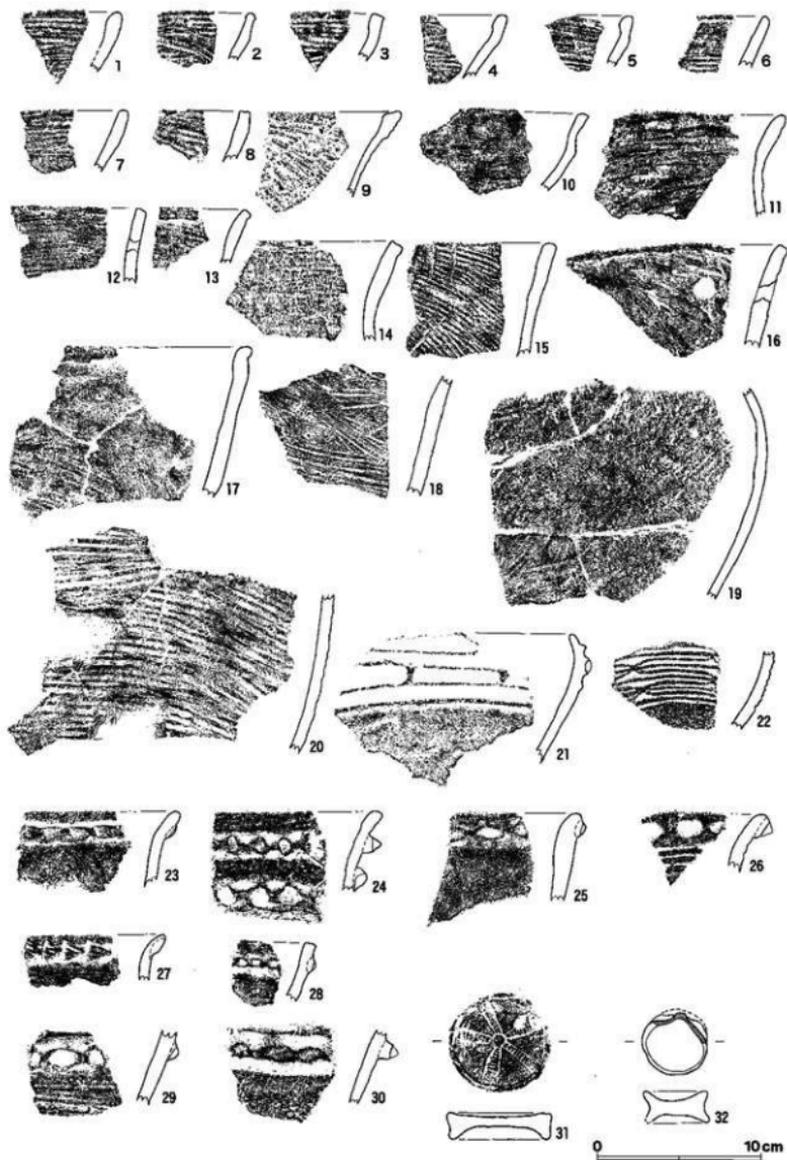
第24図 出土遺物実測図：縄文土器6



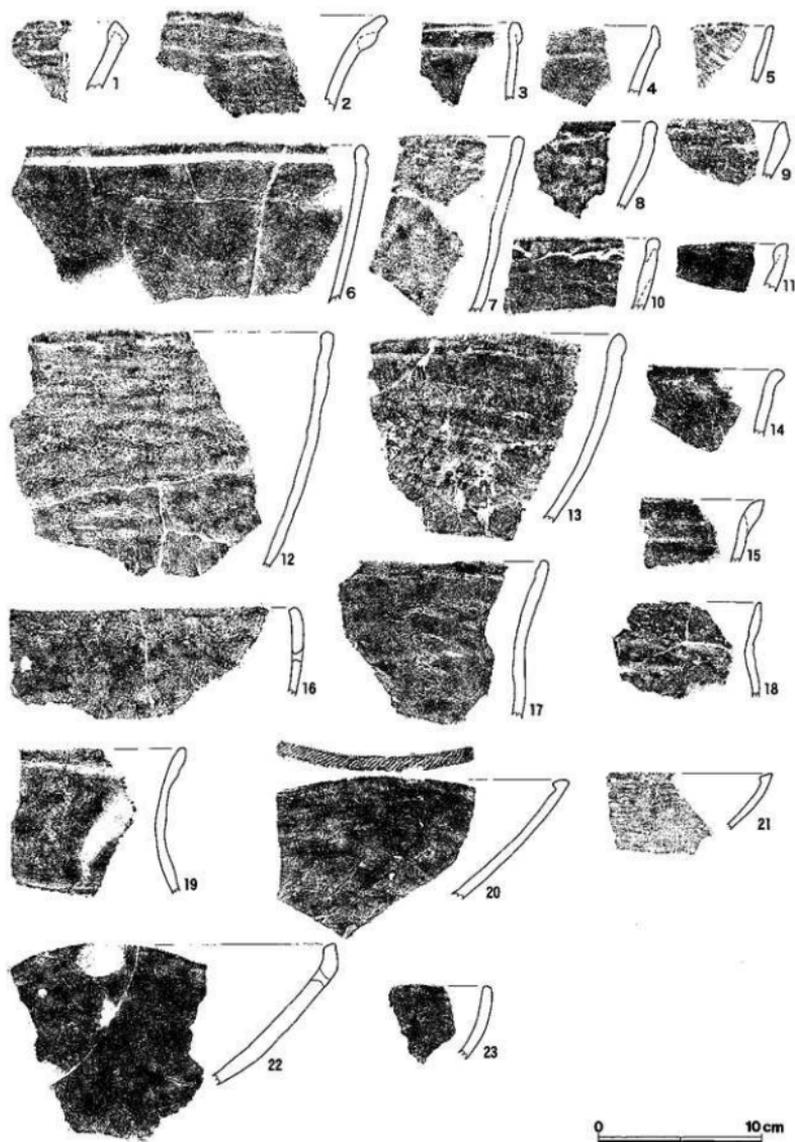
第25図 出土遺物実測図：縄文土器7



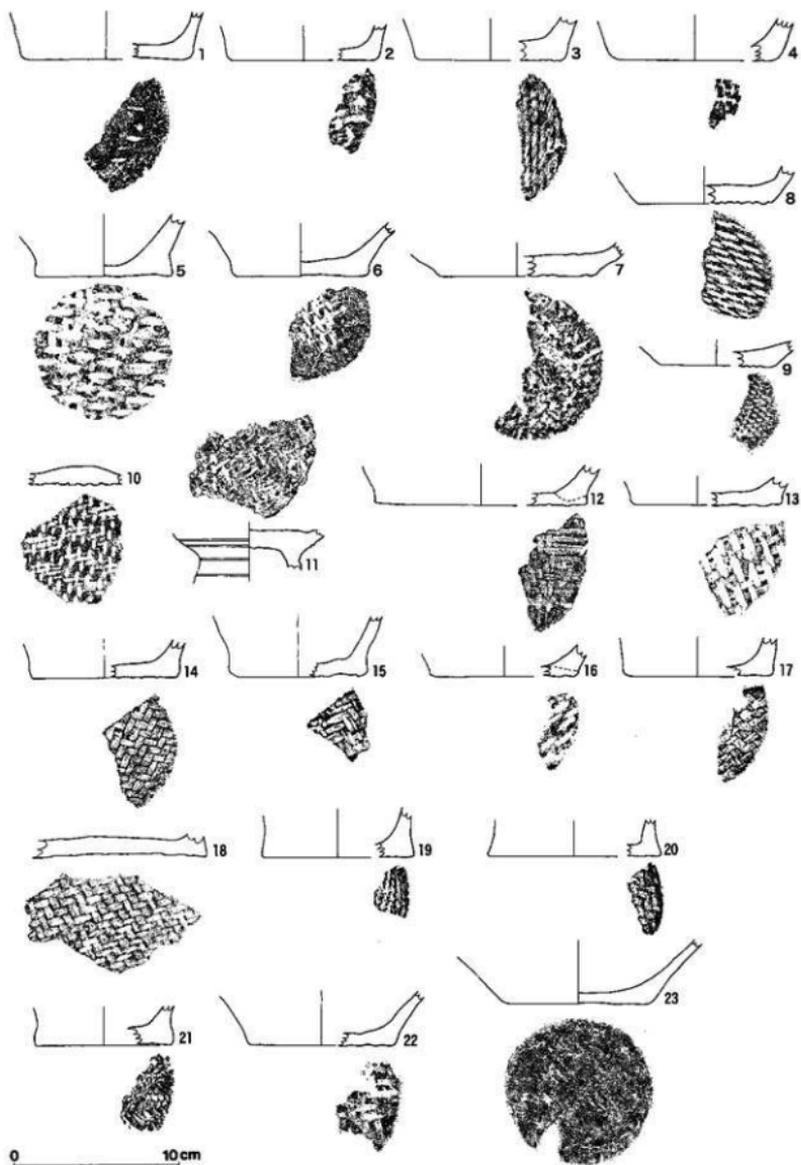
第26図 出土遺物実測図：縄文土器8



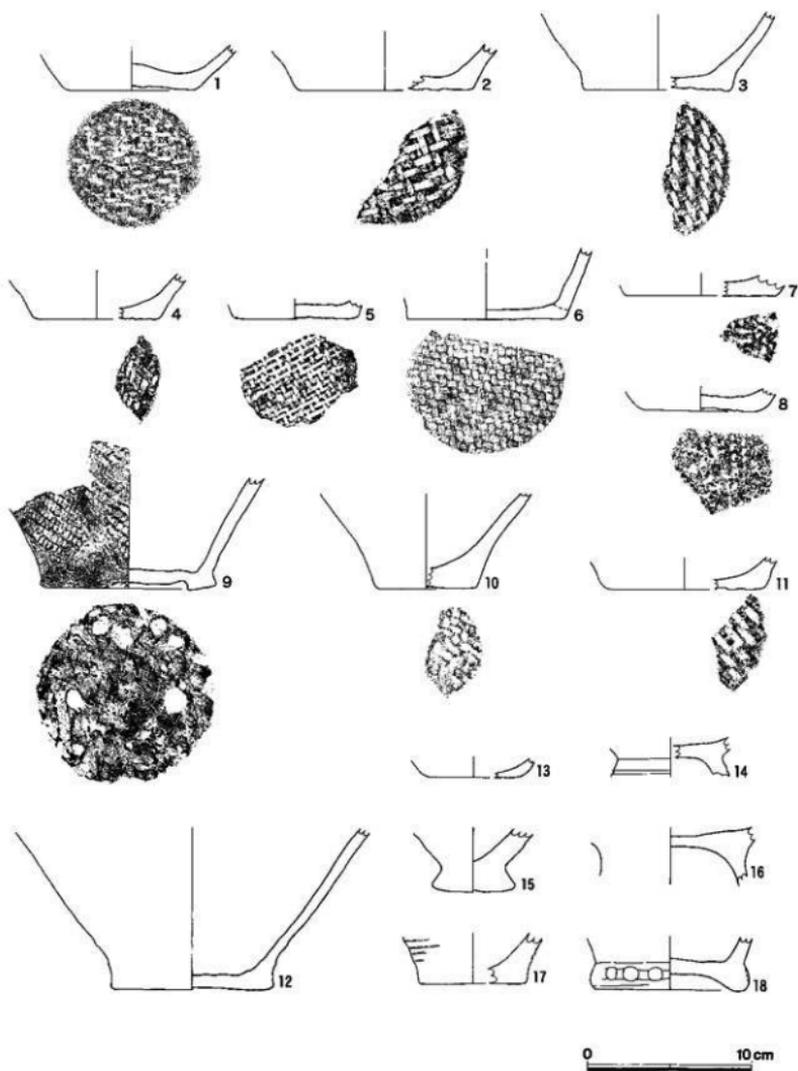
第27図 出土遺物実測図：縄文土器9



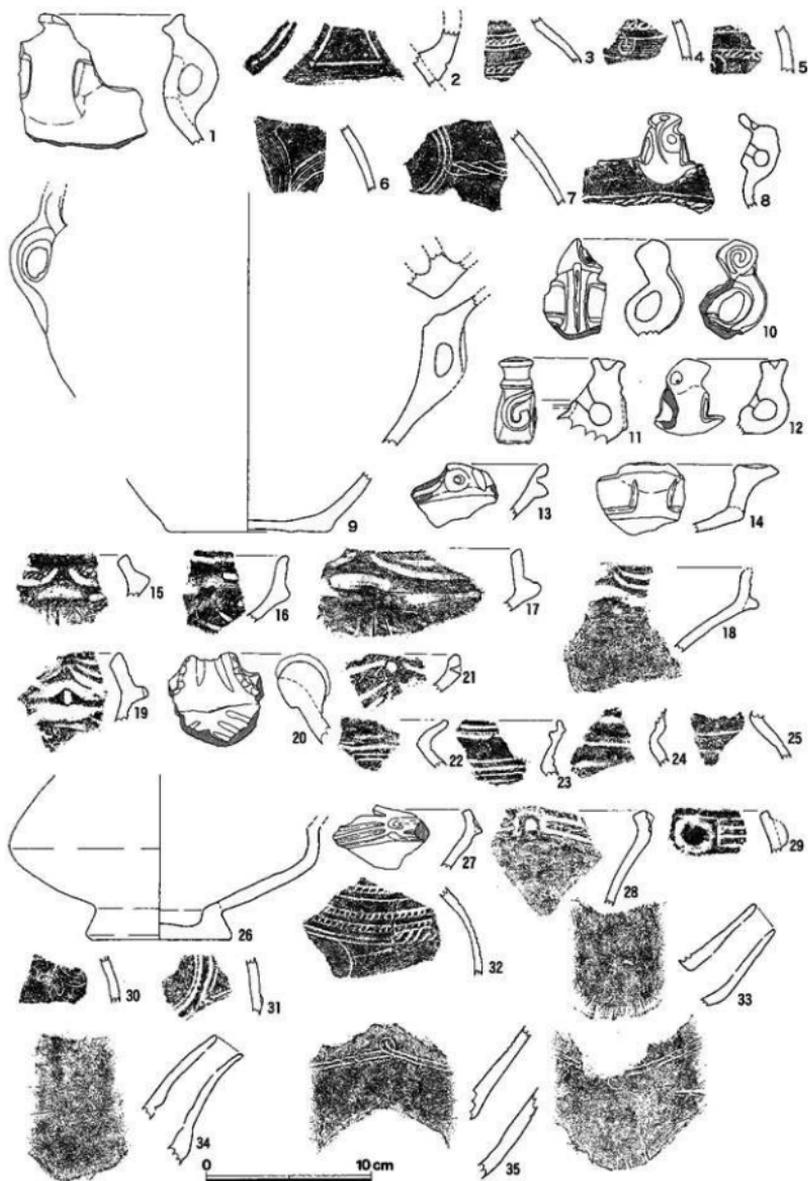
第28図 出土遺物実測図：縄文土器10



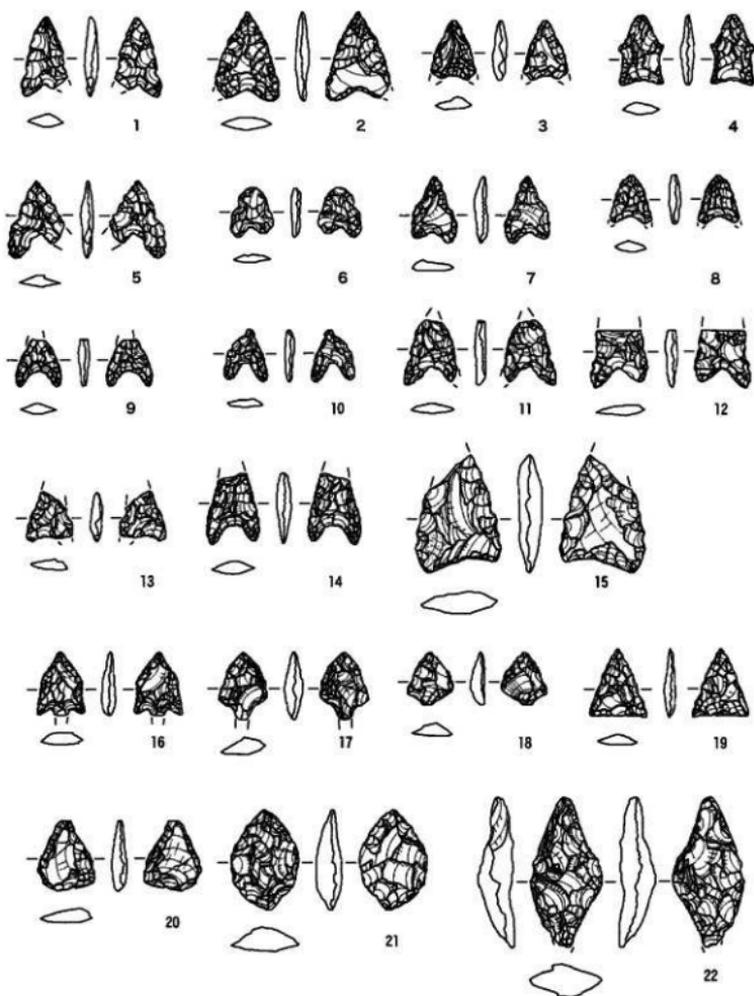
第29図 出土遺物実測図：縄文土器11



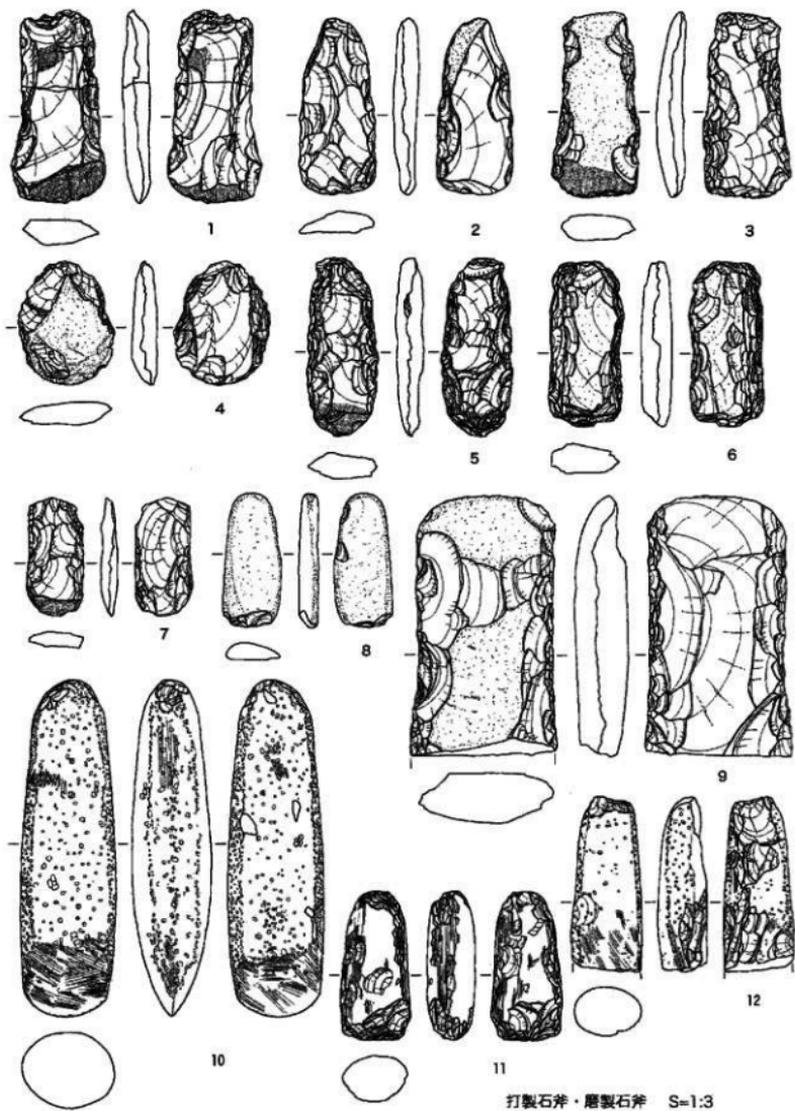
第30図 出土遺物実測図：縄文土器12



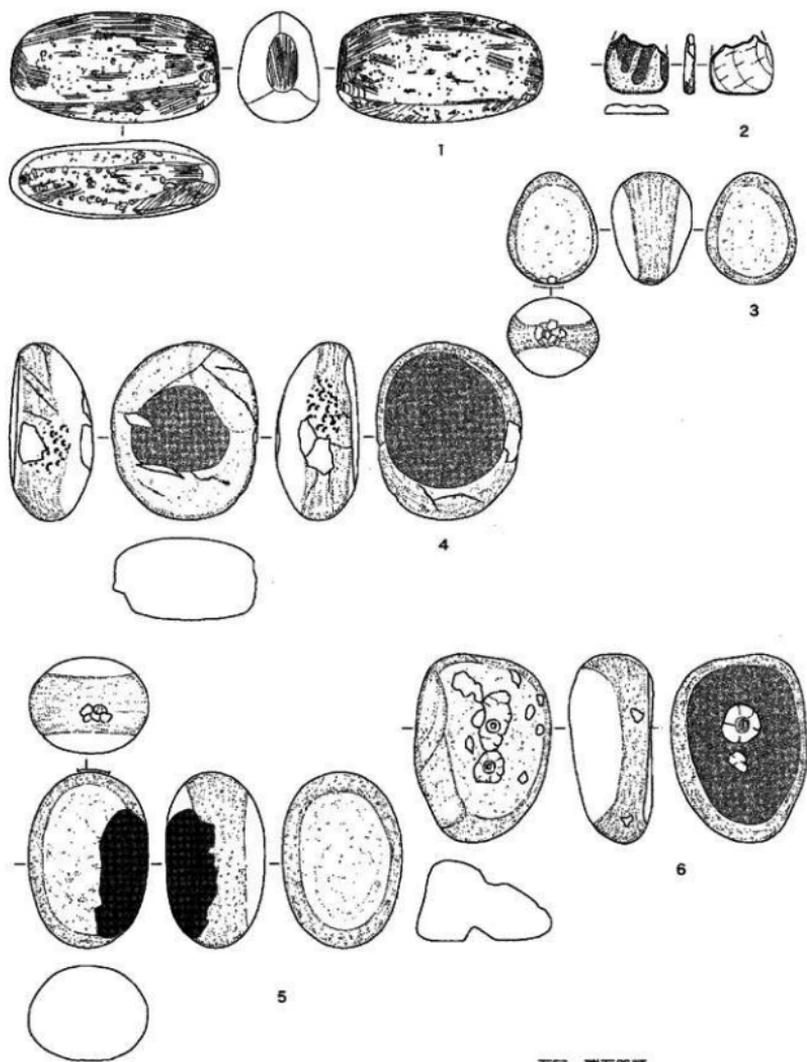
第31图 出土遺物実測図：縄文土器13



石鏃・石錐 S=2:3



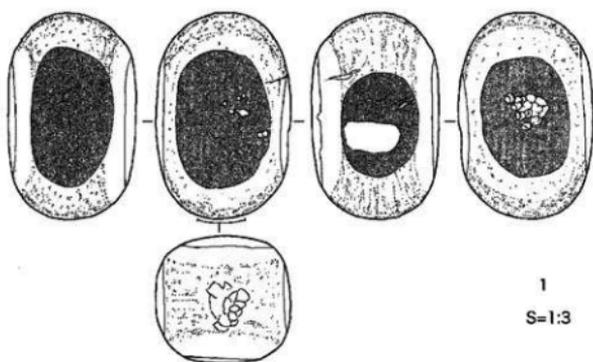
第33图 出土遺物実測図：石器 2



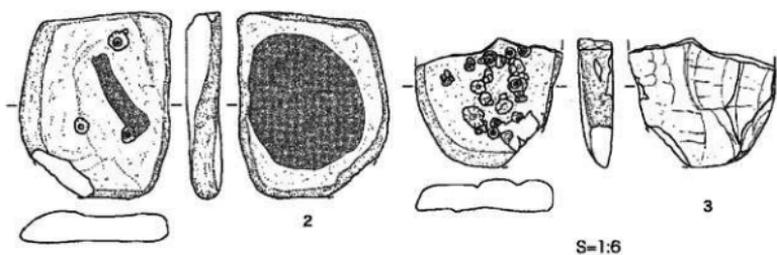
石冠・礫石器類

S=1:3

第34図 出土遺物実測図：石器3



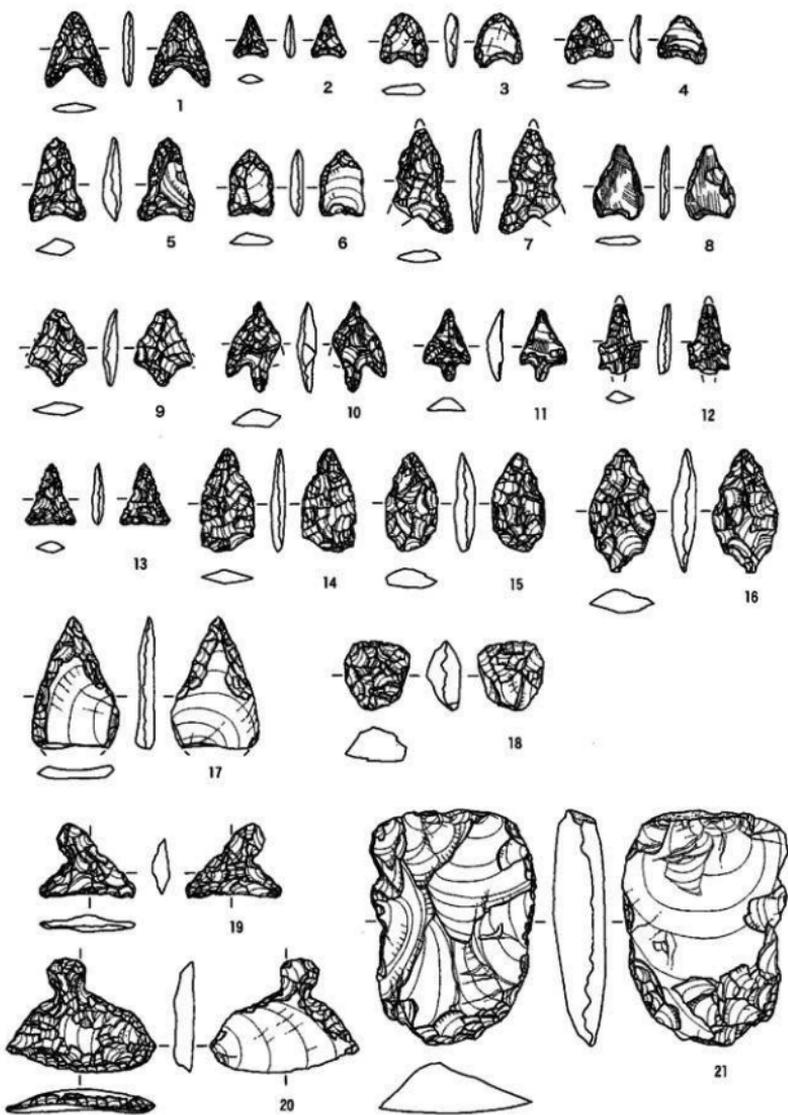
1  
S=1:3



S=1:6  
3

大形礫石器類

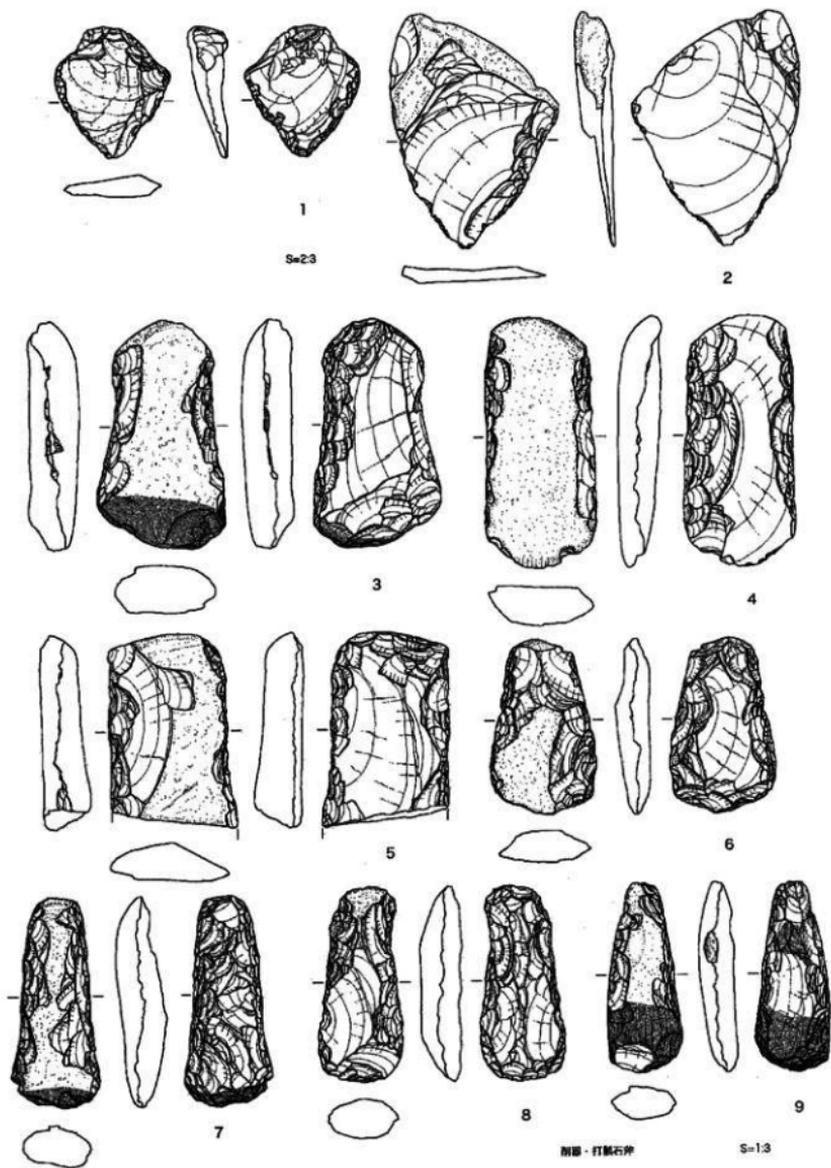
第35圖 出土遺物実測図：石器4



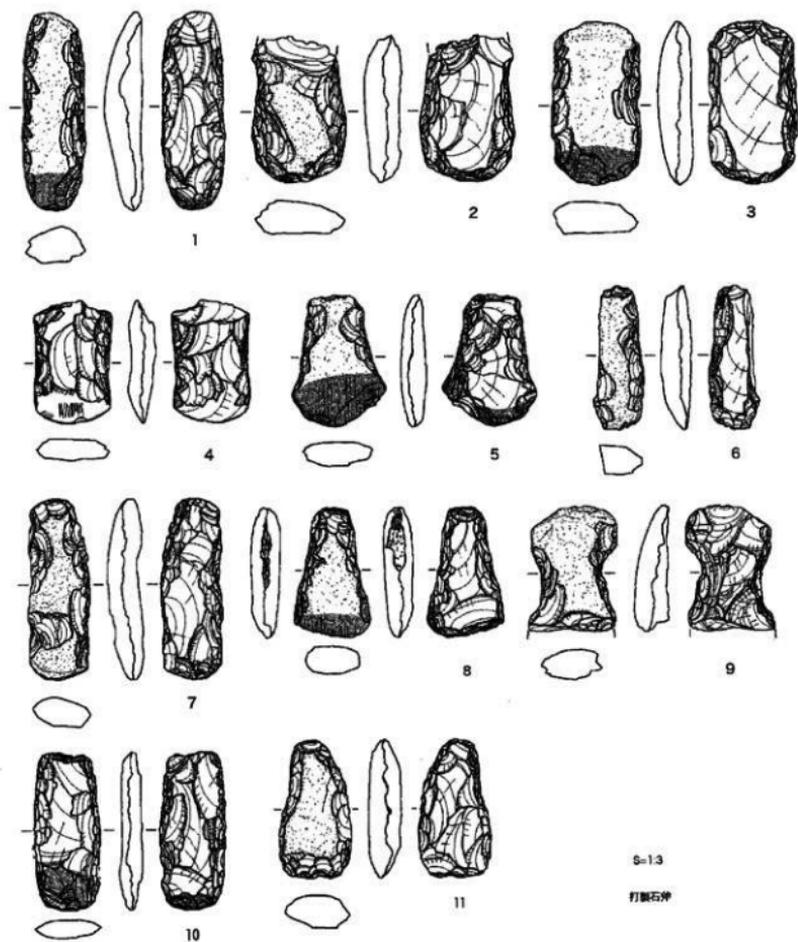
S=2:3

石鏃・石匙・兩極石器・削器

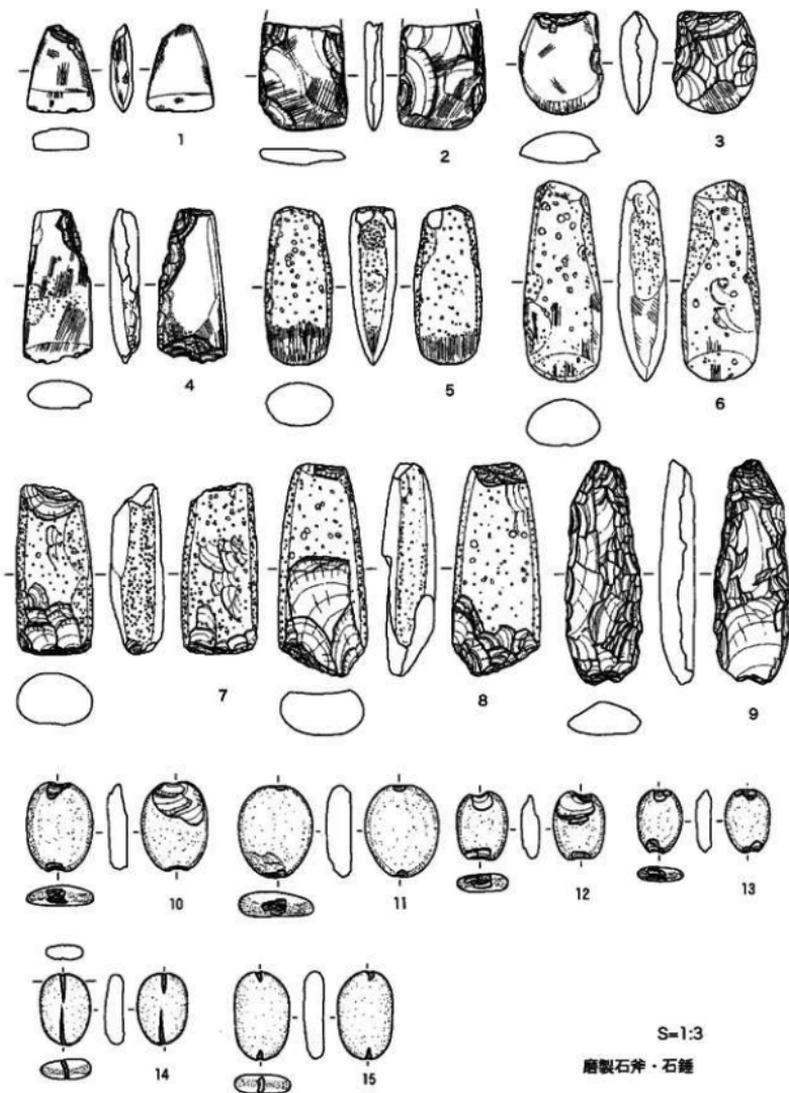
第36圖 出土遺物実測圖：石器5



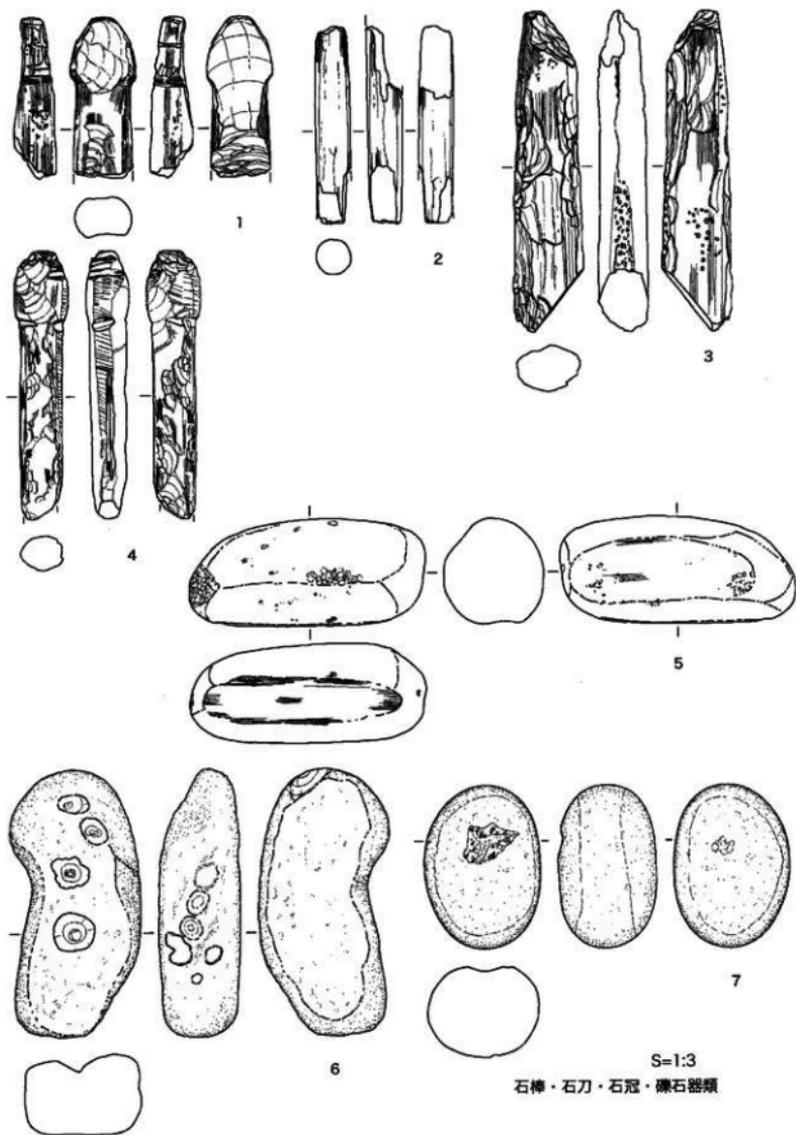
第37圖 出土遺物実測図：石器6



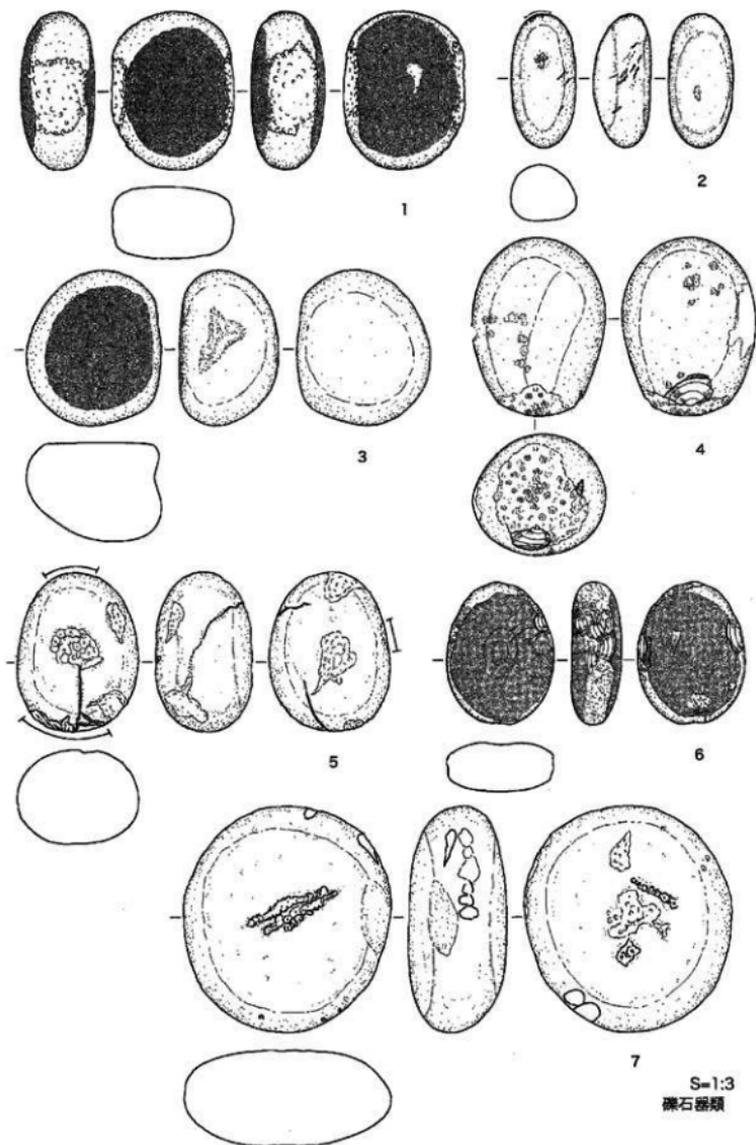
第38图 出土遺物実測図：石器7



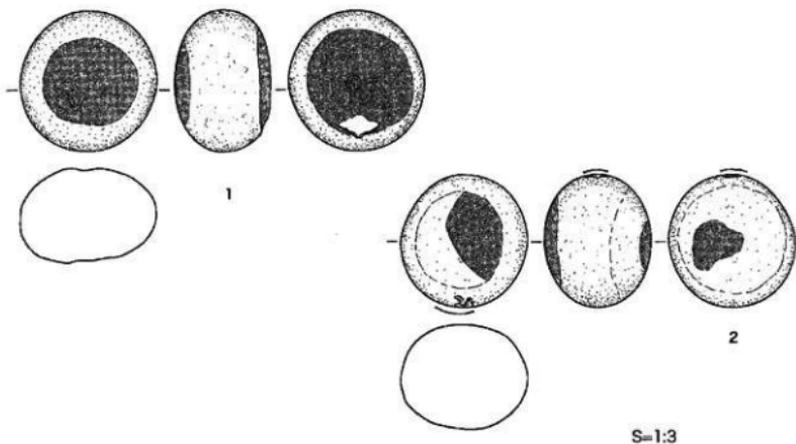
第39圖 出土遺物実測図：石器8



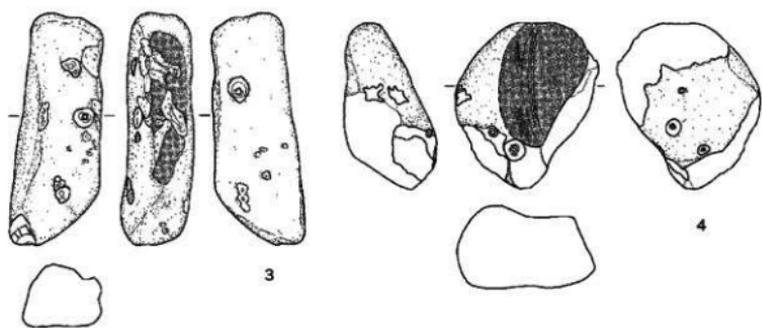
第40図 出土遺物実測図：石器9



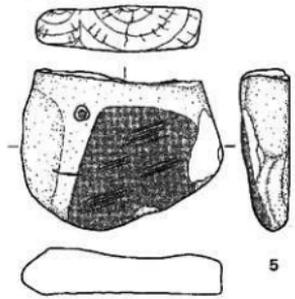
第41圖 出土遺物実測図：石器10



S=1:3

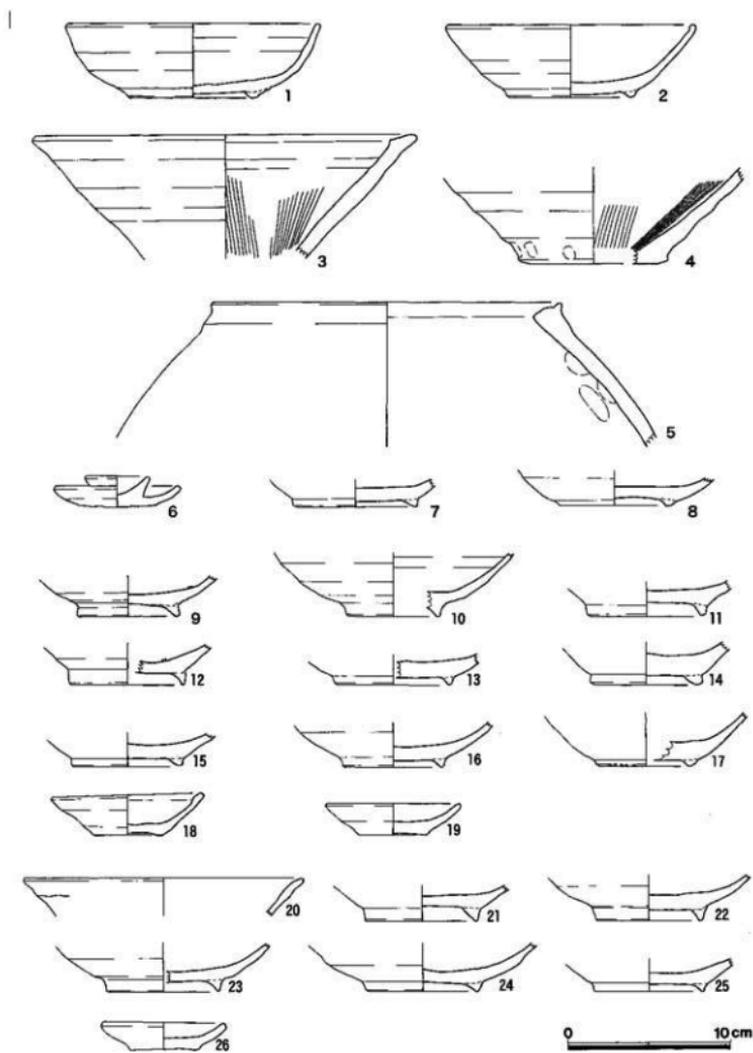


S=1:6



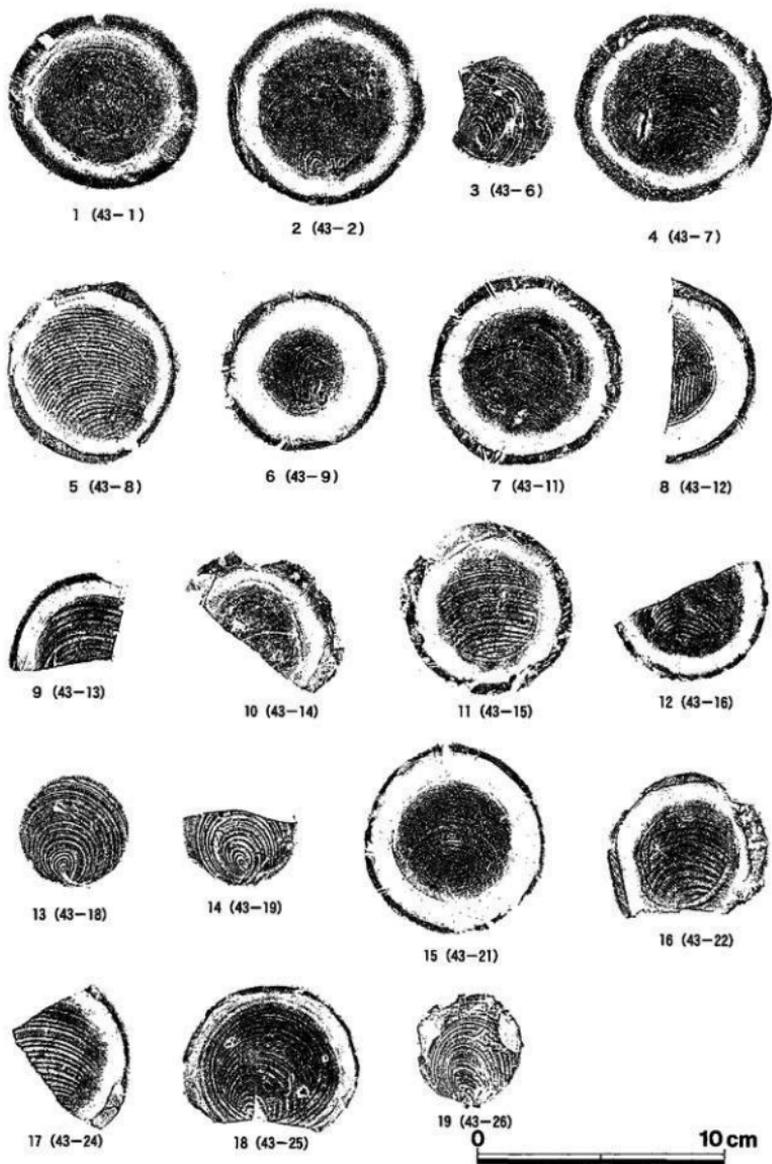
礫石器類

第42図 出土遺物実測図：石器11



1=a区 SP105 2=a区 SP108 3=a区 SP113 4=a区 SP146 5=f区 SD01 6=f区 SD08  
 7=f区 SD09 8=f区 SD10 9~19=a区 SD12  
 20·22~26=a区南 21=a区北

第43图 出土遺物実測図：陶器



第44図 底部糸切り痕拓影図



# 図版 1



遺跡遠景（南方向から）



調査地全景（東方向から）

図版2 R1調査区(栗下遺跡)



a区完掘状態(西から)

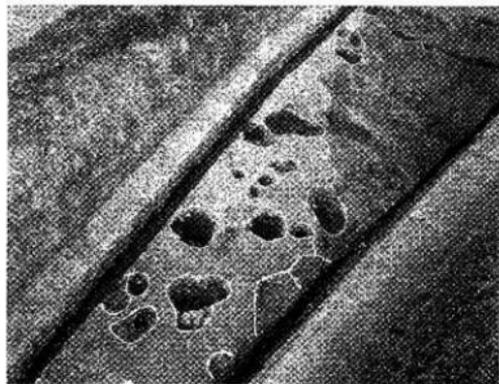


SD12 礫等出土状態(南から)



SD12 土製耳飾り出土状態:矢印(南から)

図版3 R1調査区(栗下遺跡)



SD12 立ち上がり付近  
(南西から)



a区完掘状態(東から)



SD13・14・15 完掘状態  
(南から)

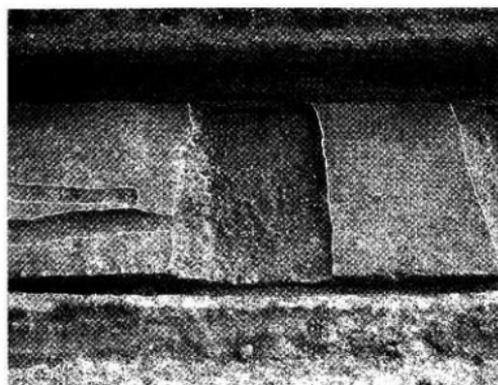
図版4 R1調査区(栗下遺跡)



調査区全景：c区から東  
(西から)

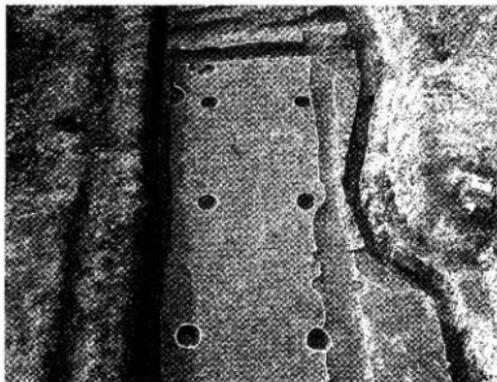


SD10 完掘状態(北から)

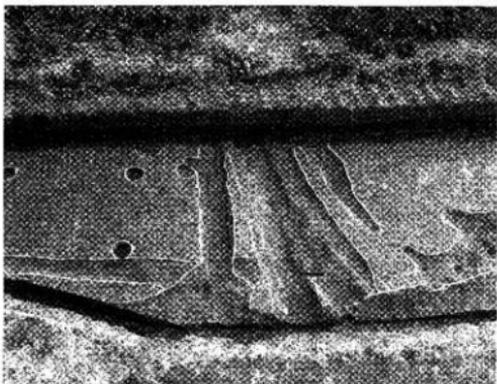


SD11 完掘状態(北から)

図版5 R1調査区(栗下遺跡)



SH01 完掘状態(東から)



SD06・07 完掘状態(北から)



調査区全景:d区から西(東から)

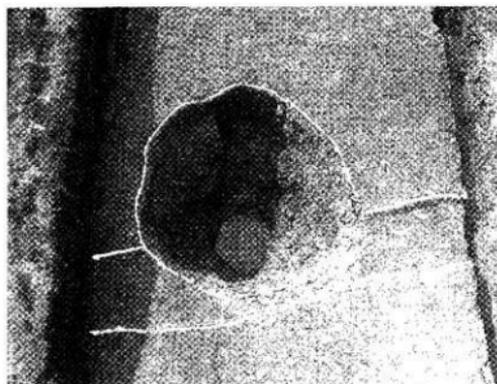
図版6 R1調査区(栗下遺跡)



調査区全景: e区から西(東から)



SX01 碑等出土状態(西から)



SX01 発掘状態(西から)

図版7 R1調査区(栗下遺跡)



調査区全景：f区(西から)

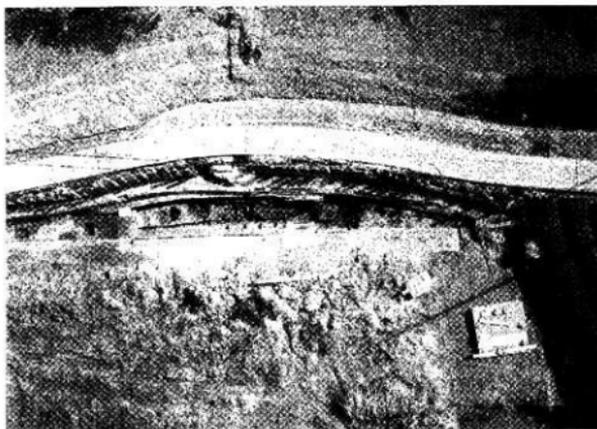


f区遺構集中域(東から)



調査区全景：f区(東から)

図版8 R2調査区(メノト遺跡)



a区貯蔵穴群  
(西上方から)



a区流路南側立ち上がり付近  
(西から)



g区小穴完掘状態(南から)

図版9 R2調査区(メノト遺跡)



貯蔵穴検出状態：SP08



貯蔵穴検出状態：SP3~5



織物出土状態：SP13底部



織物出土状態：織物12



織物出土状態：織物31



織物出土状態：織物34

図版10 R2調査区（栗下遺跡）



b区遺構完掘状態（南から）



b区遺構完掘状態（北西から）



b区遺構完掘状態（東から）

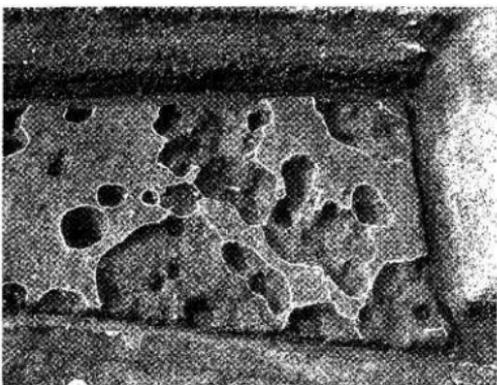
図版11 R2調査区（栗下遺跡）



d区遺構完掘状態（西から）

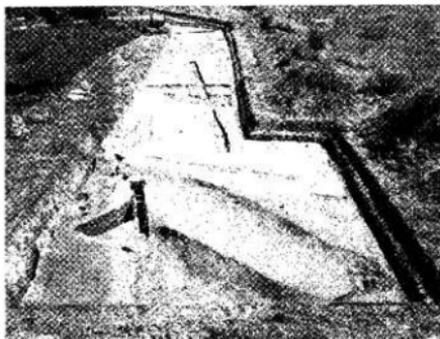


SP130・131 土器出土状態  
（南から）



d区遺構集中域（南から）

図版12 R3調査区（メノト遺跡）



調査地全景（西から）



溝状遺構完掘状態（北から）



調査区全景（東から）

図版13 D5調査区 (メノト遺跡)



g区遺構完掘状態(西から)



g区遺構完掘状態(東から)

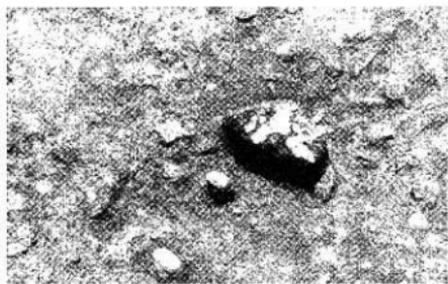


石棒出土状態(北から)

図版14 D5調査区（H11年度追加調査）



調査区全景（南から）



S X01 遺物出土状態（北から）

図版15 D5調査区 (H11年度追加調査)



S X01 完掘状態 (北から)



S F01 完掘状態 (南から)

図版16 貯蔵穴11(S P11)内部編物の状態



# 図版17



貯蔵穴11(S P11)内部  
底部隅の状態



貯蔵穴11(S P11)内部  
底部の状態



貯蔵穴11(S P11)内部  
側面編物の重複部分

図版18



貯蔵穴8 (SP08)内部  
側面編物



編物12-1



編物13-2・3

図版19 出土遺物：編物



編物13-2



編物13-3



編物12-2



編物2-2



編物4



編物2-1



19-1



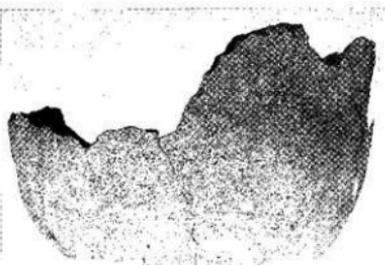
19-1



19-3



19-4



19-5



19-6



22-20



26-26



24-1



31-26

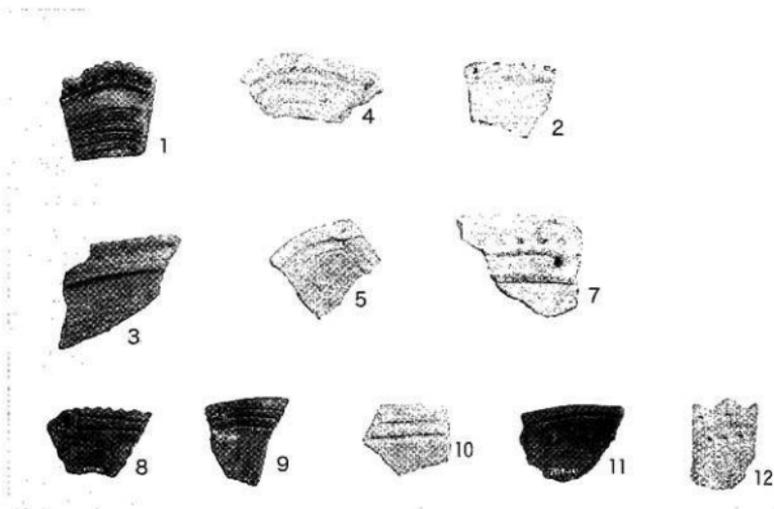


31-29

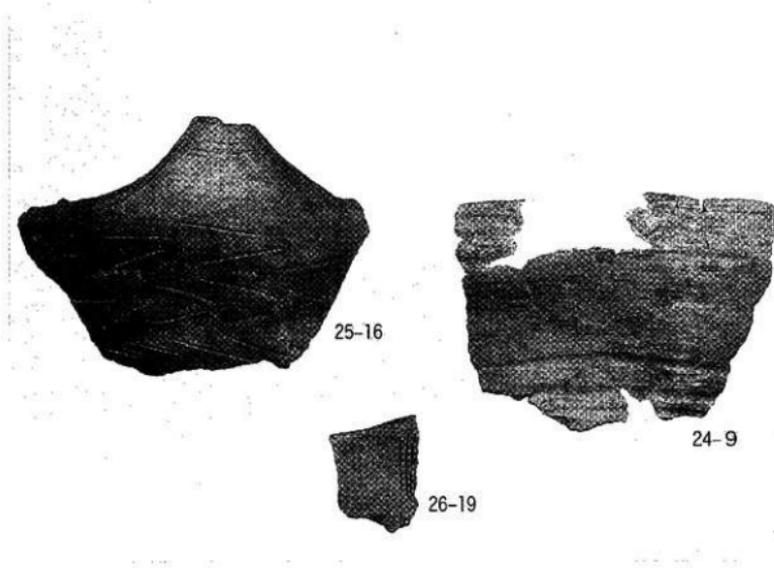


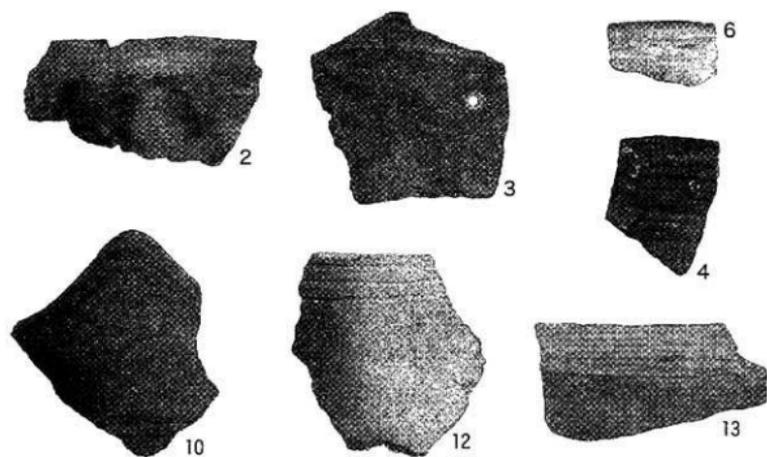
31-29

図版22 出土遺物：縄文土器3

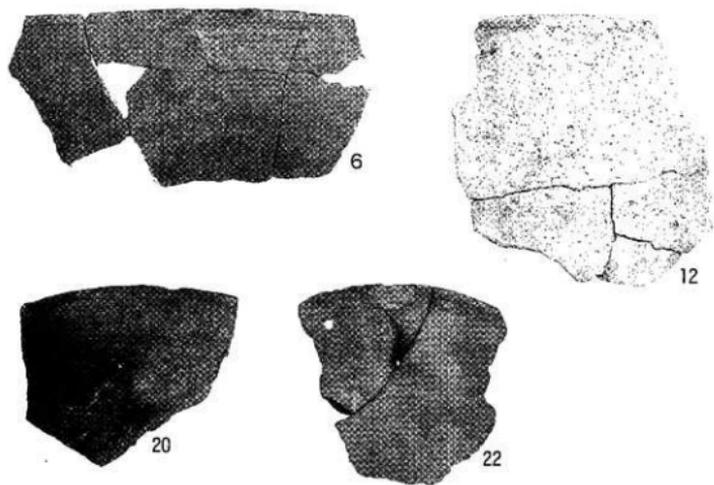


第23図掲載土器



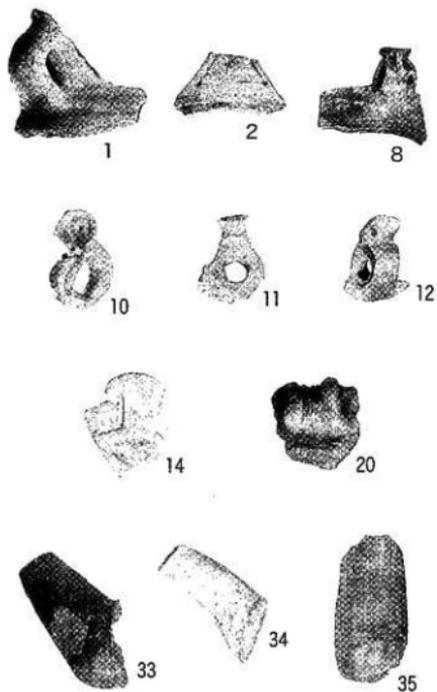


第24図縄文土器



第28図縄文土器

図版24 出土遺物：縄文土器 5・土製耳飾り



第31図掲載土器



土製耳飾り

図版25 出土遺物：石器 1（栗下遺跡）



32-3



32-12



32-18

石鏃（黒曜石）



1



2



4



5



6



7



8



9



10



11



13



14



15



16



17



19



20



21



22

第32図掲載  
石鏃・石錐



1



2



3



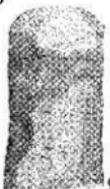
4



5



6



9



10



7



8



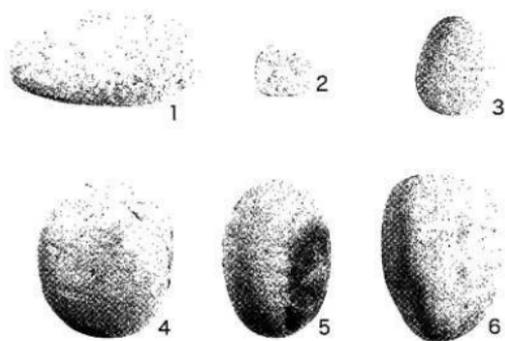
11



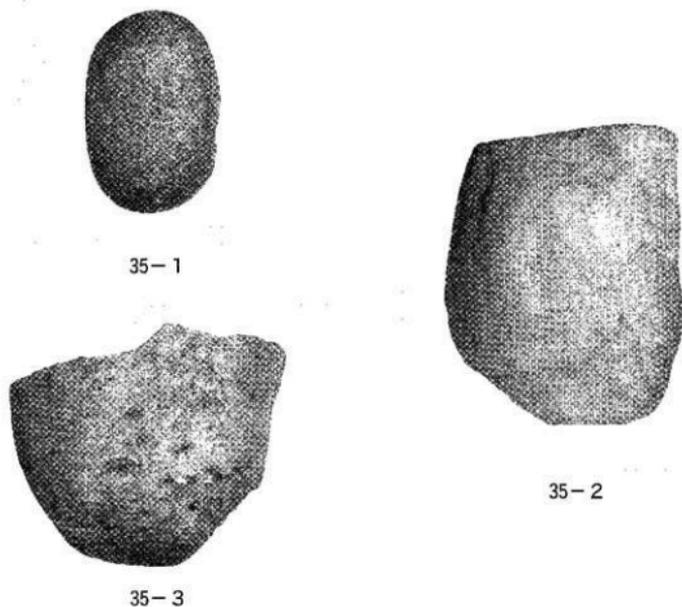
12

第33図掲載  
打製石斧・磨製石斧

図版26 出土遺物：石器2（栗下遺跡）



第34図掲載 石冠・礫石器類



図版27 出土遺物：石器3（メノト遺跡）



36-4



36-11



36-13

石鏃（黒曜石）



1



2



3



5



6



7



8



9



10



12



14



15



16



17



18



19



20



21

第36図掲載 石鏃・石匙・両極石器・削器



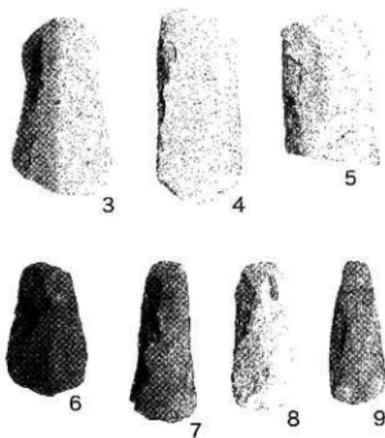
37-1



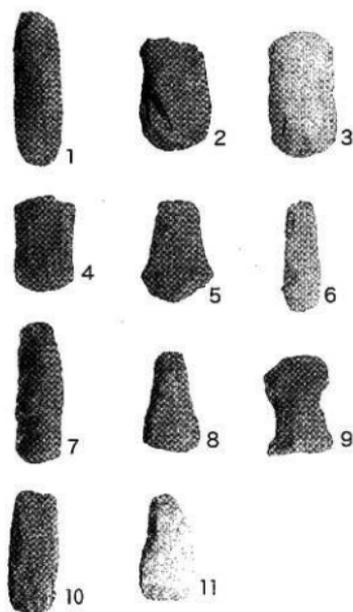
37-2

削器

図版28 出土遺物：石器4（メノト遺跡）

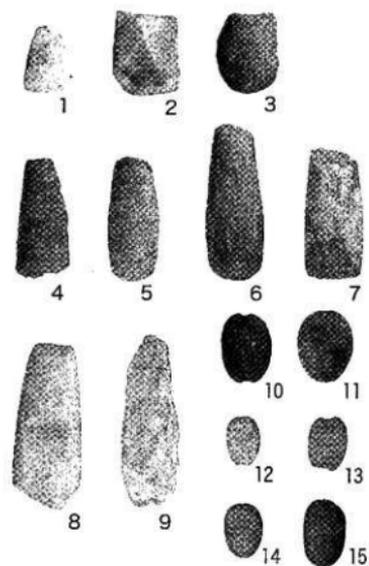


第37図掲載 打製石斧

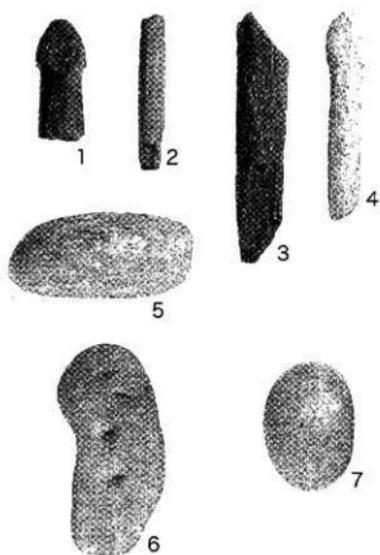


第38図掲載 打製石斧

図版29 出土遺物：石器5（メノト遺跡）

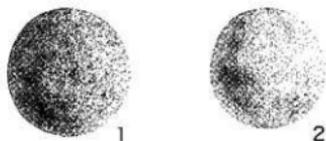


第39図掲載  
磨製石斧・石錘

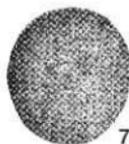


第40図掲載  
石棒・石刀・石冠・礫石器

図版30 出土遺物：石器6（メノト遺跡）



第42図掲載 礫石器



第41図掲載 礫石器



42-4



42-5



42-3

出土遺物：陶器（栗下遺跡）



43-2



43-6

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	やさかべつしよいせき・かしらじいせき・くりしたいせき・めのといせき							
書 名	八坂別所遺跡・頭地遺跡・栗下遺跡・メノト遺跡							
副 書 名	県営農地総合開発整備事業東山I地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
編 著 者 名	大熊茂広							
編 集 機 関	掛川市教育委員会							
所 在 地	〒436-8650 静岡県掛川市長谷1丁目1番地の1 TEL(0537)21-1158							
発 行 年 月 日	西暦2006年3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	所 在 地	コ ー ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
八坂別所遺跡	静岡県掛川市 八坂	22213	K-483	34度 47分 43秒	138度 04分 22秒	1995年12月 ～ 1996年3月	1,232㎡	県営農地 整備工事
頭地遺跡	静岡県掛川市 八坂		K-482	34度 47分 34秒	138度 04分 26秒	1997年1月 ～ 1997年7月	900㎡	
栗下遺跡	静岡県掛川市 八坂		K-335	34度 47分 34秒	138度 04分 32秒	1997年12月 ～	837㎡	
メノト遺跡	静岡県掛川市 八坂		K-329	34度 47分 24秒	138度 04分 30秒	1999年5月	1,350㎡	
所収遺跡名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物		特 記 事 項		
八坂別所遺跡	集落跡	弥生時代 古墳時代 古代  中世 近世	掘立柱建物跡 溝状遺構、小穴  溝状遺構、小穴 茶毘痕	土器 土器 土器、瓦塔  土器				
頭地遺跡	集落跡	古代 中世	掘立柱建物跡、 溝状遺構、小穴	土器 土器				
栗下遺跡	集落跡	縄文時代 中・近世	竪穴状遺構、小穴 溝状遺構、小穴	土器、石器 土器				
メノト遺跡	集落跡	縄文時代 中世	小穴、貯蔵穴 小穴	土器、石器、編物製品 土器		内部に編物を使用 した縄文時代後期 末の堅果類貯蔵穴 を検出		

**八坂別所遺跡・頭地遺跡・栗下遺跡・メノト遺跡**

県営農地総合開発整備事業東山口地区  
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2006年3月24日発行

発 行 掛川市教育委員会  
静岡県掛川市長谷一丁目1番地の1  
TEL 0537-21-1158

印 刷 松本印刷株式会社  
静岡県袋井市方丈3丁目3の11  
TEL 0538-43-6300

